らせ給へり。院の御心よせもあればなるべし。出で給ふほど大將殿よりれいの盡させぬとども聞え給へり。「かけまくも畏きおまへに」とて木綿につけて「なる神だにこそ、八洲もる國つ御神もこゝろあらば飽かぬわかれの中をことわれ。思ひ給ふるに飽かぬ心地し侍るかな」とあり。いとさわがしきほどなれど御かへりあり。宮のおほんをばによ別當して書かせ給へり。

「國つ神そらにことわる中ならばなほざりごとをまづやたゞさむ」大將は御有樣ゆかしうて內裏にも參らまほしうおぼせど、うち棄てられて見送らむも人わろき心地し給へば、おぼしとまりて徒然にながめ居給へり。宮の御返りのおとなおとなしきをほゝゑみて見居給へり。御年のほどよりはをかしうもおはすべきかなとたゞならず、かやうにれいに違へる頻はしさに必ず心かゝる御癖にていと能う見奉りつべかりし、いはけなき御程を見ずなりぬることゝ妬けれ、世の中さだめなければたいめするやうもありなむかしなどおぼす。心にくゝよしある御けはひなれば物見車多かる日なり。申の時にうちに參り給ふ。御息所御輿に乘り給へるにつけても、父おとゞのかぎりなきすぢにおぼし心ざしていつき奉り給ひし有樣かはりて末の世に內を見給ふにも物のみつきせずあはれにおぼさる。十六にて故宮に參り給ひて、はたちにて後れ奉り給ふ。三十にてゞ今日また九重を見給ひける。

「そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちにものぞかなしき」齋宮は十四にぞなり給ひける。いと美しうおはするさまをうるはしうしたて奉り給へるぞいとゆゝしきまで見

え給ふを、帝御心動きて別れの御櫛奉り給ふ。いとあはれにてしほたれさせ給ひぬ。出で給ふを待ち奉るとてはせうに立て續けたるいだし車どもの袖口色あひも目慣れぬさまに心惜き氣色なれば、殿上人どもゝ私のわかれ惜む多かり。闇う出で給ひて、二條よりどうゐの大路を折れ給ふほど二條院の前なれば大將の君いとあはれにおぼされて、榊にさして、

「ふりすてゝ今日は行くとも鈴鹿川やそせのなみに袖はぬれじや」と聞え給へれど、いと闇う物騒がしき程なればまたの日關のあなたよりぞ御返しある、

「鈴鹿川八十瀨の浪にぬれぬれずいせまでたれか思ひおこせむ」ことそぎて書き給へるしも御手いとよしよししくなまめきたるにあはれなるけを少し添へ給へらましかばとおぼす。霧いたう降りてたゞならぬ朝けにうちながめてひとりごちおはす。

「行くかたをながめもやらむこの秋は逢坂山をきりなへだてそ」。西の對にも渡り給はで人やりならず物淋しげに眺め暮し給ふ。まして旅の空はいかに御心づくしなる事多かりけむ。』院の御惱み神無月になりてはいと重く坐します。世の中に惜み聞えぬ人なし。內にも聖し嘆きて行幸あり。弱き御心地にも春宮の御事をかへすがへす聞えさせ給ひて次には大將の御事「侍りつる世にかはらず大小の事を隔てず、何事も御うしろみとおぼせ。齡の程よりも代をまつりごたむにもをさをさはゞかりあるまじうなむ見給ふる。必ず世の中保つべき相ある人なり、さるによりて煩はしさにみこにもなさずたゞ人にておぼやけの御後見をせ

させむと思ひ給へしなり。その心違へさせ給ふなにとあはれなる御ゆゑごんども多かりけれど、女のまねぶべき事にしあらねばこの片端だにかたはらいたし。帝もいと悲しとおぼして更に違へ聞えさすまじきよしをかへすがへす聞えさせ給ふ。御かたちもいと清らにねびまさらせ給へるを嬉しく頼もしく見奉らせ給ふ。限あれば急ぎ還らせ給ふにもなかなかなる事多くなむ。春宮もひとたびにとおぼし召しけれど物さわがしきにより日を更へて渡らせ給へり。御年の程よりはおとなび美しき御さまにて戀しと思ひ聞えさせ給ひけるつもりに、何心もなく嬉しとおぼして見奉り給ふ御氣色いとあはれなり。中宮は涙に沈み給へるを、見奉らせ給ふにもさまざま御心亂れておぼし召さる。萬の事を聞え知らせ給へどいと物はかなき御ほどなればうしろめたく悲しう見奉らせ給ふ。大將にもおほやけに仕うまつり給ふべき御心づかひこの宮の御後見し給ふべきことを返す返すのまなはす。夜更けてぞ歸らせ給ふ。殘る人なく仕うまつりてのゝしるさま行幸に劣るけぢめなし。他かぬ程にて還らせ給ふをいみじうおぼし召す。おほきさきも參り給はむとするを中宮のかく添ひおはするに御心置かれておぼしやすらふ程に、おどろおどろしきさまにもおはしまさでかくれさせ給ひぬ。足を空に思ひ惑ふ人多かり。御位を去らせ給ふといふばかりにこそあれ、世の政をしづめさせ給へることも我が御世の同じごとにておはしまいつるを、帝はいと若うおはします、おほぢおとゝいと急にさがなうおはしてその御まゝになりなむ世をいかならむと、上達部殿上人皆思ひなげく。中宮大將殿などはましてすぐれて物もおぼしわかれず。後々の御わざ

などけうじ仕うまつり給ふさまもそこらの御子たちの御中にすぐれ給へるをことわりながらいとあはれに世の人も見奉る。藤の御ぞにやつれ給へるにつけても限なく清らに心苦しげなり。こぞ今年とうちつゞきかゝることを見給ふに世もいとあぢきなうおぼさるれば、かかる序にもまづおぼし立たるゝことはあれど又樣々の御ほだしおほかり。御なゝなぬかまでは女御みやす所たち皆院に集ひ給へりつるを、過ぎぬればちりぢりにまかでたまふ。十二月の二十日なれば大方の世の中とぢむる空の氣色につけてもまして晴るゝ世なき中宮の御心のうちなり。おほきさきの御心をも知り給へれば心に任せ給へらむ世のはしたなく住み憂からむをおぼすよりも、馴れ聞え給へる年比の御有樣を思ひ出で聞え給はぬ時のまなきに、かくてもおはしますまじう皆ほかほかへと出で給ふ程に、悲しき事かぎりなし。宮は三條の宮に渡り給ふ。御むかへに兵部卿の宮參り給へり。雪うち散り風烈しうて院の内やうやう人めかれゆきてしめやかなるに、大將殿こなたに參り給ひて舊き御物語きこえ給ふ。おまへの五葉の雪にまがれて下枝枯れたるを見給ひて、みこ。

「かげひろみたのみし松や枯れにけむ下葉散りゆく年のくれかな」何ばかりのとにもあらぬに折から物あはれにて、大將の御袖いたうぬれぬ。池のひまならこほれるに、

「さえわたる池の鏡のさやけさに見なれしかげを見ぬぞかなしき」とおぼすまゝにあまり若々しうぞあるや。王命婦、

「年暮れて岩井の水もこほりとぢ見し人かげのあせも行くかな」そのついでにいと多か

れどさのみ書き續くべきことかは。渡らせ給ふ儀式變らねど、思ひなしにあはれにてふるさ宮はかへりて旅の心地し給ふにも御里住絶えたる年月のほどおぼしめぐらさるべし。年かへりぬれど世の中今めかしきとなく靜なり。大將殿は物憂くて籠り居給へり。ぢもくの頃など院の御時をば更にもいはず、年比劣るけぢめなくて帝のわたり所なく立ち込みたりし馬車薄らぎて、とのゐ物の袋をさをさ見えず、親しきけいしばかり殊に急ぐことなげにてあるを見給ふにも、今よりはかくこそはと思ひやられてものすさまじくなむ。みくしげどのはさらぎにないしのかみになり給ひぬ。院の御思ひにやがて尼になり給へるかはりなりけり。やんごとなくもてなして人柄もいと善くおはすればあまた參り集り給ふ中にも優れて時めき給ふ。后は里がちにおはしまいて參り給ふ時の御局には梅壺をしたれば、弘徽殿にはかんの君住み給ふ。登花殿のうもれたりつるに晴ればれしうなりて女房なども數知らず集ひ參りて今めかしう花やぎ給へど、御心のうちは思の外なりし事どもを忘れ難う嘆き給ふ。いと忍びて通はし給ふことは猶同じさまなるべし。物の聞えもあらばいかならむとおぼしながら例の御癖なれば今しも御志まさるべかめり。院のおはしましつる世こそ憚り給ひつれ、后の御心いちはやくてかたがたおぼしつめたることどもの報せむとおぼすべかめり。事に觸れてはしたなき事のみ出で來ればかゝるべき事とはおぼしゝかど、見知り給はぬ世のうさに立ちまふべくもおぼされず。左のおほいとのもすさまじき心地し給ひて殊にうちにも參り給はず。故姫君を引きよぎてこの大將の君に聞えつけ給ひし御心を、后はおぼしおきて宜し

うも思ひ聞え給はず。おとゞの御中も素よりそばそばしうおはするに、故院の御世には我儘におはせしを時移りてしたり顔におはするを、あぢきなしとおぼしたることわりなり。大將はありしに變らず渡り通ひ給ひて侍ひし人々をもなかなかにこまかにおぼしおきて若君をかしづき思ひ聞え給へると限なければ、あはれにありがたき御心といとゞいたづき聞え給ふとども同じさまなり。限なき御覺えのあまり物騷しきまで暇なげに見え給ひしを、通ひ給ひし所々も方々に絶え給ふ事どもあり。かるがるしき御忍びありきもあいなう覺しなりて殊にし給はねばいとのどやかに今しもあらまほしき御有樣なり。西の對の姫君の御幸を世の人もめで聞ゆ。少納言なども人知れず故尼上の御祈のしるしと見奉る。父みこも思ふさまに聞えかはし給ふ。むかひ腹の限なくとおぼすはかばかしうもえあらぬにねたげなると多くてまゝ母の北の方は安からずおぼすべし。物語に殊更に作り出でたるやうなる御有樣なり。齋院は御ぶくにており居給ひにしかば、朝顏の姫君はかはりに居給ひにき。加茂のいつきには、そわうの居給ふれい多くもあらざりけれどさるべき女みこやおはせざりけむ。大將の君年月經れど猶御心離れ給はざりつるを、かうすぢことになり給ひぬれば口惜しとおぼす。中將に音づれ給ふ事も同じごとにて御文などは絶えざるべし。昔に變る御有樣などをば殊に何ともおぼしたらず、かやうのはかなし事どもを、紛るゝことなきまゝに此方彼方とおぼし惱めり。帝は院の御ゆゐごん違へずあはれにおぼしたれど若うおはしますうちにも御心なよびたる方に過ぎて强き所おはしまさぬなるべし。母きさきおぼきおとゞとりど

りにし給ふことはえ背き給はず。代のまつりごと御心にかなはぬやうなり。煩はしさのみ増れどかんの君は人知れぬ御心ざし通へば、わりなくてもおぼつかなくはあらず。五壇のみず法のはじめにて慎みおはしますひまを伺ひて例の夢のやうに聞え給ふ。かの昔おぼえたる細殿の局に、中納言の君まぎらはして入れ奉りたり。人めも繁き頃なれば常よりも端近なるをそらおそろしうおぼゆ。朝夕に見奉る人だに飽かぬ御さまなればまして珍しき程にのみある御たいめのいかでかはおろかならむ。女の御さまもげにめでたき御盛なる。おもりかなるかたはいかゞあらむ、をかしうなまめきわかびたる心ちして見まほしき御けはひなり。程なく明けゆくにやと覺ゆるに「唯こゝにしもとのゐ申し侍ふ」とこわづくるなり。又このわたりにかくろへたる近衛司ぞあるべき。腹穢きかた人の敎へおこするぞかしと大將は聞き給ふ。をかしきものからわづらはし。此處彼處尋ねありきて「寅ひとつ」と申すなり。女君、「心からかたがた袖をぬらすかなあくとをしふる聲につけても」とのたまふさま、はかなだちていとをかし。

「なげきつゝ我身はかくて過ぐせとやむねのあくべき時ぞともなく」まづ心なくて出で給ひぬ。夜深き曉づく夜のえもいはずきり渡れるにいといたう寢れてふるまひなし給へるしも似る物なき御有樣にて、じようさやう殿の御せうとの頭中將、藤壺より出でい月の少し隈ある立部のもとに立てりけるを知らで過ぎ給ひけむこそいとほしけれ。もどき聞ゆるやうもありなむかし。かやうのことにつけてももてはなれつれなき人の御心をかつはめでたし

と思ひ聞え給ふものから我心のひく方にては猶つらう心憂しと覺え給ふ折多かり。内に參り給はむことはうひうひしく所せくおぼしなりて、春宮を見奉り給はぬを覺束なくおもほえ給ふ。又たのもしき人も物し給はねば、唯この大將の君をぞ萬に頼み聞え給へるに猶このにくき御心の止まぬにともすれば御胸を潰し給ひつゝ聊も氣色を御覽じ知らずなりにしを思ふだにいと恐しきに、今更に又さることの聞えありて我身はさるものにて春宮の御ために必ず善からぬ事出で來なむとおぼすに、いとおそろしければ御祈をさへせさせ給ひて、このことと思ひ止ませ奉らむとおぼし至らぬことなく遁れ給ふを、如何なる折にかありけむ、あさましうて近づき參り給へり。心深くたばかり給ひけむことを知る人なかりければ夢のやうにぞありける。まねぶべきやうもなく聞え續け給へど、宮いとこよなくもてはなれ聞え給ひてはてはては御胸をいたう惱み給へば、近う侍ひつる命婦辨などぞあさましう見奉りあつかふ。男はうしつらしと思ひ聞え給ふと限なきにきしかた行くさきかきくらす心地してうつし心も失せにければ明けはてにけれど出で給はずなりぬ。御惱に驚きて人々近う參りてまげうまがへばわれにもあらで塗ごめに押し入れられておはす。御ぞども隱しもたる人の心などもいとむつかし。宮は物をいと侘しとおぼしけるに御けあがりて猶惱しうせさせ給ふ。兵部卿宮大夫など參りて「僧召せ」などさわぐを、大將いと侘しう聞きおはす。辛うじて暮れゆくほどにぞ怠り給へる。かく籠り居給ひつらむとはおぼしもかけず、人々も又御心まどはさじとてかくなむとも申さぬなるべし。晝のおましにゐざり出でゝおはします。「よ

ろしうおぼさるゝなめりとて宮もまかで給ひなどしておまへ人ずくなになりぬ。例もけぢかくならさせ給ふ人少ければ此處彼處の物のうしろなどにぞ侍ふ。命婦の君などはいかにたばかりて出し奉らむ「今宵さへ御けあがらせ給はむいとほしう」などうちさゝめきあつかふ。君は塗ごめの戸の細目に開きたるをやをら押し開けて御屏風のはざまに傳ひ入り給ひぬ。珍しく嬉しきにも涙は墮ちて見奉り給ふ。「猶いと苦しうこそあれ、世やつきぬらむ」とてとの方を見出し給へるかたはらめ言ひしらずなまめかしう見ゆ。「御くだものをだに」とて參りすゑたり。箱の蓋などにも懷しきさまにてあれど見入れ給はず。世の中をいたうおぼし惱める氣色にて長閑に眺め入り給へる、いみじううらうたげなり。かんざし頭つきみぐしのかゝりたるさま限なきにほはしさなど、唯かの對の姫君に違ふ所なし。年比少し思ひ忘れ給へりつるをあさましきまでおぼえ給へるかなと見給ふまゝに少し物思ひのはるけ所ある心地し給ふ。け高う耻しげなるさまなども更にこと人と思ひわき難きを、なほ限なく昔より思ひしめ聞えてし心の思ひなしにや、さまことにいみじうねびまさり給ひにけるかなと類なくおぼえ給ふに心惑ひしてやをら御張の内にかゝづらひよりて御ぞの褄を引きならし給ふ。けはひしるくさとにほひたるにあさましうむくつけうおぼされて、やがてひれふし給へり。「見だに向き給へかし」と心やましうつらくてひき寄せ給へるに、御ぞをすべし置きてゐざりのき給ふに、心にもあらずみぐしの取り添へられたりければ、いと心憂くすくせの程おぼし知られていみじとおぼしたり。男もこゝら世をもてなづめ給ふ御心皆亂れてうつ

じざまにもあらず萬の事をなくなく恨み聞え給へど、誠に心づきなしとおぼして御いらへも聞え給はず「唯心地のいと惱しきをかゝらぬ折もあらば聞えてむ」とのたまへど盡させぬ御心の程を言ひ續け給ふ。さすがにいみじと聞き給ふふしもまじるらむ。あらざりしとにはあらねど改めていと口惜しうおぼさるれば懷しきものからいとようのたまひ遁れて今宵も明けゆく。せめて從ひ聞えざらむもかたじけなく心耻しき御けはひなれば「唯かばかりにても時々いみじき變へをだに晴け侍りぬべくは、何のおほけなき心も侍らじ」などたゆめ聞え給ふべし。なのめなるとだにかやうなるなからひはあはれなることも添ふなるをまして類ひなげなり。明けはつれば二人していみじき事どもを聞え、宮はなかばなきやうなる御氣色の心苦しければ、世の中にありと聞し召されむもいとはづかしければやがて亡せ侍りなむも又この世ならぬ罪となり侍りぬべきことなど聞え給ふも、むくつけきまでおぼし入れり。

「逢ふことのかたきを今日にかぎらずば今幾世をかなげきつゝ經む。御ほだしにもこそ」と聞え給へばさすがにうち歎き給ひて、

「長き世のうらみを人にのこしてもかつは心をあだとしらなむ」。はかなくいひなさせ給へるさまのいふよしなき心地すれど、人のおぼさむ所も我が御ためも苦しければわれにもあらで出で給ひぬ。いづこをおもてにかは又も見え奉らむ、いとほしとおぼし知るばかりとおぼして御文も聞え給はずうち絶えて内、春宮にも參り給はず、籠りおはして起き臥しいみじかりける人の御心かなと人わろく戀しう悲しきに心だましひも失せにけるにや惱しうさ

へおぼさる。物心細くなどや世にふればうさこそまされとおぼし立つには、この女君のいとらうたげにてあはれにうち頼み聞え給へるを振り捨てむといとかたし。宮もその名殘例にもおはしまさず、かうことさらめきて籠り居音づれ給はぬを命婦などはいとほしがり聞ゆ。宮も春宮の御ためをおぼすには御心置き給はむことといとほしく世をあぢきなきものに思ひなり給はゞひたみちにおぼし立つこともやと、さすがに苦しうおぼさるべし。かゝると絶えずばいとゞしき世にうき名さへもり出でなむ、大ささきのあるまじきことにのたまふなる位をも去りなむと、やうやうおぼしなる。院のおぼしのたまはせしさまのなのめならざりしをおぼし出づるにも、萬の事ありしにもあらず變り行く世にこそあめれ、戚夫人の見けむめのやうにこそあらずとも、必人笑へなることはありぬべき身にこそあめれなど、疎ましう過ぐし難うおぼさるれば、背きなむ事をおぼし取るに、春宮見奉らでおもかはりせむとあはれにおぼさるれば忍びやかにて參り給へり。大將の君はさらぬ事だにおぼし寄らぬ事なく仕うまつり給ふを、御心地惱しきにことづけて御送にも參り給はず。大方の御とぶらひは同じやうなれど「むげにおぼしくしにける」と心おるどちはいとほしがり聞ゆ。宮はいみじう美しうおとなび給ひて珍しう嬉しとおぼして、むつれきこえ給ふを悲しと見奉り給ふにもおぼし立つすぢはいと難げなれどうちわたりを見給ふにつけても世の有樣あはれにはかなく移り變るとのみ多かり。大ささきの御心もいと煩はしくて出で入り給ふにもはしたなく事に觸れて苦しければ、宮の御ためにも危くゆゝしう萬につけておぼしみだれて、御覽ぜで

久しからむほどにかたちのことざまにてうたてげに變りて侍らばいかゞおぼさるべき」と聞え給へば、御顏をうちまもり給ひて「式部がやうにやいかでかさはなり給はむ」と笑みてのたまふ。いふかひなくあはれにて「それは老いて侍れば醜きぞ、さはあらで髮はそれよりも短くて黑ききぬなどを着て夜居の僧のやうになり侍らむとすれば見奉らむ事もいとゞ久しかるべきぞ」とて泣き給へば、まめだちて、「久しうおはせねば戀しきものを」とて涙のおつれば恥かしとおぼしてさすがに背き給へる、御ぐしはゆらゆらと淸らにてまみの懷しげに匂ひ給へるさま、おとなび給ふまゝに唯かの御顏をぬぎすべ給へり。御齒の少し朽ちて口の內黑みて笑み給へるかをり美しきさは女にて見奉らまほしう淸らなり。いとかうじも覺え給へるこそ心憂けれと玉の瑕におぼさるゝも、世の煩はしさゞそら恐しうおぼえ給ふなりけり。大將の君は宮をいと戀しう思ひ聞え給へどあさましき御心のほどを時々は思ひ知るさまにも見せ奉らむと念じつゝ過ぐし給ふに人わろくつれづれにおぼさるれば、秋の野も見給ひがてら、うりん院にまうで給へり。故母みやす所の御せうとの律師の籠り給へる坊にて法もんなど讀み、行ひせむとおぼして二三日おはするにあはれなる事多かり。紅葉のやうやう色づきわたりて秋の野のいとなまめきたるなど見給ひつゝ故郷も忘れぬべくおぼさる。法師ばらのさえあるかぎり召し出でゝ論義せさせて聞し召させ給ふ。所がらにいとゞ世の中の常なきをおぼし明しても、猶うき人しもぞとおぼし出でらるゝ。おしあけ方の月影に法師ばらの閼伽奉るとてからからと鳴しつゝ菊の花、濃き薄き紅葉など折りちらしたるも

はかなけれど、この方のいとなみはこの世もつれづれならず後の世はたたのもしげなり。さもあぢきなき身をもて惱むかななど、おぼし續け給ふ。律師のいと尊き聲にて念佛衆生接取不捨とうち述べて行ひ給へるがいとうらやましければ、なぞやとおぼしなるにまづ姫君の心にかゝりて思ひ出でられ給ふぞいとわろき御心なるや。例ならぬ日數もおぼつかなくのみおぼさるれば御文ばかりぞ繁う聞え給ふめる。「行き離れぬべしやと試み侍る道なれどつれづれも慰めがたう心ぼそさまさりてなむ。聞きさしたるとありてやすらひ侍るほどをいかに」などみちのくに紙にうちとけ書き給へるさへぞめでたき。

「あさぢふの露のやどりに君をおきてよものあらしぞしづ心なき」などこまやかなるに女君もうち泣き給ひぬ。御かへし白き色紙に、

「風吹けばまづぞみだるゝ色かはる淺茅がつゆにかゝるさゝがに」とあり。「御手はいとをかしうのみなりまさるものかな」とひとりごちて美しとほゝゑみ給ふ。常に書きふはし給へば我が御手にいと能く似て今少しなまめかしう女しき所書き添へ給へり。何事につけてもけしうはあらずおぼしたてたりかしとおもほす。吹きかふ風も近き程にて齋院にも聞え給ひけり。中將の君に「かく旅の空になむ物思ひにあくがれにけるをおぼし知るにもあらじかし」など恨み給ひて、おまへには、

「かけまくはかしこけれどもそのかみの秋おもほゆる木綿襷かな。昔を今にと思ひ給ふるにもかひなくとり返されむものゝやうに」となれなれしげにからの淺緑の紙に、榊に木綿

つけなどかうがうしうしなして參らせ給ふ。御かへり、中將「紛るゝことなくてきしかたの事を思ひ給へ出づるつれづれのまゝには思ひやり聞えさすると多く侍れどかひなくのみなむ」と少し心とゞめておほかり。おまへのは木綿のかたはしに、

「そのかみやいかゞはありしゆふだすき心にかけて忍ぶらむゆゑ。近き世に」とぞある。御手てまやかにはあらねどらうらうしうさうなどをかしうなりにけり。まして朝顏もねびまさり給へらむかしと思ひ遣るもたゞならず。おそろしや。あはれこの頃ぞかし。野の宮のあはれなりしとおぼし出でゝ怪しうやうのものと、神うらめしうおぼさるゝ御癖のみ苦しきぞかし。わりなうおぼさばさもありぬべかりし、年比は長閑に過ぐし給ひて今は悔しうおぼさるべかめるもあやしき御心なりや。院もかくなべてならぬ御心ばへを見知り聞え給へれば、たまさかなる御返しなどはえしもてはなれ聞え給ふまじかめり。少しあいなき事なりかし。六十卷といふ文讀み給ひ覺束なき所々解かせなどしておはしますを山寺にはいみじき光行ひ出し奉れりと佛の御面目ありとあやしの法師ばらまで喜びあへり。まめやかにて世の中をおもほし續くるに歸らむと物憂かりぬべけれど、人ひとりの御事おぼしやるがほだしなれば久しうもえおはしまさで寺にもみず經いかめしうせさせ給ふ。あるべきかぎりかみしもの僧どもそのわたりの山がつまで物たび尊き事のかぎりを盡して出で給ふ。見奉り送るとてこのもかのもにあやしきしはふるひ人ども集り居て涙をおとしつゝ見奉る。黑き御車の内にて藤の御袂にやつれ給へれば殊に見え給はねどほのかなる御有樣を世にな

く思ひ聞ゆべかめり。』女君は日比の程にねびまさり給へる心地していといたう志づまり給ひて、世の中いかゞあらむと思へる氣色の心苦しうあはれにおぼえ給へば、あいなき心のさまざま亂るゝやまるからむ。色かはるとありしもらうたうおぼえて常より殊に語らひ聞え給ふ。山つどにもたせ給へりし紅葉、おまへのに御覽じくらぶれば殊にそめましける露の心も過ぐしがたう、覺束なさも人わろさまでおぼえ給へば唯大方にて宮に參らせ給ふ。命婦の許に「入らせ給ひにけるを珍しき事とうけ給はるに宮のあひだの事覺束なくなり侍りにければ、靜心なく思ひ給へながら行ひも勤めむと思ひ立ち侍りし日數を心ならずやとてなむ日比になり侍りける。紅葉は一人見侍るに錦くらう思ひ給ふればなむ。折よくて御覽ぜさせ給へ」などあり。げにいみじき枝どもなれば御目とまるに、例の聊なるものありけり。人々見奉るに御顏の色もうつろひて、猶かゝる心の絶え給はぬこそいとうとましけれ、あたら思遣り深うものし給ふ人のゆくりなくかやうなると折々まぜ給ふを人もあやしと見るらむかしと、心つきなうおぼされて、瓶にさゝせて廂の柱のもとにおしやらせ給ひつ。大方の事ども宮の御事に觸れたる事などはうち賴めるさまにすくよかなる御返りばかり聞え給へるを、さも心かしこく盡させずもとうらめしう見給へど、何事も後見聞えならひ給ひにたれば人怪しとみ咎めもこそすれとおぼして、まかで給ふべき日參り給へり。まづ內の御方に參り給へればのどやかにおはします程にて昔今の御物語聞え給ふ。御かたちも院にいとよう似奉り給ひて今少しなまめかしきけ添ひてなつかしうなごやかにぞおはします。かたみにあは

れと見奉り給ふ。かんの君の御とも猶絶えぬさまにきこしめし氣色御覽ずる折もあれど何かは今始めたる事ならばこそあらめ、ありそめにけることなればさも心かはさむに似げなかるまじき人のあはひなりかしとぞおぼしなして咎めさせ給はざりける。萬の御物語文の道の覺束なくおぼし召さるゝことどもなど問はせ給ひて、又すきずきしき歌がたりなどもかたみに聞えかはさせ給ふついでに、かの齋宮の下り給ひし日の事かたちのをかしうおはせしなど語らせ給ふに我もうち解けて野の宮のあはれなりしあけぼのも皆聞え出で給ひてけり。二十日の月やうやうさし出でゝをかしき程なるに「遊などもせまほしき程かな」とのたまはす。「中宮の今夜罷で給ふなるとぶらひにものし侍らむ。院ののたまはせおくと侍りしかば又後見仕うまつる人も侍らざめるに春宮の御ゆかりいとほしう思ひ給へられ侍りて」と奏し給ふ。「春宮をば今のみこになしてなどのたまはせ置きしかば、取り分きて心ざしものすれど殊にさしわきたるさまにも何事をかはとてこそ。年のほどよりも御手などのわざとかしこうこそ物し給ふべけれ。何事にもはかばかしからぬ自らのおもて起しになむ」とのたまはすれば「大方し給ふわざなどいとさとくおとなびたるさまに物し給へど、まだいとかたなりになむ」とその御有樣など奏し給ひてまかで給ふに、大宮の御せうとの藤大納言の子の頭の辨といふが世にあひ花やかなるわかうどにて思ふ事なきなるべし。妹の麗景殿の御方に行くに大將のみさきを忍びやかにおへば、しばし立ちとまりて「白虹日を貫けり。太子おぢたり」といとゆるらかにうちずじたるを、大將いとまばゆしと聞き給へど咎むべきこと

かは。ささきの御氣色はいと恐ろしう煩はしげにのみ聞ゆるを、かう親しき人々も氣色だちいふべかめる事どもゝあるに煩はしうおぼされけれどつれなうのみもてなし給へり。「御まへに侍ひて今までふかし侍りにける」と聞え給ふ。月の華やかなるに昔かやうなる折は御遊せさせ給ひて今めかしうもてなさせ給ひしなどおぼし出づるに、同じみ垣の内ながら變れること多くかなし。

「こゝのへにきりやへだつる雲の上の月をはるかに思ひやるかな」と命婦して聞え傳へ給ふ。御けはひもほのかなれど懷しう聞ゆるに、つらさも忘られてまづ涙ぞおつる。

「月かげは見し世の秋にかはらぬを隔つる霧のつらくもあるかな。霞も人のとか、昔も侍りける事にや」などきこえ給ふ。宮は春宮を他かず思ひ聞え給ひて萬の事を聞えさせ給へど、深うもおぼし入れたらぬをいとうしろめたく思ひきこえ給ふ。例はいととく大殿籠れるを出で給ふまでは起きたらむとおぼすなるべし。うらめしげにおぼしたれどさすがにえ慕ひ聞え給はぬをいとあはれと見奉り給ふ。大將は頭の辨のずしつるとを思ふに御心のおにゝ世の中頃はしうおぼえ給ひて、かんの君にも音づれきこえ給はで久しうなりにけり。初時雨いつしかとけしきだつにいかゞおぼしけむ、かれより、

「木枯の吹くにつけつゝ待ちしまにおぼつかなさのころも經にけり」と聞え給へり。折もあはれにあながちに忍び書き給へらむ御心ばへもにくからねば御使とゞめさせ給ひて、からのかみども入れさせ給へるみ厨子あけさせ給ひて、なべてならぬをえり出でつゝ筆など

も心とに引きつくろひ給へる氣色えんなるを、おまへなる人々誰ばかりならむとつきじろふ。「聞えさせても、かひなきものごりにこそ無下にくづほれにけれ、身のみものうきほどに、あひ見ずてしのぶるころの涙をもなべての秋のしぐれとや見る。心の通ふならばいかになながめの空も物忘れし侍らむ」などこまやかになりにけり。かやうに驚し聞ゆるたぐひ多かめれどなさけなからずうち返りごち給ひて御心には深うしまざるべし。』中宮は院の御はての事にうちつゞき御八講のいそぎをさまざまに心づかひせさせ給ひけり。しも月のついたちごろみこ忌なるに雪いたう降りたり。大將殿より宮に聞え給ふ。

「別れにしけふはくれども見し人に行きあふほどをいつとたのまむ」。いづこにも今日は物悲しうおぼさるゝほどにて御かへりあり。

「ながらふる程はうけれど行きめぐり今日はその世に逢ふ心ちして」殊につくろひてもあらぬ御書きざまなれどあてにけ高さは思ひなしなるべし。すぢがはり今めかしうはあらねど人にはことに書かせ給へり。今日はこの御事も思ひけちてあはれなる雪の雫にぬれぬれ行ひ給ふ。しはす十餘日ばかり中宮の御はからなり。いみじうたふとし。日々に供養せさせ給ふ。御經よりはじめ玉の軸羅の表紙ぢすのかぎりも世になきさまにとゝのへさせ給へり。さらぬことの清らだによのつねならずおはしませばまして、ことわりなり。佛の御かざり花机のおほひなどまでまことの極樂思ひやらる。初の日は先帝の御れう、次の日は母きさきの御ため、又の日は院の御れう、五卷の日なれば上達部なども世のつゝましさをえしも憚

かり給はでいとあまた參り給へり。今日のかうじは心ことにえらせ給へばたきゞこる程よりうち初め、同じういふ言の葉もいみじうたうとし。御子たちも、樣々のほうもち捧げてめぐり給ふに大將殿の御用意など猶似るものなし。常に同じとのやうなれども見奉る度ごとに珍しからむをばいかゞはせむ。はての日は我が御事をけち願にて世を背き給ふよし佛に申させ給ふに皆人々驚き給ひぬ。兵部卿の宮、大將の御心も動きてあさましとおぼす。みこはなかばの程に立ちて入り給ひぬ。心強う覺し立つさまをのたまひてはつる程に山の座主召じて忌む事うけ給ふべきよしのたまはす。御をぢの横川の僧都近う參り給ひてみぐしおろし給ふ程に、宮の内ゆすりてゆゝしう泣き滿ちたり。何となき老い衰へたる人だに今はと世を背く程は怪しうあはれなるわざを、ましてかねて御氣色にも出だし給はざりつる事なればみこもいみじう泣き給ふ。參り給へる人々も大方の事ざまもあはれに尊ければ皆袖ぬらしてぞ歸り給ひける。故院のみ子達は昔の御有樣をおぼし出づるにいとゞあはれに悲しうおぼされて皆とぶらひ聞え給ふを、大將は立ちとまり給ひて聞え出で給ふべき方もなくれ惑ひておぼさるれど、などかさしもと人見奉るべければみ子など出で給ひぬる後にぞお前に參り給へる。やうやう人まづまりて女房どもなど鼻うちかみつゝ所々に群れ居たり。月はくまなきに雪の光りあひたる庭の有樣も昔の事思ひやらるゝにいと堪へ難うおぼさるればいとようおぼしまづめて、「いかやうにおぼしたゝせ給ひてかう俄には」と聞え給ふ。「今始めて思ひ給ふるとにもあらぬを、物騷しさやうなりつれば心亂れぬべく」など例の命婦して聞え給ふ。みすの内のけはひそこら集ひ給ふ人のきぬの音なひまめやかにふるまひなしてうちみじろきつゝ悲しげさの慰め難げにもり聞ゆる氣色、ことわりにいみじと聞き給ふ。風烈しう吹きふゞきて、みすの中のにほひいと物深きくゆほうにしみてみやう香の煙もほのかなり。大將の御にほひさへかをりあひめでたく極樂思ひやらるゝよのさまなり。春宮の御使も參れり。のたまひしさま思ひ出で聞えさせ給ふにぞ御心強さも堪へ難うて御返りも聞えさせやらせ給はねば、大將ぞ言加へ聞えさせ給ひける。誰も誰もあるかぎり心をさまらぬ程なればおぼすとどもゝうち出で給はず。

「月のすむ雲井をかけてしたふともこの夜のやみに名をやまどはむ。と思ひ給へらるゝこそかひなくおぼし立たせ給へる羨しさはかぎりなう」とばかり聞え給ひて、人々近う侍へばさまざま亂るゝ心のうちをだにえ聞えあらはし給はずいぶせし。

「大かたのうきにつけては厭へどもいつかこの世をそむきはつべき。かつ濁りつゝ」など、かたへは御使の心しらひなるべし。あはれのみつきせねば胸苦しうてまかで給ひぬ。殿にても我が御方に一人うちふし給ひて、御目もあはず、世の中厭はしうおぼさるゝにも春宮の御事のみぞ心苦しき。母宮をだにおほやけざまにとおぼしおきてしを、世のうさに堪へずかくなり給ひにたればもとの御位にてもえおはせじ。我さへ見奉り捨てゝはなどおぼし明すことかぎりなし。今はかゝるかたざまの御調度どもをこそはとおぼせば、年の内にと急がせ給ふ。命婦の君も御供になりにければ、「それも心深うとぶらひ給ふ。委しう言ひつゞけむ

にことごとしきさまなれば、洩らしてげるなめり。さるはかうやうの折こそをかしき歌など出で來るやうもあれ、さうざうしや。まゐり給ふも今はつゝましさ薄らぎて御自ら聞え給ふ折もありけり。思ひしめてしことは更に御心に離れねどましてあるまじき事なりかし。年もかはりぬればうちわたり花やかに内宴蹈歌など聞き給ふにも物のみあはれにて、おほん行ひしめやかにし給ひつゝ後の世の事をのみおぼすにたのもしくむつかしかりし事離れておぼさる。常の御ねんず堂をばさるものにてことに建てられたる御堂の西の南にあたりて少し離れたるに渡らせ給ひて取りわきたる行せさせ給ふ。大將まゐり給へり。改まるまるしもなく宮の内のどかに人めまれにて宮づかさどもの親しきばかりうちうなだれて、見なしにやあらむくしいたげに思へり。あを馬ばかりぞ猶ひきかへぬものにて女房などの見ける。所せう參りつどひ給ひし上達部なども道をよきつゝひき過ぎてむかひのおほい殿に集ひ給ふを、かゝるべきことなればあはれにおぼさるゝに、千人にもかへつべき御さまにて深う尋ね參り給へるを見るにあいなく涙ぐまる。まらうどもいとものあはれなる氣色に、うち見まはし給ひてとみに物ものたまはず。さまかはれる御住まひにみすの端み几帳も青にびにてひまひまよりほの見えたる薄にびくちなしの袖口など、なかなかなまめかしう奥ゆかしう思ひやられ給ふ。解け渡る池の薄氷岸の柳の氣色ばかりは、時を忘れぬなどさまざまながめられ給ひて「むべも心あると」忍びやかに打ちずじ給へるまたなうなまめかし。

「ながめかる海士のすみかと見るからにまづしほたるゝ松が浦島」とさこえ給へば、奥深

うもあらず皆佛に讓り聞え給へるおまし所なれば少し氣近き心ちして、

「ありし世のなごりだになき浦島に立ちよる浪のめづらしきかな」とのたまふもほの聞ゆれば、忍ぶれど涙ほろほろとこぼれ給ひぬ。世を思ひすましたる尼君達の見るらむもはしたなければ言ずくなにて出で給ひぬ。「さも類なくねびまさり給ふかな。心もとなき所なく世に榮え時にあひ給ひし時はさるひとつものにて、何につけてか世をおぼし知らむと推し量られ給ひしを、今はいといたうおぼししづめてはかなき事につけてもものあはれなる氣色さへ添はせ給へるはあいなう心苦しうもあるかな」など老いしらへる人々うち泣きつゝめて聞ゆ。宮もおぼし出づる事多かり。司召の頃、この宮の人は賜はるべきつかさも得ず、大方のだうりにても宮の御たうばりにても必ずあるべき加階などをだにせずなどして歎くたぐひいと多かり。かくてもいつしかと御位を去りみふなどのとまるべきにもあらぬをことづけて變ると多かり。皆かねておぼし捨てゝし世なれど、宮人どもゝよりどころなげに悲しと思へる氣色どもにつけてぞ御心動く折々あれど、我身をなきになしても東宮の御代をたひらかにおはしまさばとのみおぼしつゝ御おこないたゆみなく勤めさせ給ふ。「人まれず危くゆゝしう思ひ聞え給ふ事しあればわれにその罪をかろめて免し給へ」と佛を念じ聞え給ふに萬を慰め給ふ。大將もしか見奉り給ひてことわりとおぼす。この殿の人どもゝ又同じさまに辛きことのみあれば、世の中はしたなくおぼされて籠りおはす。左のおとどもおほやけわたくしに引きかへたる世の有樣に物憂くおぼして致仕の表奉り給ふを帝は故院のやんごと

なく重き御後見とおぼして長き世のかためと聞え置き給ひし御ゆるごんをおぼし召すに、捨て難きものに思ひ聞え給へるにかひなき事と度々用ゐさせ給はねど、せめてかへさひ申し給ひて籠り居給ひぬ。今はいとゞひとぞうのみ返すがへす榮え給ふ事限なし。世のおもしと物じ給へるおとゞのかく世を遁れ給へば、おほやけも心ぼそうおぼされ世の人も心あるかぎりは歎きけり。御子どもはいづれともなく人がらめやすく世に用ゐられて心地よげに物じ給ひしを、こよなうおぼつまりて三位中將なども世を思ひおぼつめるさまこよなし。かの四の君をも猶かれかれに打ち通ひつゝめざましうもてなされたれば心解けたる御智の中にも入れ給はず、思ひ知れとにやこの度の司召にも漏れぬれどいとしも思ひ入れず。大將殿かうおぼつかにておはするに世ははかなきものと見えぬるをましてことわりとおぼしなして常に參り通ひ給ひつゝ學問をし遊をも諸共にし給ふ。いにしへも物ぐるほしきまで挑み聞え給ひしをおぼし出でゝ、かたみに今もはかなき事につけつゝさすがに挑み給へり。春秋のみど經をばさるものにて臨時にもさまざま尊き事どもをせさせ給ひなどして、又徒に暇ありげなる博士ども召し集めて文作り韻ふたぎなどやうのすさびわざどもをもおおなど心をやりて宮仕をもをさをさおぼ給はず、御心に任せてうち遊びておはするを、世の中には煩はしき事どもやうやう言ひ出づる人々あるべし。夏の雨のどかに降りてつれづれなるころ、中將さるべき集ども數多もたせて參り給へり。殿にも、ふ殿あけさせ給ひて、まだひらかぬみ厨子どもの珍しき古集のゆゑながらぬ少しえり出でさせ給ひて、その道の人々わざとはあらねどあ

また召したり。殿上人も大學のもいと多う集ひてひだりみぎにこまどりにかたわかたせ給へり。掛物どもなどいと二なくて挑みあへり。ふたぎもて行くまゝに難き韻の文字どもいと多くておぼえある博士どもなどの惑ふ所々を、時々うちのたまふさまいとこよなき御才の程なり。「いかでかうしも足らひ給ひけむ、猶さるべきにて萬の事人に勝れ給へるなりけり」とめで聞ゆ。遂に右まけにけり。二日ばかりありて中將まけわざおぼ給へり。ことごとしうはあらでなまめきたるひわりごども掛物などさまざまにて、今日も例の人々多く召して文しなど作らせ給ふ。はしのもとのさうび氣色ばかり咲きて春秋の花盛よりもおもしろきを、年老いたる博士どもなき程なるにうち解け遊び給ふ。中將の御子の今年始めて殿上する八つ九つばかりにて聲いとおもしろくさうの笛吹きなどするをうつくしみもて遊び給ふ。四の君腹の二郎なりけり。世の人の思へるよせ重くておぼえ殊にかしづけり。心ばへもかどかどしうかたちもをかしくて、御遊の少しみだれゆく程に高砂を出だしてうたふ、いとうつくし。大將の君御ぞぬぎてかづけ給ふ。例よりはうちみだれ給へる御顏のにほひ似るものなく見ゆ。うすもののなほしひとへを着給へるに透き給へる肌つきましていみじう見ゆるを、年老いたる博士どもなど遠く見奉りて涙落しつゝ居たり。「あはましものをさゆりばの」とうたふとぢめに中將御かはらけまゐり給ふ。

「それもかとけさひらけたるはつ花に劣らぬ君がにほひをぞ見る」。ほゝゑみて取り給ふ。

「時ならで今朝さく花は夏の雨にしをれにけらし匂ふほどなく。おとろへにたる物を」と

うちさうどきてらうがはしくきてし召しなすを咎め出でつゝ、強ひ聞え給ふ。多かめりし事どもかやうなる折のまほならぬ事數々に書きつくる心なさわざとか、貫之が諫めたうるゝ方にてむつかしければとゞめつ。皆この御事を譽めたるすぢにのみ倭のもからのも作り續けたり。我が御心地にもいたうおぼし奢りて「文王の子武王の弟」とうちずじ給へる御名のりさへぞげにめでたき。成王の何とかのたまはむとすらむ、そればかりや又心もとなからむ。兵部卿宮も常に渡り給ひつゝ御遊などもをかしうおはする宮なれば、今めかしき御あはひどもなり。』その頃かんの君罷で給へり。わらはやみに久しう惱み給ひてまじなひなども心やすくせむとてなりけり。ず法など始めて、怠り給ひぬれば誰も誰も嬉しうおぼすに、例の珍しきひまなるをと聞えかはし給ひてわりなきさまにてよなよなたいめし給ふ。いと盛に賑はゝしきけはひし給へる人の少しうち惱みて痩々になり給へる程いとをかしげなり。きさいの宮も一所におはする頃なればけはひいと恐ろしけれど、かゝる事しもまさる御癖なれば、いと忍びて度かさなり行けば氣色見る人々もあるべかめれど、煩はしうて宮にはさなむとは啓せず。おとゞはた思ひかけ給はぬに、雨俄におどろおどろしう降りて神いたう鳴りさわぐ曉に、殿のきんだちみやつかさなど立ちさわぎて此方彼方の人目まげく女房どもゝおぢ惑ひて近う集ひまゐるに、いとわりなく出で給はむ方なくて明けはてぬ。み帳のめぐりにも人々まげくなみ居たればいと胸つぶらはしく おぼさる。心まりの人二人ばかり心を惑はす。神なりやみ雨少しをやみぬるほとにおとゞ渡り給ひて、まづ宮の御方におはしける

を村雨のまぎれにてえまり給はぬに輕らかにふとはひ入り給ひてみす引き上げ給ふまゝに、「いかにぞいとうたてありつる夜のさまに、思ひやり聞えながら參り來でなむ、中將宮の亮など侍ひつや」などのたまふけはひのしたどにあはつけきを、大將は物のまぎれにも左のおとゞの御有樣ふとおぼしくらべられてたとしへなうぞほゝゑまれ給ふ。げに入りはてゝものたまへかしな。かんの君いと侘しうおぼさるゝにやと見給ひて「など御氣色の例ならぬものゝけなどのむつたるを猶惱ましうおぼさるゝにやと見給ひて「など御氣色の例ならぬものゝけなどのむつかしきをずほう延べさすべかりけり」とのたまふに、薄三藍なる帶の御ぞにまつはれて引き出でられたるを見つけ給ひて怪しとおぼすに、又たゝう紙の手習などしたる御几帳のもとに落ちたりけり。これは如何なるものどもぞと御心驚かれて、「かれはたれかぞ。氣色殊なるものゝさまかな。賜へ。それとりてたがぞと見侍らむ」とのたまふにぞ、うち見かへりてわれも見つけ給へる、紛はすべき方もなければいかゞはいらへ聞え給はむ。われにもあらでおはするを、子ながらも恥しとおぼすらむかしとさばかりの人はおぼし憚るべきぞかし。されどいと急にのどめたる所おはせぬおとゞのおぼしもまはさずなりて疊紙をとり給ふまゝに几帳より見入れ給へるに、いといたうなよびてつゝましからず添ひ臥したる男もあり。今ぞやをら顏引き隱してとかくまぎらはす。あさましう目ざましう心やましけれど、ひたおもてにはいかでか顯し給はむ。目もくるゝ心地すればその疊紙をとりて寢殿へ渡り給ひぬ。かんの君はわれかの心地して死ぬべくおぼさる。大將殿もいとほしう遂にようなきふるまひの

積りて人のもどきを負はむとするとおぼせど、女君の心苦しき御氣色をとかく慰め聞え給ふ。おとゞは思ひのまゝに籠めたる所おはせぬ本じやうにいとゞ老の御ひがみさへ添ひにたれば何事にかは滯り給はむ、ゆくゆくと宮にも憂へ聞え給ふ。「かうかうの事なむ侍るをこの盤紙は右大將の御手なり、昔も心免されてありそめにける事なれど、人柄に萬の罪を免してさても見むといひ侍りし折は心も留めずめざましげにもてなされにしかば安からず思ひ給へしかど、さるべきにこそはとて世に穢れたりともおぼし棄つまじきをたのみにてかくほいの如く奉りながら、猶そのはゞかりありてうけばりたる女御などもいはせ侍らぬをだに他かず口惜しう思ひ給ふるに、又かゝることさへ侍りければ更にいと心うくなむ思ひなり侍りぬる。男の例とはいひながら大將もいとけしからぬ御心なりけり。齋院をも猶聞え犯しつゝ忍びに御文通はしなどして氣色あることなど人の語り侍りしをも、世のためのみにもあらず我がためにもよかるまじき事なれば、よもさる思ひやりなきわざし出でられじとなむ、時のいうそくと天の下を靡かし給へるさまことなめれば大將の御心を疑ひ侍らざりつる」などのたまふに、宮はいとゞしき御心なればいとものしき御氣色にて「帝と聞ゆれど昔より皆人思ひおとし聞えて致仕のおとゞもまたなくかしづくひとつむすめをこのかみの坊にておはするには奉らで、弟の源氏にて稚きが元服のそひぶしにとりわき、又この君をも宮仕にと志して侍りしに、をこがましかりし有樣なりしを誰も誰もあやしとやおぼしたりし、皆かのみかたにこそ御心よせ侍るめりしを、そのほい違ふさまにてこそはかくても

侍ひ給ふめれど、いとほしさにいかでさる方にても人に劣らぬさまにもてなし聞えむ。さばかりねたげなりし人の見る所もありなどこそは思ひ侍りつれど、強ひて我心の入る方に靡き給ふにこそは侍らめ。齋院の御事はましてさもあらむ。何事につけてもおほやけの御方に後やすからず見ゆるは、春宮の御世心よせ異なる人なればことわりになむあめる」とすくずくしうのたまひ續くるにさすがにいとほしう、など聞えつる事ぞとおぼさるれば「さばれまばしこの事もらし侍らじ。内にも奏せさせ給ふな。かくのごと罪侍りともおぼしすつまじきをたのみにて、あまえて侍るなるべし。内々に制しのたまはむに聞き侍らずは。その罪にはみづからあたり侍らむ」など聞えなほし給へど殊に御氣色もなほらず。かく一所におはしてひまもなきにつゝむ所なうさて入り物せらるらむは、殊に輕めろうぜらるゝにこそはとおぼしなすにいとゝいみじうめざましく、この序にさるべき事どもかまへ出でむによさたよりなりとおぼしめぐらすべし。

花散里

人あれぬ御心づからの物思はしさはいつとなきことなめれど、かく大方の世につけてさへ煩はしうおぼし亂るゝことのみまされば、物心ぼそく世の中なべて厭はしうおぼしならるゝにさすがなる事多かり。麗景殿と聞えしは宮たちもおはせず、院隱れさせ給ひて後いよ

いよあはれなる御有様を唯この大將殿の御心にもてかくされて過ぐし給ふなるべし。御弟の三の君、うちわたりにてはかなくほのめき給ひし名殘例の御心なればさすがに忘れもはて給はず、わざともてなし給はぬに人の御心をのみ盡しはて給ふべかめるをも、このごろ殘ることなくおぼし亂るゝ世のあはれのくさはひには思ひ出で給ふに忍びがたくて、五月雨の空珍らしう晴れたる雲間にわたり給ふ。何ばかりの御よそひなくうちやつして ごぜんなども殊になく忍び給へり。中川の程おはするにさゝやかなる家の木立などよしばめるに、能くなる琴をあづまに調べて搔き合せ賑はゝしく彈き鳴すなり。御耳とまりて門近なる所なれば少しさし出でゝ見入れ給へば、大なる桂の木の追風に祭の頃おぼし出でられてそこはかとなくけはひをかしきを、唯一目見給ひしやどりなりと思ひ出で給ふにたゞならず程經にけるをおぼめかしくやとつゝましけれど過ぎがてにやすらひ給ふ。折しも郭公鳴きてわたる。もよほし聞えがほなれば御車推し返させ給ひて例の惟光を入れ給ふ。

「をちかへりえぞ忍ばれぬほとゝぎすほのかたらひし宿のかきねに」。寢殿とおぼしき屋の西のつまに人々居たり。さきざきも聞き知る聲なりければこわづくり氣色とりて御せうそこ聞ゆ。若やかなる氣色どもあまたしておぼめくなるべし。

「郭公ことゝふ聲はそれなれどあなおぼつかなさみだれのそら」。殊更にたどると見れば「よしよしうゑし垣根も」とて出づるを、人知れぬ心には妬うもあはれにも思ひけり。さもつゝむべきことぞかし。ことわりにもあればさすがなり。かやうのきはに筑紫の五節こそらう

たげなりしはやとまづおぼし出づ。いかなるにつけても御心の暇なく年月を經ても苦しげなり。猶かうやうに見しあたりのなさけは過ぐし給はぬにしもなかなかあまたの人の物思ひぐさなり。さてかのほいの所はおぼしやりつるもあるく、人めなくあづかにておはする有様を見給ふもいとあはれなり。まづ女御の御方にて昔の御物語など聞え給ふに夜更けにけり。二十日の月さし出づる程に、いとゞ木高きかげどもこぐらう見えわたりて、近き橘のかをりなつかしく匂ひて女御の御けはひねびにたれどあくまで用意ありあてにらうたげなり。すぐれて花やかなる御おぼえこそなかりしかどむつまじうなつかしきにはおぼしたりしものをなど思ひ出で聞え給ふにつけても、昔の事かきつらねおぼされてうちなき給ふ。郭公ありつる垣根のにや同じ聲にうちなく。慕ひきにけるよとおぼさるゝほども艶なりかし。

「いかに知りてか」など忍びやかにうち誦じ給ふ。

「橘の香をなつかしみほとゝぎすはなちる里をたづねてぞとふ。いにしへの忘れがたきなぐさめにはまづ參り侍りぬべかりけり。こよなうこそ紛るゝ事も數そふ事も侍りけれ。大方の世に隨ふものなれば昔語もかきくづすべき人少うなり行くを、ましていかにつれづれも紛るゝことなくおぼさるらむ」と聞え給ふに、いとさらなる世なれど物をいとあはれとおぼしつゞけたる御氣色の淺からぬも人の御さまからにや。多く哀ぞ添ひにける。

「人めなく荒れたる宿はたちばなの花こそのきのつまとなりけれ」とばかりのたまへるも、さはいへど人にはいと異なりけりとおぼしくらべらる。西面にはわざとなく忍びやかに

うちふるまひ給ひて覗き給へるも珍しきにそへて、よそにめなれぬ御さまなればつらさも忘れぬべし。何やかやと例のなつかしく語らひ給ふもおぼさぬ事にはあらざるべし。假にも見給ふかぎりは押しなべてのきはには あらねばにや。さまざまにつけていふかひなしとおぼさるゝはなければにや。にくげなく我も人もなさけをかはしつゝ過ぐし給ふなりけり。それをあいなしと思ふ人はとかくにかはるもことわりの世のさがと思ひなし給ふ。ありつる垣根もさやうにてありさまかはりにたるあたりなりけり。

須磨

世の中いと煩はしくはしたなきことのみまされば、せめてしらず顔にありへてもこれより優る事もやとおぼしなりぬ。かの須磨は昔こそ人の住かなどもありけれ、今はいと里ばなれ心すごくて海士の家だに稀になど聞き給へど、人しげくひたゝけたらむ住ひはいとほいなかるべし、さりとて都をとほざからむも故里おぼつかなかるべきを、人わろくぞおぼしみだるゝ。萬の事きしかた行く末思ひ續け給ふに悲しき事いとさまざまなり。うきものと思ひ捨てつる世も今はと住み離れなむことをおぼすにはいと捨て難き事多かる中にも、姫君の明暮にそへても思ひ歎き給へるさまの心苦しさは何事にもすぐれてあはれなるを、行きめぐりてもまた逢ひ見むことを必ずとおぼさむにてだに、猶二二日のほどよそよそに明かし暮らす折

々だに、覺束なきにものおぼえ、女君も心細うのみ思う給へるを、幾とせその程と限ある道にもあらず、逢ふをかぎりに隔たり行かむもさだめなき世にやがて別るべき門出にもやといみじう覺え給へば、忍びて諸共にもやとおぼしよるをりあれど、さる心細からむ海づらの波風より外に立ちまじる人もなからむに、斯らうたき御さまにて引き具し給へらむもいとつきなく、我心にもなかなか物思ひのつまなるべきをなどおぼし返すを、女君はいみじからむ道にも後れ聞えずだにあらばとおもむけてうらめしげにおぼいたり。かの花散里にもおはし通ふ事こそ稀なれ、心ぼそくあはれなる御有樣をこの御蔭に隱れて物し給へば、いみじう歎きおぼしたるさまいとことわりなり。なほざりにてもほのかに見奉り通ひ給ひし所々、人しれぬ心を碎き給ふ人ぞ多かりける。入道の宮よりも物の聞えや又いかゞとりなされむと我が御ためつゝましけれど、忍びつゝ御とぶらひ常にあり。昔かやうにあひおぼし哀れをも見せ給はましかばとうち思ひ出で給ふに、さもさまざまに心をのみ盡すべかりける人の御契かなとつらう思ひ聞え給ふ。やよひはつかあまりの程になむ都離れ給ひける。人に今としも知らせ給はず、唯いと近う仕うまつり馴れたるかぎり七八人ばかり御供にていとかすかにて出で立ち給ふ。さるべき所々に御文ばかりうち忍び給ひしにも哀れと忍ばるばかり書き盡し給へるは見どころもありぬべかりしかど、その折の心地のまぎれにはかばかしくも聞き置かずなりにけり。二三日かねておほい殿に世に隱れて渡り給へり。網代車のうちやつれたるに女のやうにてかくろへ入り給ふもいとあはれに夢とのみおぼゆ。御方いと寂し

げにうち荒れたる心地して、若君の御めのとゞもむかし侍ひし人の中に、まかで散らぬかぎり、かく渡り給へるを珍しがり聞えてまうのぼり集ひて見奉るにつけても、殊に物深からぬ若き人々さへ世の常なき思ひ知られて涙にくれたり。若君はいと美しうてざれ走りおはしたり。「久しき程に忘れぬこそ哀なれ」とて、膝にすゑ給へる御氣色忍びがたげなり。おとゞこなたに渡り給ひてたいめし給へり。「つれづれに籠らせ給へらむ程何と侍らぬ昔物語も参り來て聞えさせむと思ひ給ふれど、身の病おもきによりおほやけにも仕うまつらず、位をも返し奉りて侍るに、私ざまには腰のべてなど物の聞えひがひがしかるべきを、今は世の中憚るべき身にも侍らねどいちはやき世のいと恐しう侍るなり。かゝる御事を見給ふるにつけて命長きは心うく思う給へらるゝ世の末にも侍るかな。天の下をさかさまになしても思ひ給へよらざりし御有樣を見給ふれば、萬いとあぢきなくなむ」と聞え給ひていたうしほたれ給ふ。「とあるともかゝるともさきの世の報にこそ侍るなれば、いひもて行けば唯自らの怠になむ侍る。さしてかく官ざくを取られずあさはかなる事にかゝづらひてだにおほやけのかしこまりなる人のうつしざまにて世の中にありふるはとが重きわざにひとの國にもし侍るなるを、遠く放ち遣すべきさだめなども侍るなるはさま殊なる罪に當るべきにこそ侍るなれ。濁なき心に任せてつれなく過ぐし侍らむもいとはゞかり多く、これより大なる恥に臨まぬさきに世を遁れなむと思う給へ立ちぬる」など細やかに聞え給ふ。昔の御物語院の御事おぼしのたまはせし御心ばへなど聞え出で給ひて御直衣の袖もひき放ち給はぬに、君も

え心強くもてなし給はず。若君の何心なく紛れありきてこれかれに馴れ聞え給ふをいみじとおぼしたり。「過ぎ侍りにし人を世に思う給へ忘るゝ世なくのみ今に悲しび侍るを、この御事になむ、もし侍る世ならましかばいかやうに思ひ歎き侍らまし。よくぞ短くてかゝる夢を見ずなりにけると思う給へ慰め侍る。幼くものし給ふがかく齡過ぎぬる中にとゞまり給ひてなづさひ聞えぬ月日や隔たり給はむと思ひ給ふるをなむ萬の事よりも悲しう侍る。いにしへの人も誠にをかしあるにてしもかゝる事に當らざりけり。猶さるべきにて人のみかどにもかゝる類多く侍りけり。されど言ひ出づるふしありてこそさる事も侍りけれ。とざまかうざまに思ひ給へよらむ方なくなむ」など多くの御物語聞え給ふ。三位中將も參り合ひ給ひておほみきなどまゐり給ふに夜更けぬればとまり給ひて人々御前に侍はせ給ひて物語などせさせ給ふ。人よりはげにこよなう忍びおぼす。中納言の君いへばえに悲しう思へるさまを人知れず哀れとおぼす。人皆靜まりぬるに取りわきて語らひ給ふ。これによりとまり給へるなるべし。明けぬれば夜深う出で給ふに有明の月いとをかしう花の木どもやうやう盛過ぎて僅なる木蔭のいとおもしろき庭に薄くきり渡りたるそこはかとなく霞みあひて秋の夜のあはれに多くたちまされり。隅のまの高欄におしかゝりてとばかり眺め給ふ。中納言の君見奉り送らむとにや妻戸押しあけて居たり。「又たいめんあらむとこそ思へばいと難けれ。かゝりける世を知らで心安くもありぬべかりし月比をさしも急がで隔てけるよ」などの給へば、物も聞えずなく。若君の御乳母、宰相の君して宮の御まへより御せうそこ聞え給

へり。「自らも聞えまほしきをかきくらすみだり心地ためらひ侍る程に、いと夜深う出でさせ給ふなるもさま變りたる心地のみし侍るかな。心苦しき人のいぎたなき程は暫しもやすらはせ給はで」と聞え給へれば、うちなき給ひて、

「鳥部山もえし煙もまがふやとあまの鹽やくうらみにぞゆく」。御かへしともなくうちずし給ひて「曉の別はかうのみやは心づくしなる。思ひ遣り給へる人もあらむかし」とのたまへば「いつとなく別といふ文字こそうたて侍るなる中にも、けさは猶たぐひあるまじう思ひ給へらるゝ程かな」と鼻聲にてげに淺からず思へり。「聞えさせまほしきことも返すがへす思う給へながら、唯むすぼゝれ侍る程推し量らせ給へ。いぎたなき人は見給へむにつけてもなかなか浮世遁れ難う思ひ給へられぬべければ、心强く思う給へなして急ぎまかで侍り」と聞え給ふ。出で給ふほどを人々覗きて見奉る。入方の月いと明きにいとゞなまめかしう清らにて物をおぼいたるさま虎狼だにもなきぬべし。ましていはけなくおはせし程より見奉りそめてし人々なれば、たとしへなき御有樣をいみじと思ふ。まことや御かへし。

「なき人のわかれやいとゞへだゝらむ煙となりし雲居ならでは」。取りそへてあはれのみつきせず出で給ひぬる名殘ゆゝしきまで泣きあへり。殿におはしたれば、我が御方の人々もまどろまざりける氣色にて所々に群れ居て、あさましとのみ世を思へる氣色なり。さぶらひには親しう仕うまつるかぎりは御供に參るべき心まうけして私のわかれ惜むほどにや、人めもなし。さらぬ人はとぶらひ參るも重きとがめあり。煩はしき事まされば所せく集ひし馬車のかたもなくさびしきに世は憂きものなりけりとおぼし知らる。臺はんなどもかたへはちりばみて疊所々ひきかへしたり。見るほどだにかゝり、まして如何に荒れゆかむとおぼす。西の對に渡り給へればみかうしも參らでながめ明かし給ひければ簀子などに若きわらはべ所々に臥して今ぞ起きさわぐ。とのゐ姿どもをかしうて出で入るを見給ふにも心ぼそう、年月へばかゝる人々もえしもありはてゞや行きちらむなど、さしもあるまじき事さへ御目のみとまりけり。「よべはまか玄かして夜更けにしかばなむ。例の思はずなるさまにや覺しなしつる。かくて侍る程だに御めかれずと思ふをかく世を離るゝきはには心苦しきことのおのづから多かりけるを、ひたやごもりにてやは。常なき世に人にもなさけなきものと心おかれはてむもいとほしうてなむ」と聞え給へば「かゝる世を見るより外に思はずなることは、何事にか」とばかりの給ひて、いみじとおぼし入りたるさま人より異なるを、ことわりぞかし、父みこはいとおろかにてもとよりおぼしつきにけるに、まして世の聞えを煩はしがりて音づれ聞え給はず。御とらぶひにだに渡り給はぬを人の見るらむ事も耻しくなかなか知られ奉らでやみなましを、繼母の北の方などの世に俄なりしさいはひのあわたゞしさ、あなゆゝしや。思ふ人々かたがたにつけて別れ給ふ人かなとのたまひけるを、さる便ありて漏り聞き給ふにもいみじう心苦しければこれよりも絶えて音づれ聞え給はず、又たのもしき人もなくげにぞあはれなる御有樣なる。「猶世に免され難うて年月を經ばいはほの中にも迎へ奉らむ。只今は人ぎゝのいとつきなかるべきなり。おほやけにかしこまり聞ゆる人は明なる

月日の影をだに見ず、安らかに身をふるまふこともいと罪おもかなり。あやまちなけれどさるべきにこそかゝる事もあめれと思ふに、まして思ふ人具するは例なきことなるを、ひたおもむきに物ぐるほしき世にて立ちまさる事もありなむ」など聞え知らせ給ふ。日たくるまで大殿籠れり。そちの宮三位中將などおはしたり。たいめし給はむとて御なほしなど奉る。位なき人はとて、無紋の御直衣なかなかいと懐しきを着給ひて打ちやつれ給へるいとめでたし。御鬢かき給ふとて鏡臺に寄り給へるに、面痩せ給へる影の我ながらいとあてに清らなれば、「こよなうこそ衰へにけれ。この影のやうにや痩せて侍る、哀なるわざかな」とのたまへば、女君涙をひとめうけて見おこせ給へるいと忍びがたし。

「身はかくてさすらへぬとも君があたりさらぬ鏡の影ははなれじ」ときこえ給へば、

「別れても影だにとまるものなにば鏡を見てもなぐさめてまし」。いふともなくて柱かくれに居隠れて涙をまぎらはし給へるさま、猶こゝら見る中にたぐひなかりけりとおぼし知らるゝ人の御有様なり。みこはあはれなる御物語聞え給ひて暮るゝ程に還り給ひぬ。花散里の心細げにおぼして常に聞え給ふもことわりにて、かの人も今一度見ずばつらしとや思はむとおぼせば、その夜はまた出で給ふものからいと物うくていたうふかしておはしたれば、女御、かくかずまへ給ひて立ちよらせ給へると」と喜び聞え給ふさま、書きつゞけむもうるさし。いといみじう心細き御有様、唯この御かげに隠れてすぐい給へる年月、いとゞ荒れまさらむ程おぼしやられて殿の内いとかすかなり。月おぼろにさし出でゝ池廣く山こだかき

わたり、心ぼそげに見ゆるにも住み離れたらむいはほの中おぼしやらる。西面にはかうしもわたり給はずやとうちくしておぼしけるに、あはれ添へたる月影のなまめかしうしめやかなるにうちふるまひ給へるにほひ似るものなくて いと忍びやかに入り給へば、少しゐざり出でゝやがて月を見ておはす。又こゝに御物語のほどに明方近うなりにけり。「短夜のほどや。かばかりのたいめんも又はえしもやと思ふこそ事なしにて過ぐしつる年比もくやしう、來しかた行くさきの例になりぬべき身にて 何となく心のとまる世なくこそありけれ」と過ぎにし方の事どものたまひて、鳥もあばあばなければよにつゝみて急ぎ出で給ふ。例の月の入りはつる程よそへられてあはれなり。女君の濃き御ぞにうつりてげにぬるゝがほなれば、

「月かげのやどれる袖はせばくともとめても見ばやあかぬひかりを」。いみじとおぼいたるが心苦しければかつは慰め聞え給ふ。

「行きめぐりつひにすむへき月影のしばし曇らむ空ながめそ。思へばはかなしや。たゞ知らぬ涙のみこそ心をくらすものなれ」などの給ひて明暮のほどに出で給ひぬ。萬の事どもしたゝめさせ給ふ。親しう仕うまつり世になびかぬかぎりの人々、殿の事とり行ふべき上下定め置かせ給ふ。御供に隨ひ聞ゆるかぎりはまたえり出で給へり。かの山里の御すみかの具はえさらずとり使ひ給ふべきものども 殊更によそひもなくことそぎて、又さるべきふみどもぶんじふなど入れたる箱、さてはきん一つぞもたせ給ふ。所せき御調度花やかなる御よそ

ひなど更に具し給はず。あやしの山がつめきてもてなし給ふ。侍ふ人々よりはじめ萬の事皆西の對に聞えわたし給ふ。領じ給ふみ庄御牧より初めてさるべき所々の券など皆奉りおき給ふ。それより外のみくらまちをさめどのなどいふことまで、少納言をはかばかしきものに見置き給へれば、親しきけいしども具してしろしめすべきさまどものたまひあづく。我が御方の中務中將などやうの人々、つれなき御もてなしながら見奉る程こそ慰めつれ、何事につけてかと思へども「命ありてこの世に又歸るやうもあらむを待ちつけむと思はむ人はこなたに侍らへ」とのたまひて、上下皆まう上らせ給ひてさるべきものども品々くばらせ給ふ。若君の御乳母達花散里などにもをかしきさまのはさるものにてまめまめしきすぢにおぼしよらぬことなし。ないしのかみの御許にわりなくして聞え給ふ。「問はせ給はぬもことわりに思ひ給へながら、今はと世を思う給へ侍るほどの憂さもつらさも類なきことにてこそ侍りけれ。

逢ふ瀬なきなみだの河にしづみしや流るゝみをのはじめなりけむと思ひ給へ出づるのみなむ罪遁れ難う侍りける」道のほどもあやうければこまかには聞え給はず。女いといみじうおぼえ給ひて忍び給へど御袖よりあまるも所せくなむ。

「なみだ河うかぶみなわも消えぬべし流れて後の瀬をもまたずて」。なくなく亂れかき給へる御手いとをかしげなり。今一度たいめなくてやとおぼすは、猶口惜しけれどおぼし返して憂しとおぼしなすゆかり多くて おぼろけならず忍び給へば、いとあながちにも聞え給はずなりぬ。明日とての暮には院の御墓拜み奉り給ふとて北山へまうで給ふ。曉かけて月出づる比なればまづ入道の宮に參うで給ふ。近き御簾の前におましまゐりて 御みづから聞えさせ給ふ。春宮の御事をいみじくうしろめたきものに思ひ聞え給ふ。かたみに心深きどちの御物語はた萬のあはれまさりけむかし。懷しうめでたき御けはひの昔にかはらぬに、つらかりし御心ばへもかすめ聞えさせまほしけれど今更にうたてとおぼさるべし。我御心にもなかなか今ひときは亂れまさりぬべければ 念じかへして「唯かく思ひかけぬ罪に當り侍るも思う給へあはする事の一ふしになむそらおそろしう侍る。をしげなき身はなきになしても宮の御世だに事なくおはしまさば」とのみ聞え給ふぞことわりなるや。宮も皆おぼし知らるゝ事にしあれば御心のみ動きて聞えやり給はず。大將萬の事かき集めおぼしつゞけて泣き給へる氣色、いと盡きせずなまめきたり。「御山に參り侍るを御ことつてや」と聞え給ふにとみに物も聞え給はず、わりなくためらひ給ふ御氣色なり。

「見しはなくあるは悲しき世のはてを背きしかひもなくなくぞふる」。いみじき御心惑ひどもにおぼし集むることどもえぞつゞけさせ給はぬ。

「別れしに悲しきことはつきにしをまたぞこの世のうさはまされる」。月まち出でゝ出で給ふ。御供に唯五六人ばかり、しも人もむつましき限して御馬にてぞおはする。さらなる事なれどありし世の御ありさに異なり。皆いと悲しう思ふ中にかの御禊の日假の御隨身にて仕うまつりし右近のぞうの藏人、うべきかうふりも程すぎづるをつひにみふだけづられて

つかさも取られてはしたなければ、御供に參るうちなり。賀茂の下の御社をかれと見渡すほどふと思ひ出でられて、おりて御馬の口をとる。

ひきつれて葵かざしゝそのかみを思へばつらし賀茂のみづがき」といふを、げにいかゞ思ふらむ、人よりけに花やかなりしものをとおぼすも心ぐるし。君も御馬よりおり給ひて御社の方を拜み給ふとて、神にまかり申し云給ふ。

「うき世をば今ぞわかるゝとゞまらむ名をばたゞすの神にまかせて」との給ふさま物めでする若き人にて身にしみてあはれにめでたしと見奉る。御山にまうで給ひておはしましゝ御有樣唯目の前のやうにおぼし出でらる。かぎりなきにても世になくなりぬる人ぞ言はむ方なく口惜しきわざなりける。萬の事をなくなく申し給ひてもそのことわりをあらはにえ承り給はねば、さばかりおぼしのたまはせしさまざまの御ゆいごんはいづちへか消え失せにけむといふかひなし。御墓は道の草しげくなりて分け入り給ふほどいとゞ露けきに、月も雲がくれて森の木立こぶかく心すごし。歸り出でむ方もなき心地して拜み給ふに、ありし御面影さやかに見え給へる、そゞろ寒きほどなり。

「なきかげやいかゞ見るらむよそへつゝながむる月も雲がくれぬる」。明けはつる程に歸り給ひて春宮にも御せうそこ聞え給ふ。王命婦を御かはりとて侍はせ給へばその局にとて「今日なむ都はなれ侍る。又參り侍らずなりぬるなむ數多の憂にまさりて思う給へられ侍る。よろづ推し量りて啓し給へ。

いつかまた春のみやこの花を見む時うしなへる山がつにして」。櫻の散りすきたる枝につけ給へり。「かくなむと」御覽ぜさすれば、幼き御心地にもまめだちておはします。「御かへしいかゞ物し侍らむ」と啓すれは、「暫し見ぬだに戀しきものを、遠くはましていかにといへかし」とのたまはす。ものはかなの御かへりやとあはれに見奉る。あぢきなきことに御心を碎き給ひし昔の事折々の御有樣思ひ續けらるゝにも、物思ひなくて我も人も過ぐし給ひつべかりける世を、心とおぼし歎きけるを、くやしう我心ひとつにかゝらむとのやうにぞおぼゆる。「御返りは更に聞えさせやり侍らず、おまへには啓し侍りぬ。心細げにおぼし召したる御氣色もいみじうなむ」とそこはかとなく心の亂れけるなるべし。

「咲きてとく散るはうけれど行く春は花の都を立ちかへりみよ。時しあらば」と聞えて名殘もあはれなる物語をしつゝ、ひと宮のうち忍びて泣きあへり。ひとめも見奉れる人は、かくおぼしくづほれぬる御有樣を歎き惜み聞えぬ人なし。まして常に參り馴れたりしは、知り及び給ふまじきをさめみかはやうどまでもありがたき御かへりみのしたなりつるを暫しにても見奉らぬ程や經むと思ひ歎きたり。大方の世の人も誰かはよろしく思ひ聞えむ。七つになり給ひしよりこのかた、帝の御前によるひる侍ひ給ひて奏し給ふ事のならぬはなかりしかば、この御いたはりにかゝらぬ人なく御德を喜ばぬやはありし。やんごとなき上達部辨官などの中にも多かり。それよりしもは數知らず。思ひ知らぬにはあらねどさしあたりてはいちはやき世を思ひ憚りて參り寄る人もなし。世ゆすりて惜み聞え、したにはおほやけをそし

り恨み奉れど、身を捨てゝとぶらひ參らむにも何のかひかはと思ふにや。かゝる折は人わろくうらめしき人多く世の中はあぢきなきものかなとのみ萬につけておぼす。その日は女君に御物語のどやかに聞え暮し給ひて、例の夜深く出て給ふ。假の御ぞなど旅の御よそひいたくやつし給ひて「月出でにけりな、猶少し出でゝ見だに送り給へかし。いかに聞ゆべき事多くつもりにけりとのみおぼえむとすらむ。一日二日たまさかに隔つる折だに怪しういぶせき心地するものを」とて御簾まき上げて端の方にいざなひ聞え給へば、女君泣きしづみ給へる、ためらひてゐざり出で給へる。月影いみじうをかしげにて居給へり。我が身かくてはかなき世を別れなばいかなるさまにさすらひ給はむと後めたく悲しけれど、おぼしいりたるがいとゞしかるべければ、

「いける世のわかれを知らで契りつゝ命を人にかぎりけるかな。はかなし　などあさはかに聞えなし給へば、

「をしからぬ命にかへて目の前のわかれをしばしとゞめてしがな」。げにさぞおぼさるらむといと見捨て難けれど、明けはてなばはしたなかるべきにより急ぎ出で給ひぬ。日長き頃なれば、追風さへそひら面影につとそひて胸もふたがりながら御船に乘り給ひぬ。道すがてまだ申の時ばかりにかの浦に着き給ひぬ。かりそめの道にてもかゝる旅をならひ給はぬ心地に、心ぼそさもをかしさもめづらかなり。おほえ殿と言ひける所は、いたく荒れて松ばかりぞしるしなりける。

「から國に名をのこしける人よりもゆくへ知られぬ家居をやせむ」渚に寄る浪のかつ返るを見給ひて「うらやましくも」と打ちずんじ給へるさま、さる世のふるごとなれども珍しく聞きなされ、悲しとのみ御供の人々思へり。うち願み給へるに、來し方の山は霞はるかにて誠に三千里の外の心地するにかいの雫も堪へがたし。

「ふる里を峯のかすみはへだつれどながむる空はおなじ雲井か」つらからぬものなくなむ。おはすべき所は行平の中納言のもしほたれつゝわびける家居近きわたりなりけり。海づらはやゝ入りてあはれに心すごけなる山中なり。垣のさまより始めて珍らかに見給ふ。茅屋ども葦ふける廊めくやなどをかしうまつらひなしたり。所につけたる御住まひやう變りて、かゝる折ならずばをかしうもありなましと昔の御心のすさびおぼしいづ。近き所々のみさうの司召して、さるべき事どもなど良清の朝臣など親しきけいしにて仰せ行ふもあはれなり。時のまにいと見所ありてまねさせ給ふ。水深う遣りなし植木どもなどして、今はとまづまり給ふ心ちうつゝならず。國の守も親しき殿人なれば忍びて心よせ仕うまつる。かゝる旅所ともなく人さわがしけれども、はかばかしく物をものたまひ合すべき人しなければ、知らぬ國の心地していとうもれいたく、いかで年月を過ぐさましとおぼしやらる。やうやう事まづまり行くに長雨の頃になりて京の事どもおぼしやらるゝに戀しき人多く女君のおぼしたりしさま、春宮の御こと、若君の何心もなく紛れ給ひしなどをはじめ、此處彼處思ひやり聞え給ふ。京へ人出だしたて給ふ。二條院へ奉り給ふと、入道の宮とはかきもやり給はずくら

り恨み奉れど、身を捨てゝとぶらひ參らむにも何のかひかはと思ふにや。かゝる折は人わろくうらめしき人多く世の中はあぢさなきものかなとのみ萬につけておぼす。その日は女君に御物語のどやかに聞え暮し給ひて、例の夜深く出で給ふ。假の御ぞなど旅の御よそひいたくやつし給ひて「月出でにけりな、猶少し出でゝ見だに送り給へかし。いかに聞ゆべき事多くつもりにけりとのみおぼえむとすらむ。一日二日たまさかに隔つる折だに怪しういぶせき心地するものを」とて御簾まき上げて端の方にいざなひ聞え給へば、女君泣きしづみ給へる、ためらひてゐざり出で給へる。月影ゐいみじうをかしげにて居給へり。我が身かくてはかなき世を別れなばいかなるさまにさすらひ給はむと後めたく悲しけれど、おぼしいりたるがいとゞしかるべければ、

「いける世のわかれを知らで契りつゝ命を人にかぎりけるかな。はかなし　などあさはかに聞えなし給へば、

「をしからぬ命にかへて目の前のわかれをしばしとゞめてしがな」。げにさぞおぼさるらむといと見捨て難けれど、明けはてなばはしたなかるべきにより急ぎ出で給ひぬ。道すがら面影につとそひて胸もふたがりながら御船に乘り給ひぬ。日長き頃なれば、追風さへそひてまだ申の時ばかりにかの浦に着き給ひぬ。かりそめの道にてもかゝる旅をならひ給はぬ心地に、心ぼそさもをかしさもめづらかなり。おほえ殿と言ひける所は、いたく荒れて松ばかりぞしるしなりける。

「から國に名をのこしける人よりもゆくへ知られぬ家居をやせむ」渚に寄る浪のかつ返るを見給ひて「うらやましくも」と打ちずんじ給へるさま、さる世のふるごとなれども珍しく聞きなされ、悲しとのみ御供の人々思へり。うち願み給へるに、來し方の山は霞はるかにて誠に三千里の外の心地するにかいの雫も堪へがたし。

「ふる里を峯のかすみはへだつれどながむる空はおなじ雲井か」つらからぬものなくなむ。おはすべき所は行平の中納言のもしほたれつゝわびける家居近きわたりなりけり。海づらはやゝ入りてあはれに心すごけなる山中なり。垣のさまより始めて珍らかに見給ふ。茅屋ども葦ふける廊めくやなどをかしうおつらひなしたり。所につけたる御住まひやう變りて、かゝる折ならずばをかしうもありなましと昔の御心のすさびおぼしいづ。近き所々のみさうの司召して、さるべき事どもなど良清の朝臣など親しきけいしにて仰せ行ふもあはれなり。時のまにいと見所ありておなさせ給ふ。水深う遣りなし植木どもなどして、今はとおづまり給ふ心ちうつゝならず。國の守も親しき殿人なれば忍びて心よせ仕うまつる。かゝる旅所ともなく人さわがしけれども、はかばかしく物をものたまひ合すべき人しなければ、知らぬ國の心地していとうもれいたく、いかで年月を過ぐさましとおぼしやらる。やうやう事おづまり行くに長雨の頃になりて京の事どもおぼしやらるゝに戀しき人多く女君のおぼしたりしさま、春宮の御こと、若君の何心もなく紛れ給ひしなどをはじめ、此處彼處思ひやり聞え給ふ。京へ人出だしたて給ふ。二條院へ奉り給ふと、入道の宮とはかさもやり給はずくら

され給へり。宮には、

「松島のあまのとまやもいかならむすまの浦人しほたるゝころ。いつと侍らぬ中にもきしかた行くさきかきくらし、みぎはまさりてなむ」。ないしのかみの御許に例の中納言の君の私事のやうにて中なるに「つれづれと過ぎにし方の思ひ給へ出でらるゝにつけても、こりずまの浦のみるめもゆかしきを鹽焼くあまやいかゞ思はむ」。さまざま書き盡し給ふ言の葉思ひやるべし。大殿にも宰相の乳母にも、仕う奉るべき事なども書きつかはす。京にはこの御文所々に見給ひつゝ御心亂れ給ふ人々のみおほかり。二條院の君はそのまゝに起きもあがり給はず盡きせぬさまに覺しこがるれば、侍ふ人々もこしらへわびつゝ心細う思ひあへり。もてならし給ひし御調度ども彈き鳴し給ひし御琴ぬぎ捨て給へる御ぞのにほひなどにつけても、今はと世になくなりたらむ人のやうにのみおぼしたれば、かつはゆゝしうて少納言は僧都に御いのりの事など聞ゆ。二かたにみず法などせさせ給ふ。かつはかくおぼし歎く御心を靜め給ひてなぐさめ又もとの如くに返り給ふべきさまになど、心苦しきまゝに祈り申し給ふ。旅の御殿居物など調じて奉り給ふ。かとりの御直衣指貫さま變りたる心地するもいみじきに、さらぬ鏡とのたまひし面影のげに身に添ひ給へるもかひなし。出で入り給ひしかた、寄り居給ひし眞木柱などを見給ふにも胸のみふたがりて、物をとかう思ひめぐらし世にしほじみぬる齡の人だにあり、まして馴れむつび聞え父母になりつゝあつかひ聞えおほし立てならはし給へれば、俄に引き別れて戀しう思ひ聞え給へることわりなり。ひ

たすら世になくなりなむは言はむ方なくていふかひなきにてもやうやう忘草も生ひやすらむ、聞く程は近けれどいつまでと限ある御別にもあらぬをおぼすにつきせずなむ。入道の宮にも、春宮の御事によりおぼし歎くさまいとさらなり。御宿世の程をおぼすにはいかゞ淺くはおぼされむ。年比は唯物の聞えなどのつゝましさに少しなさけある氣色見せば、それにつけて人の咎め出づる事もこそとのみ偏におぼし忍びつゝあはれをも多う御覽じすぐしすくすくしうもてなし給ひしを、かばかりに浮世の人言なれどかけてもこの方には言ひ出づる事なくて止みぬるばかりの人の御おもむけも、あながちなりし心の引く方に任せず、かつはめやすくもて隱しつるぞかしとあはれに戀しうもいかゞおぼし出でざらむ。御返りも少しこまやかにて「このころはいとど、

　おほたるゝことをやくにて松島に年ふるあまもなげきをぞつむ」かんの君の御かへりには、

「浦にたくあまだにつゝむ戀なればくゆるけぶりよ行くかたぞなき」さらなる事どもはえなむ」とばかり、いさゝかにて中納言の君の中にあり。おぼし歎くさまなどいみじくいひたり。あはれと思ひ聞え給ふふしぶしもあればうち歎かれ給ひぬ。姫君の御文は心殊に細やかなりし御返りなればあはれなる事多くて、

「うら人のおほくむ袖にくらべ見よなみぢへだつる夜のころもを」物の色し給へるさまなどいと清らなり。何事もらららしう物し給ふを思ふさまにて、今は殊に心あわたゞしう

行きかゝづらふ方もなくまめやかにてあるべきものをとおぼすに、いみじう口惜しうよるひる面影におぼえて堪へ難く思ひ出でられ給へば、猶忍びてや迎へましとおぼす。又うち返し、なぞやかく浮世に罪をだに失はむとおぼせば、やがて御さうじんにて明暮行ひておはす。大殿の若君の御事などあるにもいとゞ悲しけれど、おのづから逢ひ見てむ、たのもしき人々物し給へば後めたうはあらずとおぼしなさるゝは、なかなかこの道は惑はれ給はぬにやあらむ。まことや騒しかりし程のまぎれに洩らしてけり。かの伊勢の宮へも御使ありけり。かれよりもふりはへ尋ね參れり。淺からぬ事ども書き給へり。言の葉筆づかひなどは人より殊になまめかしういたり深く見えたり。「猶うつゝとは思ひ給へられぬ御住まひをうけ給はるも明けぬ夜の心惑ひかとなむ。さりとも年月は隔て給はじと思ひやり聞えさするにも罪深き身のみこそ又聞えさせむこともはるかなるべけれ、

うきめかるいせをの海士を思ひやれもしほたるてふ須磨の浦にて。萬に思う給へみだるゝ世の有樣も猶いかになりはつべきにか」とおぼかり。

「伊勢島やをぢほひのかたにあさりてもいふかひなきは我身なりけり」物をあはれとおぼしけるまゝにうちおきうちおき書き給へる、白きからの紙四五枚ばかりを書き續けて墨つきなど見どころあり。哀に思ひ聞えし人をひとふしうしと思ひ聞えさせし心あやまりにこのみやす所も思ひうんじて別れ給ひにしとおぼせば、今にいとほしう忝きものに思ひ聞え給ふ。折からの御文いとあはれなれば、御使さへむつましうて二三日すゑさせ給ひて彼處の物語などせさせて聞しめす。若かやかに氣色あるさぶらひの人なりけり。かくあはれなる御住まひなれば、かやうの人もおのづから物遠からでほの見奉る御さまかたちをいみじうめでたしと涙落しけり。御かへり書き給ふ言の葉思ひやるべし。「かく世を離るべき身と思ひ給へらましかばおなじうはをぢほひ聞えましものをなどなむ。つれづれに心ぼそきまゝに、

伊勢人の浪のうへ漕ぐ小舟にもうきめはかれでのらましものを。

あまがつむなげきの中にしほたれていつまで須磨の浦とながめむ。聞えさせむことのいつとも侍らぬこそ盡きせぬ心地し侍れ」などぞありける。かやうに何處にも覺束なからず聞えかはし給ふ。花散里も悲しとおぼしけるまゝにかき集め給ひける御心々見給ふに、をかしきもめなれぬ心地していづれもうち見つゝ慰め給ひ、かつは物思ひのもよほしぐさなめり。

「荒れまさる軒のしのぶをながめつゝしげくも露のかゝる袖かな」とあるを、げに樣より外の後見もなきさまにておはすらむとおぼしやりて、長雨につゐぢ所々崩れてなど聞き給へば、京のけいしの許に仰せつかはして、近き國々の御莊の者などもよほさせて仕う奉るべきよしのたまはす。『かんの君は人わらへにいみじうおぼしくづほるゝをおとゞいと悲しう思給ふ君にて、せちに宮にも申し内にも奏し給ひければ、限ある女御みやす所にもおはせずおぼやけざまの宮仕とおぼしなせり。又かのにくかりし故こそいかめしきことも出でこし

か。赦され給ひて參り給ふべきにつけても猶心にあまみにしことのみぞあはれにおぼえ給ひける。七月になりて參り給ふ。いみじかりし御思ひの名殘なれば人のそしりも去ろし召されず、例のうへにつとさぶらはせ給ひて、よろづにうらみかつはあはれに契らせ給ふ。御さまかたちもいとなまめかしう清らなれど、思ひ出づる事のみ多かる心の内ぞかたじけなき。御遊のついでに「その人なきこそいとさうざうしけれ。如何にましてさ思ふ人多からむ。何事にも光なき心地するかな」とのたまはせて「院のおぼしのたまはせし御心を違へつるかな。罪うらむかし」とて涙ぐませ給ふに、え念じ給はず。「世の中こそあるにつけてもあぢきなきものなりけれと思ひ知るまゝに、久しく世にあらむものとなむ更に思はぬ。さもありなむにいかゞおぼさるべき。近き程の別に思ひおとされむこそねたけれ。生ける世にとは、げに善からぬ人の言ひ置きけむ」といと懷しき御さまにて、物をまことにあはれとおぼし入りてのたまはするにつけて、ほろほろとこぼれ出づれば「さりや、いづれにおつるにか」とのたまはす。「今までみ子達のなきこそさうざうしけれ、春宮を院のの給はせしさまに思へど、よからぬ事も出でくめれば心苦しう」など世を御心の外にまつりごちなし給ふ人々のあるに、若き御心の強き所なき程にていとほしとおぼしたる事も多かり。『須磨にはいとゞ心づくしの秋風に、海は少し遠けれど行平の中納言の、關吹き越ゆるといひけむ浦波よるよるは、げにいと近く聞えて又なくあはれなるものはかゝる所の秋なりけり。御まへにいと人ずくなにてうち休みわたれるに、一人目をさまして枕をそばたてゝ四方の嵐を聞き給ふに、浪たゞこゝ

もとに立ちくる心地して涙落つともおぼえぬに枕うくばかりになりにけり。きんを少し搔き鳴し給へるが我ながらいとすごう聞ゆればひきさし給ひて、

「戀ひわびてなく音にまがふうらなみは思ふかたより風や吹くらむ。」と謠ひ給へるに、人々おどろきてめでたうおぼゆるに忍ばれてあいなう起き居つゝ鼻を忍びやかにかみわたす。げにいかに思ふらむ、我が身ひとつにより、親はらから片時立ち離れがたく程につけつゝ思ふらむ家を別れてかく惑ひあへるとおぼすにいみじくて、いとかく思ひ沈むさまを心細しと思ふらむとおぼせば、晝は何くれと戲事うちのたまひまぎらはし、徒然なるまゝにいろいろの紙をつぎつゝ手習をぞ給ふ。珍しきさまなるからの綾などに樣々の繪どもを書きすさび給へる、屏風のおもてどもなどいとめでたく見所あり。人々の語り聞えし海山の有樣を遙におぼしやりしを、御目に近くてはげに及ばぬ磯のたゝずまひ二なく書き集め給へり。この比の上手にすめる千えだつねのりなど召してつくり繪を仕うまつらせばやと心もとながりあへり。懷しうめでたき御有樣に世の物思忘れて近う馴れ仕うまつるを嬉しきことにて四五人ばかりぞつと侍ひける。前栽の花いろいろ咲き亂れおもしろき夕暮に、海見やらるゝ廊に出で給ひてたゝずみ給ふ御さまのゆゝしう清らなること、所からはましてこの世のものとも見え給はず。白き綾のなよゝかなる紫苑色など奉りてこまやかなる御直衣帶ぞどけなくうち亂れ給へる御さまにて「釋迦牟尼佛弟子」と名のりてゆるゝかによみ給へる、又世に知らずきこゆ。沖より船どもの唄ひ罵りて漕ぎ行くなども聞ゆ。ほのかに唯小さ

き鳥の浮べると見やらるゝも心細げなるに、雁の連ねて鳴く聲梶の音にまがへるをうちながめ給ひて、御涙のこぼるゝをかきはらひ給へる御手つき黒木の御ずゞにはえ給へるは、故郷の女戀しき人々のこゝろ皆慰みにけり。

「はつかりは戀しき人のつらなれや旅の空とぶこゑのかなしき」との給へば、良清

「かきつらね昔のことぞおもほゆる雁はそのよの友ならねども」。民部太輔、

「心からとこ世を捨てゝなくかりを雲のよそにも思ひけるかな」。前の右近の亟

「常世出でゝたびの空なるかりがねもつらにおくれぬ程ぞなぐさむ。友まどはしてはいかに侍らまし」といふ。親の常陸になりて下りじにもさそはれて參れるなりけり。またには思ひ碎くべかめれどほこりかにもてなしてつれなきさまにまありく。月のいと花やかにさし出でたるに今夜は十五夜なりけりとおぼし出でゝ、殿上の御遊こひしく、所々眺めたまふらむかしと思ひやり給ふにつけても月の顔のみまもられ給ふ。「二千里外古人心」とずし給へる、例の涙もとゞめられず。入道の宮の「霧や隔つる」とのたまはせしほどいはむ方なく戀しく、折々の事おもひ出で給ふにより泣かれ給ふ。夜更け侍りぬと聞ゆれど猶入りたまはず。

「見るほどぞまばしなぐさむめぐりあはむ月の都ははるかなれども」。その夜うへのいとなつかしう昔物語などまで給ひし御さまの院に似奉り給へりしも戀しく思ひ出で聞え給ひて、「恩賜の御衣は今こゝにあり」とずしつゝ入り給ひぬ。御ぞはまことに身放たずかたはら

に置き給へり。

「うしとのみひとへに物はおもほえでひだりみぎにもぬるゝ袖かな」その頃大貳は上りける。いかめしうるゐひろく、むすめがちにて所せかりければ北の方は船にてのぼる。浦づたひに逍遥しつゝくるに外よりおもしろきわたりなれば心とまるに、大將かくておはすと聞けば、あいなうすいたる若きむすめたちは、船の内さへ恥かしう心げさうせらる。まして五節の君は綱手ひき過ぐるも口をしきにきんの聲風につきて遥に聞ゆるに、所のさま人の御ほど物のねの心ぼそさ取り集め心あるかぎり皆泣きにけり。そち、御せうそこきこえたり。「いと遥なるほどより罷り上りてはまづいつしか侍ひて都の御物語もとこそ思ひ給へ侍りつれ。思の外にかくておはしましける御やどりを罷り過ぎ侍る、かたじけなく悲しうも侍るかな。あひ去りて侍る人々さるべきこれかれまで來迎ひてあまた侍れば所せきを思ひ給へ憚り侍る事ども侍りてえ侍らはぬこと、殊更に參り侍らむ」など聞えたり。子の筑前の守ぞ參れる。この殿の藏人になし顧み給ひし人なれば、いともかなしいみじと思へども又見る人々のあれば聞えをおもひて暫しも立ちとどらず「都離れて後昔親しかりし人々あひ見る事難うのみなりにたるにかくわざと立ちより物したると」とのたまふ。御返りもさやうになむ。守なくなくかへりておはする御有樣語るに、そちよりはじめ迎の人々まがまがしう泣きみちたり。五節はとかくして聞えたり。

「琴の音にひきとめらるゝ綱手縄たゆたふこゝろ君しるらめや。すきずきしさも人なと

がめそ」と聞えたり。ほゝえみて見給ふ。いとはづかしげなり。

「心ありてひくての綱のたゆたはゞうち過ぎましや須磨のうらなみ。いさりせむとは思はざりしはや」とあり。うまやのをさに句詩とらする人もありけるをまして落ちとまりぬべくなむおぼえける。」都には月日過ぐるまゝに帝を始め奉りて戀ひ聞ゆる折ふし多かり。春宮はまして常におぼし出でつゝ忍びて泣き給ふを、見奉る御乳母まして命婦の君はいみじう哀に見奉る。入道の宮は春宮の御事をゆゝしう思ひ給へ、大將もかくさすらへ給ひぬるをいみじうおぼし歎かる。御はらからのみ子たちむつましう聞え給ひし上達部など始つかたはとぶらひ聞え給ふなどありき。あはれなる文を作りかはし、それにつけても世の中にのみめでられ給へば、ささいの宮聞し召していみじくの給ひけり。「おほやけのかうじなる人は心にまかせてこの世のあぢはひをだに知る事難うこそあなれ。おもしろき家居して世の中を誹りもどきて、かの鹿を馬と言ひけむ人のひがめるやうにつゐせうする」などあしき事も聞えければ、わづらはしとて絶えてせうそこ聞え給ふ人なし。二條院の姫君は程經るまゝにおぼし慰むをりなし。東の對に侍ひし人ども皆渡り參りしはじめはなどかさしもあらむと思ひしかど、見奉り馴るゝまゝに懐しうをかしき御有樣まめやかなる御心ばへも思ひやり深うあはれなれば、まかでちるもなし。なべてならぬきはの人々にはほの見えなどし給ふ。そこらのなかにすぐれたる御心ざしもことわりなりけりと見奉る。かの御住ひには久しうなるまゝに、え念じ過ごすまじうおぼえ給へど、我が身だにあさましき宿世と覺ゆる住

まひにいかでかは打ち具してはつきなからむさまを思ひ返し給ふ。所につけては萬の事さまかはり見給へ知らぬしもびとのうへをも、見給ひならはぬ御心ちにめざましうかたじけなうみづからおぼさる。煙のいと近く時々たちくるをこれや海士の鹽燒くならむとおぼしわたるは、おはしますうしろの山に柴といふものふすぶるなりけり。めづらかにて、

「山がつのいほりにたけるまばまばもことゝひこなむ戀ふるさと人」。冬になりて雪ふり荒れたる頃、空の氣色もことに凄く眺め給ひてきんを彈きすさび給ひて、良清に歌うたはせ大輔横笛吹きて遊び給ふ。心留めてあはれなる手など彈き給へるにこともの〻聲どもはやめて涙をのごひあへり。むかし胡の國に遣しけむ女をおぼしやりてましていかばかりなりけむ、この世に我が思ひ聞ゆる人などをさやうに放ちやりたらむことなど思ふも、あらむ事のやうにゆゝしくて「霜の後の夢」とずし給ふ。月いとあかうさし入りてはかなき旅のおまし所は奥までくまなし。ゆかの上に夜深き空も見ゆ。入方の月すごく見ゆるに「唯これ西に行くなり」とひとりごち給ひて、

「いづかたの雲路にわれもまよひなむ月の見るらむこともはづかし」とひとりごち給ひて例のまどろまれぬあかつきの空に千鳥いとあはれになく。

「とも千鳥もろごゑになくあかつきはひとりねざめのとこもたのもし」。また起きたる人もなければ返す返すひとりごちて臥し給へり。夜深く御てうづまゐりて御念誦などし給ふも珍しきことのやうにめでたくのみおぼえ給へばえ見奉り捨てず、家にあからさまにもえ

出でざりけり。明石の浦はたゞはひ渡る程なれば、良清の朝臣かの入道のむすめを思ひ出でて文などやりけれど返事もせず。父の入道ぞ「聞ゆべきことなむ、あからさまにたい面もがな」と言ひけれど、うけひかざらむものゆゑ行きかゝりて空しくかへらむうしろでもをこなるべしと、くしいたうてゆかず。世に知らず心だかう思へるに國の内はかみのゆかりのみこそは畏きことにすめれど、僻める心は更にさも思はで年月を經けるに、この君かくておはすと聞きて母君に語らふやう「桐壺の更衣の御腹の源氏の光君こそおほやけの御かしこまりにて須磨の浦にものし給ふなれ。あこの御宿世にて覺えぬ事のあるなり。いかでかゝる序にこの君に奉らむ」といふ。母「あなかたはや。京の人の語るを聞けば、やんごとなきおほんめどもいと多く持ち給うてそのあまりに忍び忍び帝のみめをさへ過ち給ひてかくも騷がれ給ふなる人は、まさにかく怪しきやまがつを心とゞめ給ひてむや」といふ。腹立ちて、こえ志り給はじ、思ふ心ことなり。さる心をし給へ。ついでして此處にもおはしまさせむ」と心をやりていふもかたくなしく見ゆ。まばゆきまでおつらひかしづきけり。母君「などてめでたくとも物のはじめに罪にあたりて流されおはしたらむ人をしも心かけむ、さても心をとゞめ給ふべくはこそあらめ、戯れにてもあるまじきことなり」といふをいといたくつぶやく。「罪にあたることは唐土にも我がみかどにも、かく世にすぐれ何事にも人にことになりぬる人の必ずあることなり。いかに物し給ふ君ぞ、故母みやす所はおのがをぢに物し給ひし按察大納言のみむすめなり。いとかうざくなる名をとりて宮仕に出だし給へりしに國王すぐれて時め

かし給ふ事ならびなかりける程に人のそねみ多くてうせ給ひにしかど、この君のとまり給へるいとめでたし。かく女は心をたかくつかふべきものなり。おのれかゝるゐなかうどなりとておぼし捨てじなど言ひ居たり。このむすめすぐれたるかたちならねどなつかしうあてはかに心ばせあるさまなどぞげにやんごとなき人に劣るまじかりける。身の有樣を口惜しきものに思ひ知りて、たかき人はわれを何の數にもおぼさじ、程につけたる世をば更に見じ、命長くて思ふ人々に後れなばあまにもなりなむ、海の底にも入りなむなどぞ思ひける。父君所せく思ひかしづきて年に二たび住吉にまうでさせけり。神の御ましをぞ人知れずたのみ思ひける。須磨には年かへりて日長くつれづれなるに、植ゑし若木の櫻ほのかに咲きそめて空の氣色うらゝかなるに萬の事おぼし出でられてうち泣き給ふ折々おほかり。二月二十日あまり、いにし年京を別れし時心苦しかりし人々の御有樣などいとこひしく、南殿の櫻は盛になりぬらむ。一年の花の宴に院の御けしき内のうへのいと清らになまめいてわがつくれる句をずし給ひしも思ひ出できこえ給ふ。

「いつとなく大宮人の戀しきにさくらかざしゝけふも來にけり」。いとつれづれなるに、大殿の三位中將は今は宰相になりて人がらのいとよければ時世のおぼえ重くて物し給へど、世の中いとあはれにあぢきなく物の折ごとに戀しくおぼえ給へば、ことのきこえありて罪にあたるともいかゞはせむとおぼしなりて俄にまうで給ふ。うち見るより珍しくうれしきにもひとつ涙ぞこぼれける。すまひ給へるさま言はむ方なく唐めきたり。所のさま繪に書

きたらむやうなるに竹あめる垣まわたして石のはし松の柱おろそかなるものからめづらかにをかし。やまがつめきてゆるし色の黄がちなるに青鈍の狩衣指貫、うちやつれて殊更にぬなかびもてなし給へるしもいみじう見るに忍まれて清らなり。取りつかひ給へる調度もかりそめにしておまし所もあらはに見入れらる。碁雙六のばん、調度、たぎの具など田舎わざにしなして、念珠の具行ひ勤め給ひけりと見えたり。物まねれるなど、殊更所につけ興ありてしなしたり。海士どもあさりしてかいつ物もて参れるを召し出でて御覧ず。浦に年經るさまなど問はせ給ふにさまざま安げなき身のうれへを申す。そこはかとなくさへづるも、心の行くへは同じ事なるかなとあはれに見給ふ。御ぞどもかづけさせ給ふを生けるかひありと思へり。御馬ども近う立てて見やりなるくらか、何ぞなる、いねども取り出でてかふなどめづらしう見給ふ。あすか井少し謠ひて、月比の御物語泣きみ笑ひみ若君の何とも世をおぼさて物し給ふ悲しさを、おとゞの明暮につけておぼし歎くなど語り給ふに堪へ難くおぼしたり。つきすべくもあらねばなかなか片端もえまねばず。よもすがらまどろまず文作り明し給ふ。さいひながらも物の聞えをつゝみて急ぎかへり給ふ。いとなかなかなり。御かはらけまゐりて「酔の悲みの涙そゝぐ春の盃のうちに」ともろ聲にずし給ふ。御供の人ども皆涙をながす。おのがじゝはつかなる別惜むべかめり。朝ぼらけの空に雁つれてわたる。あるじの君、

「ふる里をいづれの春か行きて見むうらやましさはかへるかりがね」。宰相更に立ち出て

むてゝちせて、

「あかなくにかりのとこよを立ち別れ花のみやこに道やまどはむ」。さるべき都のつとなどよしあるさまにてあり。あるじの君かくかたじけなき御送にとて黒駒奉り給ふ。「ゆゝしうおぼされぬべけれど風にあたりては断えぬべければ」など申し給ふ。世にありがたげなる御馬のさまなり。「形見に忍び給へ」とていみじき笛の名ありけるなどばかり、人谷めつべきことはかたみにえし給はず。日やうやうさしあがりて心あわたゞしければかへりみのみしつゝ出で給ふを、見送り給ふけしきいとなかなかなり。「いつまただいめん給はらむとすらむ」、「さりともかくてやは」と申し給ふに、あるじ、

「雲近く飛びかふたづもそらに見よ我は春日のくもりなき身ぞ。かつはたのまれながら、かくなりぬる人は昔のかしこき人だにはかばかしう世に又まじらふ事難く侍りければ、何か都のさかひをまた見むとなむ思ひ侍らぬ」などの給ふ。宰相、

「たつかなき雲井にひとりねをぞなくつばさならべし友を戀ひつゝ。かたじけなく馴れ聞え侍りていとしもと悔しう思ひ給へらるゝ折多く」など、しめやかにもあらで歸り給ひぬる名殘いとゞ悲しうながめ暮し給ふ。やよひのついたちに出で來たる巳の日「今日なむかくおぼすことある人はみそぎし給ふべき」となまさかしき人の聞ゆれば、海づらもゆかしくて出で給ふ。いとおろそかにぜんじやうばかりを引き廻らしてこの國に通びける陰陽師召してはらへさせ給ふ。船にことごとしきひとがた載せて流すを見給ふにもよそへられて、

「しらざりし大海のはらに流れきてひとかたにやはものは悲しき」とて居給へるさま、さるはれに出でゝ言ふよしなく見え給ふ。海のおもてはうらうらとなぎ渡りて行くへも知らぬにこしかた行くさきおぼしつゞけられて、

「八百よろづ神もあはれと思ふらむをかせる罪のそれとなければ」とのたまふに俄に風吹き出でゝ空もかき暮れぬ。御はらへもしはてず立ちさわぎたり。ひぢがさ雨とか降りきていとあわたゞしければ皆歸り給はむとするに笠もとりあへずさる心もなきに萬吹きちらしまたなき風なり。波いといかめしう立ちきて人々の足をそらなり。海のおもてはふすまを張りたらむやうに光満ちて神鳴りひらめく。落ちかゝる心地して辛うじてたどりきて「かゝるめは見ずもあるかな。風などは吹けど氣色づきてこそあれ、あさましう珍らかなり」と惑ふに、猶止まず鳴りみちて雨のあしあたる所通りぬべくはらめきおつ。かくて世は盡きぬるにやと心細く思ひ惑ふに、君はのどやかに經うちずじておはす。暮れぬれば神少しなり止みて風ぞよるもふく。多く立てつる願の力なるべし。「今しばしかくだにあらば浪に引かれて入りぬべかりけり。高潮といふものになむとりあへず人そこなはるゝとは聞けどいとかゝることはまだ知らず」といひあへり。曉がた皆うちぬ休みたり。君も聊寢入り給へれば そのさまとも見えぬ人きて「など宮より召しあるには參り給はぬ」とてたどりありくと見るにおどろきて、さは海の中のりう王のいといたう物めでするものにて見入れたるなりけりとおぼすに、いとものむづかしうこの住ひ堪へがたくおぼしなりぬ。

明　石

猶雨風止まずかみなりおづまらで日頃になりぬ。いと物わびしきと數知らず。きしかた行くさき悲しき御有樣に心強うしも得おぼしなさず。いかにせまし、かゝりとて都に歸らむともまだ世に許されもなくては人わらはれなるとこそまさらめ、猶これより深き山を覓めてやゆ絶えなましとおぼすにも波風に騒がされてなど人の言ひ傳へむと後の世までいとかろがろしき名をや流しはてむとおぼしみだる。御夢にも唯同じさまなる物のみきつゝまつはし聞ゆと見給ふ。雲間もなく明け暮るゝ日數にそへて京の方もいとゞ覺束なく、かくながら身をはふらかしつるにやと心ぼそう おぼせど、かしらさし出づべくもあらぬ空の亂れに出で立ちまゐる人もなし。二條院よりぞあながちにあやしき姿にてそぼち參れる。みちかひにてだに人か何ぞとだに御覽じわくべくもあらず。まづ追ひ拂ひつべき賤のをの哀にむつまじうおぼさるゝも我ながらかたじけなくくしにける心の程思ひ知らる。御文には「あさましくをやみなき頃の氣色にいとゞ空さへ閉づる心地してながめやるかたなくなむ。

うら風やいかに吹くらむ思ひやる袖うちぬらしなみまなきころ」。哀に悲しきことゞも書き集め給へり。ひきあくるよりいとゞみぎはまさりぬべくかきくらす心ちし給ふ。「京にもこの雨風いと怪しき物のさとしなりとて、にんわうゑなど行はるべしとなむ聞え侍りし。

うちに參り給ふ上達部などもすべて道とぢて政も絶えてなむ侍る」などはかばかしうもあらずかたくなしう語りなせど、京の方のことゝ思せばいぶかしうて御まへに召し出でゝ問はせ給ふ。「唯例の雨のをやみなく降りて風は時々吹き出でつゝ日頃になり侍るを、例ならぬことに驚き侍るなり。いとかくちの底通るばかりのひふり、いかづちのおづまらぬことは侍らざりき」などいみじきさまに驚きおぢてをる顔のいとからきにも心細さまさりける。かくしつゝ世は盡きぬべきにやと思さるゝにその又の日の曉より風いみじう吹き潮高う滿ちて浪の音あらきこと嚴ほも山も殘るまじき氣色なり。神の鳴り閃くさま更にいはむかたなくて落ちかゝりぬとおぼゆるに有るかぎりさかしき人なし。「我はいかなる罪を犯してかくの悲しきめを見るらむ。父母にもあひ見ず悲しきめこの顔をも見て死ぬべきこと」となげく。君は御心をおづめて、何ばかりのあやまちにてかこの渚に命をば極めむと、强うおぼしなせどいと物さわがしければいろいろのみてぐら捧げさせ給ひて、「住吉の神近き境をおづめ守り給へ。まことに跡を垂れ給ふ神ならば助け給へ」と多くの大願を立て給ふ。おのおの自らの命をばさるものにてかゝる御身のまたなき例に沈み給ひぬべきことのいみじう悲しきに心を起して少し物覺ゆるかぎりは「身を代へてこの御身一つを救ひ奉らむ」ととよみて諸聲にほとけ神を念じ奉る。「帝王の深き宮に養はれ給ひていろいろのたのしみに驕り給ひしかど深き御うつくしみ大八洲に普く沈めるとも身がらをこそ多くうかべ給ひしか。今何のむくいにかこゝら横さまなる波風にはおぼゝれ給はむ。天地ことわり給へ。罪なくて罪にあたり、つかさくらゐを取られ家を離れ境を去りて明暮安き空なく歎き給ふに、かく悲しきめをさへ見、命盡きなむとするは前の世のむくいか、この世のをかしか、神ほとけ明にましまさばこのうれへやめ給へ」とみ社の方に向きてさまざまの願を立て、又海の中のりうわう、萬の神たちに願たてさせ給ふにいよいよ鳴り響きておはしますに續きたる廊に落ちかゝりぬ。ほのほ燃えあがりて廊は燒けぬ。こゝろたましひなくてあるかぎり惑ふ。うしろの方なる大炊でんとおぼしき屋に移し奉りて上下となく立ち込みていとらうがはしく泣きとよむ聲いかづちにも劣らず。空は墨をすりたるやうにて日も暮れにけり。やうやう風なほり雨のあしまめり星の光も見ゆるにこのおましどころのいと珍らかなるもいとかたじけなくて、寢殿にかへし移し奉らむとするに燒け殘りたる方もうとましげにそこらの人の踏み轟し惑へるにみすなども皆吹きちらしてけり。夜を明してこそはとたどりあへるに君は御ねんずじ給ひておぼしめぐらすにいと心あわたゞしし。月さし出て潮の近く滿ちけるあともあらはに名殘猶寄せかへる浪荒きを柴の戸押しあけて詠めおはします。近き世界に物の心を知り、きゞ方行くさきの事うちおぼえ、とやかくやとはかばかしう悟る人もなし。あやしき海士どもなどの、たかき人おはする所とて集り參りて聞きも知り給はぬ事どもを囀りあへるもいと珍らかなれどえ追ひも拂はず。「この風今暫しやまざらましかば潮のぼりて殘る所なからまし、神の助けおろかならざりけり」といふを聞き給ふもいと心細しといへばおろかなり。

「海にます神のたすけにかゝらずは鹽のやほあひにさすらへなまし」。ひねもすにいりもみつる風の騷ぎに、さこそいへ、いたうこうじ給ひにければ心にもあらずうちまどろみ給ふ。かたじけなきおましどころなればたゞ寄り居給へるに故院唯おはしましゝさまながら立ち給ひて、「などかくあやしき所には物するぞ」とて御手を取りて引き立て給ふ。「住吉の神の導き給ふまゝにはや船出してこの浦を去りね」との給はす。いと嬉しくて、「畏き御影に別れ奉りにしこなた、さまざま悲しき事のみ多く侍れば今はこの渚に身をや捨て侍りなまし」と聞え給へば、「いとあるまじきこと。これは唯いさゝかなるものゝむくいなり。我は位にありし時、過つことなかりしかど、おのづからをかしありければその罪を終ふる程いとまなくて、この世をかへりみざりつれど、いみじき憂に沈むを見るに堪へ難くて海に入り渚にのぼり、いたくこうじにたれど、かゝる序にだいりに奏すべき事あるによりてなむ急ぎのぼりぬる」とて立ち去り給ひぬ。飽かず悲しくて、「御供に參りなむ」と泣き入り給ひて見上げ給へれば、人もなくて、月の顏のみきらきらとして夢の心地もせず。御けはひとまれる心ちして空の雲あはれにたなびけり。年頃夢の中にも見奉らで戀しう覺束なき御さまをほのかなれどさだかに見奉りつるのみ面影に覺え給ひて、我かく悲しみを極め命つきなむとしつるを助けにかけり給へると哀におぼすによくぞかゝるさわぎもありけると名殘なのもしう嬉しとおぼえ給ふ事限なし。胸つとふたがりてなかなかなる御心惑ひに、現の悲しきことも打ち忘れて夢にも御いらへを今少し聞えずなりぬる事といぶせさに、又や見え給ふと殊更に寢入り給へど更に御目もあはで曉方になりにけり。渚にちひさやかなる船寄せて人二三人ばかりこの度の御宿りをさしてく。何人ならむと問へば、明石の浦よりさきの守まほぢの御船よそひて參れるなり。源少納言侍ひ給はゞたいめして事の心とり申さむ」といふ。良清驚きて、「入道はかの國の得意にて年比あひ語らひ侍りつれど私にいさゝかあひ怨むる事侍りてことなる消息をだに通はさで久しうなり侍りぬるを、浪のまぎれにいかなる事かあらむ」とおぼめく。君の御夢などもおぼし合する事もありて「はや逢へ」との給へば船にいきて逢ひたり。さばかり烈しかりつる浪風にいつの間にか船出まつらむと心えがたく思へり。「いぬるついたちの日の夢に、さま異なるものゝ告げ知らする事侍りしかば信じ難き事と思ひ給へしかど十三日にあらたなるまゐるし見せむ船をよそひまうけて必ず雨風やまばこの浦に寄せよと、重ねて示すことの侍りしかば試に船のよそひをまうけて待ち侍りしに、いかめしき雨風いかづちの驚し侍りつれば、ひとのみかどにも夢を信じて國を助くる類多う侍りけるを用ゐさせ給はぬまでもこの戒めの日を過ぐさずこのよしを告げ申し侍らむとて船いだし侍りつるに、怪しき風ほそう吹きてこの浦につき侍ること誠に神のまゐるべ違はずなむ。こゝにも若しまろしめす事や侍りつらむとてなむ。いとも憚り多く侍れどこのよし申し給へ」といふ。良清忍びやかに傳へ申す。君おぼしまはすに、夢現さまざまづかならず、さとしのやうなる事どもをさし方行く末おぼし合せて、世の人の聞き傳へむ後のそしりも安からざるべきを憚りて、まことの神のたすけにもあらむを背くものならば又これよりまさりて人笑

はれなるめをや見む、現の人の心だに猶苦し、はかなき事をもかつ見つゝわれより齡まさりもしは位高く時世のよせ今ひときはまさる人には靡き隨ひて、その心むけをたどるべきものなり、退きてとがなしとこそ昔のさかしき人も言ひ置きけれ、げにかく命を極め世に又なきめの限を見盡しつ、更に後のあとの名をはぶくとてもたけきこともあらじ、夢の中にも父帝の御敎ありつればまた何事をか疑はむと思して御かへりの給ふ。「知らぬ世界に珍しきうれへのかぎり見つれど都の方よりとて言問ひおこする人もなし。唯ゆくへなき空の月日の光ばかりを故郷の友とながめ侍るに嬉しき釣船をなむ。かの浦にまづやかにかくろふべき隈侍りなむや」との給ふ。限なく喜びかしこまりまうす。「ともあれかくもあれ夜の明けはてぬさきに御船に奉れ」とて例の親しきかぎり四五人ばかりして奉りぬ。例の風出で來て飛ぶやうに明石につき給ひぬ。唯はひ渡る程は片時のまといへど猶怪しきまで見ゆる風のこゝろなり。濱のさまげにいと心異なり人まげう見ゆるのみなむ御願ひに背きける。入道のらうじまめたる所々海のつらにも山がくれにも時々につけて興をさかすべき渚の苫や、おこなひをして後の世のことを思ひすましつべき山水のつらにいかめしき堂を立てゝ、三味行ひこの世のまうけに秋の田の實を刈り收め殘の齡積むべき稻の倉町どもなど折々所につけたる見所ありてまあつめたり。高潮におぢてこの頃むすめなどは岡邊のやどに移して住ませければこの濱のたちに心安くおはします。船より御車に奉り移るほど日やうやうさしあがりてほのかに見奉るより老も忘れ齡のぶる心地して笑みさかえてまづ住吉の神をかつがつ拜み奉る。月日の光を手に得奉りたる心地していとなみ仕うまつることとわりなり。所のさまをばさらにもいはず作りなしたる心ばへこだちたていし前裁などの有樣えもいはぬ入江の水など繪に書かば心のいたり少からむ繪師は書き及ぶまじと見ゆ。月頃の御住ひよりはこよなく明になつかし。御しつらひなどえならずして住ひけるさまなどげに都のやむごとなき所々に異ならず。えんにまばゆきさまはまさりざまにぞ見ゆる。少し御心しづまりては京の御文ども聞え給ふ。參れりし使は「今はいみじき道に出で立ちて悲しきめを見る」と泣き沈みて、あの須磨にとまりたるを召して身にあまれる物ども多く給ひてつかはす。むつましき御いのりの師どもさるべき所々にはこの程の御有樣委しく言ひつかはすべし。入道の宮ばかりにはめづらかにてよみがへれるさまなど聞え給ふ。二條院の哀なりし程の御かへりは書きもやり給はず、うちおきうちおき押しのごひつゝ聞え給ふ御氣色なほことなり。「かへすがへすいみじきめのかぎりを見盡しはてつるありさまなれば今はと世を思ひ離るゝ心のみまさり侍れど鏡を見てもとの給ひし面影の離るゝ世なきを、かくおぼつかなながらやと、こゝら悲しきさまざまのうれはしさはさし置かれて、

はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちにうらづたひして。夢のうちなる心地のみして覺めはてぬほど、いかにひがごと多からむ」とそこはかとなくかき亂り給へるしもぞいと見まほしきそばめなるを、いとこよなき御志の程と人々見奉る。おのおの故郷に心細げなることづてすべかめり。をやみなかりし空の氣色名殘なくすみわたりてあさりする海

士どもほこらしげなり。須磨はいと心ぼそくて海士のいはやも稀なりしを人しげき厭ひはき給ひしかど、こゝは又さま異に哀なること多くて萬におぼしなぐさまる。あるじの入道行ひ勤めたるさまいみじう思ひすましたるを唯このむすめ一人をもてわづらひたる氣色、いと傍いたきまで時々漏し愁へ聞ゆ。御心ちにもをかしと聞きおき給ひし人なればかくおぼえなくてめぐりおはしたるもさるべき契あるにやと思しながら、猶かう身を沈めたる程はおこなひより外のことは思はじ、都の人もたゞなるよりはいひしに違ふと思さむも心恥しうおぼさるれば氣色だち給ふことなし。事に觸れて心ばせ有樣なべてならずもありけるかなとゆかしう思されぬにしもあらず。こゝにはかしこまりて身づからもをさをさ參らず物隔たりたるしもの屋にさぶらふ。さるは明暮見奉らまほしうあかず思ひ聞えていかで思ふ心をかなへむと、ほとけ神をいよいよ念じ奉る。年は六十ばかりになりたれどいと清げにあらまほしう行ひさらぼひて、人の程のあてはかなればにやあらむ、うち僻みほれぼれしき事はあれど、いにしへの事をも見知りて物きたなからずよしづきたるともまじれゝば昔の物語などせさせて聞き給ふに少しつれづれのまぎれなり。年頃おほやけわたくし御いとまなくてさしも聞き置き給はぬ世のふることどもくづし出でゝ聞ゆ。かゝる所をも人をも見ざらましかばさうざうしくやとまでけふありと思す事もまじる。「かうは馴れ聞ゆれどいとけだかう心恥しき御有樣にさこそいひしがつゝましうなりてわがおもふことは心のまゝにもえうち出で聞えぬを、心もとなう口惜し」と母君といひ合せてなげく。さうじみもおしなべ

ての人だにめやすきは見えぬ世界に、世にはかゝる人も坐しけりと見奉りしにつけて身のほど知られていと遙にぞ思ひ聞えける。親たちのかく思ひあつかふを聞くにも似げなき事かなと思ふにたゞなるよりは物哀なり。四月になりぬ。衣更の御さうぞく、みちやうのかたびらなどよしあるさまにきいづ。よろづに仕うまつり營むをいとほしうすゞろなりとおぼせど、人ざまのあくまで思ひあがりたるさまのあてなるにおぼしゆるして見給ふ。京よりもうちきさりたる御とぶらひども たゆみなくおほかり。のどやかなる夕月夜に海の上曇りなく見え渡れるも住み馴れ給ひし故里の池水に思ひまがへられ給ふに、いはむ方なく戀しきことといづかたともなく行くへなき心地し給ひて、唯目の前に見やらるゝは淡路島なりけり。「あはとはるかに」などの給ひて

「あはと見る淡路の島の哀れさへ殘るくまなくすめる夜の月」。久しう手も觸れ給はぬきんを袋より取り出で給ひて、はかなく搔き鳴し給へる御さまを見奉る人もやすからず哀に悲しう思ひあへり。廣陵といふ手をあるかぎり彈きすまし給へるに、かの岡邊の家も松の響波の音にあひて心ばせある若き人は身にしみて思ふべかめり。何とも聞きわくまじきこのもかのものきはぶる人どもゝすゞろはしくて濱風をひきありく。入道もえ堪へで、くやうほふたゆみて急ぎ參れり。「更に背きにし世の中も取り返し思ひ出でぬべく侍る。後の世に願ひ侍る所のあり樣も思う給へやらるゝ世の樣かな」となくなくめで聞ゆ。我が御心にも折々の御あそびその人かの人の琴笛、もしは聲の出しさま、時々につけて世にめでられ給ひしあ

りさま、みかどよりはじめ奉りてもてかしづきあがめられ奉り給ひしを、人の上も我御身の有様もおぼし出でられて夢の心地し給ふまゝに、搔き鳴し給へる聲も心すごく聞ゆ。ふる人は涙もとめあへず。岡邊に琵琶箏の琴取りにやりて入道琵琶の法師になりていとをかしうめづらしうて、一つ二つ彈き出でたり。箏の御琴まゐりたれば少し彈き給ふもさまざまいみじうのみ思ひ聞えたり。いとさしも聞えぬ物の音だに折からこそはまさるものなるを、はるばると物の滯りなきうみづらなるに、なかなか春秋の花紅葉の盛なるよりは唯そこはかとなうあはれなる陰どもなまめかしきに、水雞のうちたゝきたるは誰が門さしてと哀におぼゆ。ねもいとになう出づることゞもをいと懷しう彈き鳴したるも御心とまりて「これは女の懷しきさまにてあどけなく彈きたるこそをかしけれ」と大かたにの給ふを、入道はあいなくうち笑みて「遊ばすより懷しきさまなるはいづこのか侍らむ。なにがし延喜の御手より彈き傳へたること三代になむなり侍りぬるを、かう拙き身にてこの世のことは捨て忘れ侍りぬるを、物のせちにいぶせきをりはかき鳴し侍りぬるを、あやしうまねぶものゝ侍るこそ玄ねんにかのせんだいわうの御手に通ひて侍れ。山伏のひが耳に松風を聞きわたし侍るにやあらむ。いかでこれ忍びて聞し召させてしがな」と聞ゆるまゝにうちわなゝきて涙落すべかめり。君「ことをことゝも聞き給ふまじかりけるあたりにねたきわざかな」とておしやり給ふ。「怪しう昔より箏は女なむ彈きとるものなりける。嵯峨の御つたへにて、女五の宮、さるよの中の上手に物し給ひけるをその御すぢにて取り立てゝ傳ふる人なし。すべて只今世

に名を取れる人々かきなでの心やりばかりにのみあるをこゝにかう彈き込め給へりけるいと興ありけることかな。いかでかは聞くべき」との給ふ。「聞し召さむには何のはじかりかは侍らむ。御まへに召しても あきびとの中にてだにこそふること聞きはやす人は侍りけれ。琵琶なむまことの手を彈きあづむる人いにしへも難う侍りしを、をさをさ滯ることなうなつかしき手などすぢことになむ。いかでたどるにか侍らむ。荒き浪の聲にまじるは悲しうも思う給へられながらかきつむる物なげかしさ紛るゝ折々も侍る」などすきゐたればをかしとおぼして箏の琴とりかへて給はせたり。げにいとすぐして搔い彈きたり。今の世に聞えぬすぢひきつけて手づかひいといたうからめきゆのねふかうすましたり。伊勢の海ならねど「清きなぎさに貝やひろはむ」など聲よき人に謠はせて、我も時々ひやうしとりて聲うちそへ給ふを、琴彈きさしつゝめで聞ゆ。御くだものなど珍しきさまにて參らせ、人々に酒強ひそしなどしておのづから物忘れもしぬべきよのさまなり。いたく更け行くまゝに、松風涼しうて、月も入方になるまゝに、すみまさりて靜なるほどに 御物語のこりなく聞えて、この浦に住み始めし程の心づかひ後の世をつとむるさまかきくづし聞えてこのむすめのありさま問はずがたりに聞ゆ。をかしきものゝさすがに哀と聞き給ふふしぶしもあり。「いととり申し難き事なれどわが君からおぼえなき世界に假にてもうつろひおはしましたるは若し年頃おいぼうしの祈り申し侍る 神ほとけの憐びおはしまして、暫しの程御心をも惱し奉るにやとなむ思う給ふる。その故は住吉の神を賴み始め奉りてこの十八年になり侍りぬ。めのわら

はのいときなう侍りしより思ふ心侍りて、年頃の春秋ごとに かのみやしろに参ることなむ侍る。ひるよるの六時のつとめにみづからのはちすの上の願ひをばさる物にて、唯この人を高きほいかなへ給へとなむ念じ侍る。さきの世の契つたなくて こそかく口惜しき山がつとなり侍りけめ。おやおとゞの位を保ち給へりき。自らかく田舍の民となりて侍り。次々さのみ劣りまからむは何の身にかなり侍らむと悲しく思ひ侍るを、これは生れし時より頼む所なむ侍る。いかにして都のたかき人に奉らむと思ふ心深きにより、ほどほどにつけてあまたの人のそねみを負ひ、身のためからきめを見る折々も多く侍れど更に苦みと思ひ給へず。命の限はせばき袖にもはぐゝみ侍りなむ。かくながら見棄て侍りなば海の中にもまじり失せねとなむおきて侍る」などすべてまねぶべくもあらぬ事どもをうち泣きうちなき聞ゆ。君も物をさまざまおぼし續くるをりからはうち涙ぐみつゝ聞しめす。「横さまの罪にあたりて思ひがけぬ世界に漂ふも何の罪にかと覺束なく思ひつるを、こよひの御物語に こそはとあはれになむ。などかはかくさだかに思ひ知り給ひけることを今までは告げ給はざりつらむ。都離れし時より世の常なきもあぢきなうおこなひより外のことなくて月日を經るに心も皆くづほれにけり。かゝる人ものし給ふとはほの聞きながら いたづら人をばゆゝしきものにこそ思ひ捨て給ふらめと思ひくしつるを、さらば導き給ふべきにこそあなれ。心ぼそき獨寢のなぐさめにも」などの給ふをかぎりなく嬉しと思へり。

「ひとりねは君も志りぬやつれづれと思ひ あかしの浦さびしさを。まして年月思ひ給へわたるいぶせさをおしはからせ給へ」と聞ゆるけはひうちわなゝきたれど、さすがにゆゑなからず。「されど浦なれたらむ人は」とて

「旅衣うらかなしさにあかしかね草の まくらはゆめもむすばず」とうち亂れ給へる御さまはいとゞ愛敬づきいふよしなき御けはひなる。數知らぬ事ども聞え盡したれどうるさしや。ひがことどもにかきなしたればいとゞ をこにかたくなしき入道の心ばへも顯れぬべかめり。思ふ事かつかつかなひぬる心地してすゞきう思ひ居たるに、又の日の晝つ方、岡邊に御文つかはす。心恥しきさまなめるもなかなかゝるものゝくまにぞ思の外なる事もこるべかめると心づかひし給ひて、こまのくるみ色の紙にえならず引きつくろひて、

「をちこちも知らぬ雲居にながめわびかすめし宿の梢をぞとふ。思ふには」とばかりやありけむ。入道も人知れずまち聞ゆとてかの家に來居たりけるもしるければ、御使いとまばゆきまで醉はす。御かへりいとひさし。内に入りてそゝのかせどむすめは更に聞かず。いと恥しげなる御文のさまにさし出でむ手つきもはづかしうつゝましう人の御ほど我身のほど思ふにこよなくて、心地あしとて寄り臥しぬ。言ひわびて入道をかく。「いともかしこさになむ。さるびて侍るたもとに、つゝみあまりぬるにや、更に見給ひも及び侍らぬかしこさになむ。さるほ、

ながむらむ同じ雲居をながむるは思ひもおなじおもひなるらむ。となむ見給ふる。いとすきずきしやゝと聞えたり。みちのくにがみに いたうふる めきたれど 書きざまよしばみた

り。げにもすきたるかなと目ざましう見給ふ。御使に、なべてならぬ玉もなどかづけたり。又の日「せんじがきは見知らずなむ」とて、

「いぶせくも心にものをなやむかなやよやいかにと問ふ人もなみ。いひがたみ」とこの度はいといたうなよびたる薄様にいと美くしげに書き給へり。若き人のめでざらむもいと餘りうもれいたからむ。めでたしとは見れどなずらひならぬ身のほどのいみじうかひなければ、なかなか世にあるものと尋ね知り給ふにつけて涙ぐまれて、更に例のどうなきをせめていはれて、淺からずあめたる紫の紙に墨つき濃く薄くまぎらはして、

「思ふらむ心のほどややよいかにまだ見ぬ人の聞きかなやまむ」。手のさま書きたるさまなどやんごとなき人にいたう劣るまじう上ずめきたり。京のことおぼえてをかしと見給へど、うちあきさりて遣さむも人めつゝましければ、二三日へだてつゝ、つれづれなる夕暮、もしは物哀なる曙などやうに紛らはして折々人も同じ心に見知りぬべき程推し量りてかきかはし給ふに似げなからず。心深く思ひあがりたる氣色も見ては止まじとおぼすものから、良清が、らうじていひし氣色も目ざましう、年頃心づけてあらむを目の前に思ひ違へむもいとほしう思しめぐらされて、人すゝみ參らばさる方にても紛らはしてむと覺せど、女はたなかなかやんごとなき際の人よりも、いたう思ひあがりて妬げにもてなし聞えたれば心くらべにてぞ過ぎける。京の事をかくせき隔たりてはいよいよ覺束なく思ひ聞え給ひて、いかにせまし戯ぶれにくゝもあるかな、忍びてや迎へ奉りてましと思し弱る折々あれどさりともか

くてやは年を重ねむ、今更に人わろき事をやはと思しあづめたり。』その年おほやけに物のさとしあきさりて物さわがしき事多かり。三月十三日神なりひらめき、雨風さわがしき夜、帝の御夢に院の帝おまへのみはしのもとに渡らせ給ひて御氣色いと惡しうて睨み聞えさせ給ふを、畏まりておはします。聞えさせ給ふ事ども多かり。源氏の御事どもなりけむかし。いと恐しういとほしと思して、后に聞えさせ給ひければ「雨などふり空亂れたる夜は、思ひなしなる事はさぞ侍る。かろがろしきやうに覺し驚くまじき事」と聞え給ふ。睨み給ひしに見合せ給ふと見しけにや、御目煩ひ給ひて堪へ難う惱み給ふ。御つゝしみ內にも宮にも限りなくせさせ給ふ。おほきおとどうせ給ひぬ。ことわりの御齡なれど次々におのづから騷しき事あるに大宮もそこはかとなう煩ひ給ひて程經れば弱り給ふやうなる、內に思し歎く事さまざまなり。猶この源氏の君誠に犯すことなきにて、かくあづむならば、必ずこのむくいありなむとなむ覺え給ふ。今は猶もとの位をも給ひてむと度々おぼしの給ふを「世のもどきあはあはしきやうなるべし。罪に落ちて都を去りし人をみとせをだにすぐさず許されむことは世の人もいかゞ言ひ傳へ侍らむ」など后固う諫め給ふにおぼしはゞかる程に月日かさなりて、御なやみどもさまざまに重り增らせ給ふ。』明石には例の秋は濱風の殊なるに、獨寢もまめやかに物侘しうて入道にも折々語らはせ給ふ。「とかうまぎらはして、こち參らせよ」との給ひて、渡り給はむことをばあるまじう思したるを、さうじみはた更に思ひ立つべくもあらず。いと口惜しき際の田舍人こそかりにくだりたる人のうちとけ事につきてさやうに輕ら

かに語らふわざをもすなれ、人數にもおぼされざらむものゆゑわれはいみじき物思をやそへむ、かく及びなき心を思へる親達も世ごもりてすぐす年月こそあいなだのみに行く末心にくゝ思ふらめ、なかなかなる心をや盡さむと思ひて、唯この浦におはさむ程斯る御文ばかりを聞えかはさむこそおろかならね、年頃音にのみ聞きていつかはさる人の御有樣をほのかにも見奉らむなど遙に思ひ聞えしを、かく思ひかけざりし御住ひにてまほならねどほのかにも見奉り、よになきものと聞き傳へし御琴の音をも風につけて聞き、明暮の御有樣覺束なからでかくまで世にあるものと思し尋ぬるなどこそかゝる海士の中に朽ちぬる身にあまる事なれなど思ふに、いよいよ耻しうて露もけぢかき事は思ひよらず。親達はこゝらの年頃のいのりがなふべきを思ひながら、ゆくりかに見せ奉りておぼしかずまへざらむ時いかなる歎をかせむと思ひやるにゆゝしくて、めでたき人と聞ゆともつらういみじうもあるべきを目に見えぬほとけ神を頼み奉りて人の御心をも宿世をも知らでなどうち返し思ひ亂れたり。君はこの頃の浪の音に「かの物の音を聞かばや。さらずばかひなくこそ」など常はの給ふ。忍びてよろしき日見せて母君のとかく思ひ煩ふを聞き入れず、弟子どもなどにだに知せず心一つにたちゐかゞやくばかりおつらひて、十三日の月の華やかにさし出でたるに、唯「あたら夜の」と聞えたり。君はすきのさまやと思せど御直衣奉り引きつくろひて夜ふかして出で給ふ。御車は二なく作りたれど所せしとて御馬にて出で給ふ。惟光などばかりをさぶらはせ給ふ。やゝ遠く入る所なりけり。道のほどもよもの浦々見渡し給ひて思ふどち見まほしき入江の月かげにもまづ戀しき人の御事を思ひ出で聞え給ふにやがて馬ひきすぎて赴きぬべくおぼす。

「秋の夜のつきげの駒よわがこふる雲居にかけれ時のまも見む」とうちひとりごたれ給ふ。造れるさま木ぶかくいたき所まさりて見所ある住ひなり。海のつらはいかめしうおもしろく、これは心ぼそくすみたるさま、こゝに居て思ひ殘す事はあらじとすらむとおぼしやらるゝに物哀なり。三昧堂近くて鐘の聲松の風に響きあひてものがなしう岩に生ひたる松の根ざしも心ばへあるさまなり。前栽どもに蟲の聲をつくしたり。こゝかしこの有樣など御覽ず。むすめすませたる方は心ことにみがきて月入れたる槇の戸口、氣色ばかりおしあけたり。うちやすらひ何かとの給ふにもかうまでは見え奉らじと深う思ふに物歎しうて、うちとけぬ心ざまをこよなうも人めいたるかな、さしもあるまじききはの人だにかばかりいひよりぬれば心強うしもあらずならひたりしを、いとかくやつれたるにあなづらはしきにやとねたう、さまざまにおぼし惱めり。情なうおし立たむも、ことのさまに違へり、心くらべに負けむこそ人わるけれなど亂れ怨み給ふさま、げに物思ひ知らむ人にこそ見せまほしけれ。近き几帳のひもに箏の琴のひき鳴されたるもけはひしどけなくうちとけながら、搔きまさぐりける程見えてをかしければ「この聞きならはたることをさへや」などよろづにの給ふ。

「むつごとをかたりあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむやと」。

「明けぬ夜にやがてまどへる心にはいづれを夢とわきてかたらむ」。ほのかなるけはひ伊

勢の御息所にいとよう覚えたり。何心もなくうちとけて居たりけるをかう物覚えぬにいとわりなくて近かゝりけるざうしの内に入りて、いかで堅めけるにかいとつよきを、強ひてもおし立ち給はぬさまなり。されどさのみもいかでかはあらむ、人ざまいとあてにそびえて心耻しきけはひぞまたる。かうあながちなりける契を思すにも淺からず哀なり。御志のちかまさりするなるべし。常はいとはしき夜の長さも疾く明けぬる心地すれば人に知られじとおぼすも、心あわたゞしうてこまかに語らひ置きて出で給ひぬ。御文いと忍びてぞけふはある。あいなき御心のおこなりや。こゝにもかゝる事いかで漏さじとつゝみて御使ことごとしくももてなさぬを胸いたく思へり。かくて後は忍びつゝ時々おはす。程も少し離れたるにおのづから物いひさがなき海士のこもや立ちまじらむとおぼし憚る程を、さればよと思ひ歎きたるを、げにいかならむと入道も極樂の願ひをば忘れて唯この氣色を待つことにはす。今更に心を亂るもいといとほしげなり。二條の君の、風のつてにも漏り聞き給はむ事は、戯ぶれにても心の隔ありけると思ひ疎まれ奉らむは心苦しう耻しうおぼさるゝもあながちなる御志の程なりかし。かゝる方の事をばさすがに心留めて怨み給へりし折々、などてあやなきすさび事につけてもさ思はれ奉りけむなどとりかへさまほしう、人の有樣を見給ふにつけても戀しさの慰むかたなければ、例よりも御文こまやかに書き給ひて、奥に「まことや、われながら心より外なるなほざりごとにて疎まれ奉りしふしぶしを思ひ出づるさへ胸痛きに、又怪しう物はかなき夢をこそ見侍りしか。かう聞ゆる間はずがたりに隔なき心のほどは思し合せよ。誓ひしこともいなど書きて「何事につけても、

　まほしほとまづぞ流るゝかりそめのみるめは蜑のすさびなれども」とある御かへり、何心なくらうたげに書きて、はてに「忍びかねたる御夢がたりにつけても思ひ合せらるゝことの多かるに、

　うらなくも思ひけるかな契りしをまつより浪は越えじものぞと」。老らかなるものからたゞならずかすめ給へるを、いと哀にうち置き難く見給ひて、名殘久しう忍びの旅寢もし給はず。女思ひしもまるさに、今ぞ誠に身も投げつべき心ちする。行くすゑみじかげなる親ばかりをたのもしきものにていつの世に人なみなるべき身とは思はざりしかど、唯そこはかとなくてすぐしつる年月は何事をか心をもなやましけむ、かういみじう物思はしきこはかとなくてすぐしつる年月は何事をか心をもなやましけむ、かういみじう物思はしき世にこそありけれと、かねて推し量り思ひしよりもよろづに悲しけれど、なだらかにもてなしてにくからぬさまに見え奉る。哀とは月日にそへておぼしませど、やんごとなき方の覺束なくて、年月をすぐし給ふがたゞならずうち思ひおこせ給ふらむがいと心苦しければ、一人臥しがちにて過し給ふ。繪をさまざまかき集めて思ふことゞもを書きつけ、かへりごと聞くべきさまにまなし給へり。見む人の心にまみぬべきものゝさまなり。いかでかそらに通ふ御心ならむ。二條の君も物哀に慰む方なく覺え給ふ。折々同じやうに繪をかき集め給ひつゝやがてわが御有樣をにきのやうに書き給へり。いかなるべき御有樣どもにかあらむ。年かはりぬ。『内に御藥のことありて世の中さまざまにのゝしる。當代の皇子は右大臣の御むすめ、承

香殿の女御の御腹に、男御子生れ給へる、二つになり給へばいといはけなし。春宮にこそは譲り聞え給はめ、おほやけの御後見をし世をまつりごつべき人をおぼしめぐらすに、この源氏のかく沈み給ふ事いとあたらしう、あるまじきことなれば、遂に后の御いさめをも背きて許されぬべき定め出できぬ。去年よりきさきも御ものゝけに惱み給ひさまざまのものゝさとしまさりさわがしきを、いみじき御つゝしみどもをまさるしにや、よろしうおはしましける。御目のなやみさへ此頃重くならせ給ひて、物心細く思されければ、七月二十よ日の程に又重ねて京へ歸り給ふべき宣旨下る。つひの事と思ひしかど、世の常なきにつけてもいかになりはつべきにかと歎き給ふを、かうにはかなれば嬉しきにつけても、又この浦を今はと思ひ離れむ事をおぼし歎くに、入道さるべき事と思ひながらうち聞くより胸ふたがりて覺ゆれど、思ひのごと榮え給はゞこそは我が思のかなふにはあらめなど思ひなほす。その頃はよがれなく語らひ給ふ。みなつきばかりより心苦しき氣色ありて惱みけり。かく別れ給ふべき程なればあやにくなるにやありけむ、ありしよりも衰に思して怪しう物思ふべき身にもありけるかなと思し亂る。女は更にもいはず思ひしづみたり。いとことわりや。思の外に悲しき道に出で立ち給ひしかど遂には行きめぐりきなむとかつはおぼし慰めき。この度は嬉しき方の御出立の又やはかへり見るべきと思すに哀なり。侍ふ人々もほどほどにつけては喜び思ふ。京よりも御迎に人々參り心地よげなるを、あるじの入道涙にくれて月も立ちぬ。程さへ哀なる空の氣色に、なぞや心づから今も昔もすゞろなる事にて身をはふらかすむとさまざまにおぼし亂る。心を知れる人々は、あなにく例の御癖ぞと見奉りむづかるめり。月比はつゆ人に氣色見せず時々かいまぎれなどし給へるつれなさを、この頃あやにくに、なかなかの人の心づくしにとつきじろふ。少納言まゐるべして聞え出でし始の事などさゝめきあへるをたゞならず思へり。あさてばかりになりて例のやうにいたうもふかさで渡り給へり。さやかにもまだ見給はぬかたちなどいとよしよしゝうけだかきさまして、目ざましうもありけるかなと見捨て難く口惜しう思さる。さるべきさまにて迎へむとおぼしなりぬ。さやうにぞ語らひ慰め給ふ。男の御かたち有樣はた更にもいはず、年比の御おこなひにいたくおもやせ給へるしも言ふかたなくめでたき御有樣にて心苦しげなるけしきにうち涙ぐみつゝ、哀に深く契り給へるはたゞかばかりをさいはひにてもなどかやまざらむとまでぞ見ゆめれど、めでたきにしも我が身のほどを思ふにもつきせず。浪の聲秋の風には猶ひゞきことなり。鹽燒く煙かすかにたなびきてとりあつめたる所のさまなり。

「このたびは立ち別るとももしほやくけぶりは同じかたになびかむ」との給へば、

「かきつめて海士のたくもの思ひにも今はかひなきうらみだにせじ」。哀にうち泣きてことずくなゝるものから、さるべきふしの御いらへなど淺からず聞ゆ。この常にゆかしがり給ふ物のねなど更に聞かせ奉らざりつるをいみじう恨み給ふ。「さらばかたみにも忍ぶばかりのひとことをだに」とのたまひて京よりもておはしたりしきんの御こと取りにつかはして、心ことなるまらべをほのかに搔き鳴らし給へる、深き夜のすめるは譬へむ方なし。入道もえ

堪へで、自ら箏の琴取りてさし入れたり。自らもいとど涙さへそゝのかされて留むべき方なきにさそはるゝなるべし。忍びやかに調べたる程いと上手めきたり。入道の宮の御琴の音を只今の又なきものに思ひ聞えたるは今めかしう、あなめでたと、聞く人の心行きてかたちさへ思ひやらるゝことはげにいと限なき御琴の音なり。これは飽くまで彈きすまし心にくゝ妬きねぞまされる。この御心にだに始めて哀になつかしう、まだ耳なれ給はぬ手など心やましき程にひきさしつゝ飽かずおぼさるゝにも、月頃など強ひても聞きならさゞりつらむと悔しうおぼさる。心のかぎり行くさきの契をのみし給ふ。「きんは又かきあはするまでのかたみに」との給ふ。女、

「なほざりにたのめおくめる一ことをつきせぬ音にやかけて忍ばむ」。いふともなき口ずさびを怨み給ひて、

「逢ふまでのかたみに契る中の緒のまらべはことにかはらざらなむ。このね違はぬさきに必ずあひ見む」とたのめ給ふめり。されど唯別れむ程のわりなさを思ひむせたるもいとことわりなり。立ち給ふ曉は夜ふかう出で給ひて御迎の人々もさわがしければ心もそらなれど人まをはからひて、

「うちすてゝ立つも悲しき浦なみのなごりいかにと思ひやるかな」。御かへり、

「年經つる苦屋も荒れてうきなみのかへるかたにや身をたぐへまし」とうち思ひけるまゝなるを見給ふに忍び給へどほろほろとこぼれぬ。心知らぬ人々は、猶かゝる御住ひなれど

年頃といふばかりなれ給へるを今はと思すはさもある事ぞかしなど見奉る。良清などはおろかならずおぼすなめりかしとにくゝぞ思ふ。「嬉しきにもげに今日をかぎりにこの渚を別るゝこそ」など哀がりて口々まほたれ言ひあへる事どもあめり。されど何かはとてなむ。入道今日の御まうけいといかめしう仕うまつれり。人々下のまなまで旅のさうぞくめづらしきさまなり。いつのまにかまあへけむと見えたり。御よそひはいふべくもあらず。みぞびつあまたかけさぶらはす。まことの都のつとにまつべき御贈物どもゆゑづきて思ひよらぬくまなし。今日奉るべきかりの御さうぞくに、

「よる浪にたちかさねたる旅ごろもまほどけしとや人のいとはむ」とあるを御覽じつけて、さわがしけれど、

「かたみにぞかふべかりける逢ふことの日數へだてむ中の衣を」とて志あるをとて奉りかふ。御身になれたるどもを遣す。げに今ひとへまのばれ給ふべき事をそふるかたみなめり。えならぬ御ぞに匂ひのうつりたるをいかゞ人の心にもまめざらむ。入道今はと世を離れ侍りにしことなれども今日の御おくりに仕うまつらぬ事など申してかいつくるもいとほしながら若き人は笑ひぬべし。

「世を海にこゝらまほじむ身となりてなほこの岸をえこそはなれね。心のやみはいとゞ惑ひぬべく侍れば境までだに」と聞えて「すきずきしきやうなれど思し出でさせ給ふをり侍らば」など御氣色ばまほる。いみじう物を哀とおぼして所々うち赤み給へる御まみのわたり

など言はむかたなく見え給ふ。「思ひ捨て難きすぢもあめれば今いと疾く見なほし給ひてむ。唯このすみかこそ見捨てがたけれ。いかゞすべき」とて、

「都出でし春のなげきにおとらめや年ふる浦をわかれぬる秋」とておしのごひ給へるにいとゞ物おぼえずおほたれまさるたちゐもあさましうよろぼふ。さうじみの心ちは譬ふべきかたなくてかうしも人に見えじと思ひまづむれど、身のうきをもとにてわりなきことなれどうち棄て給へる恨のやる方なきに、面影そひて忘れがたきにたけきことゝは唯涙に沈めり。母君も慰めわびて「何にかく心づくしなる事を思ひそめけむ。すべてひがひがしき人に從ひける心のをこたりぞ」といふ。「あなかまやおぼしすつまじき事も物し給ふめればさりともおぼす所あらむ。思ひ慰めて御湯などをだにまゐれ。あなゆゝしや」とて片隅に寄り居たり。めのと母君などひがめる心を言ひ合せつゝ「いつしかいかで思ふさまにて見奉らむと年月をたのみ過し、今や思ひかなふとこそ頼み聞えつれ、心苦しきことをも物の始に見るかな」と歎くを見るにもいとほしければ、いとゞぼけられて晝は日一日いをのみ寢くらし夜はすゞよかに起き居て、「ずゞの行くへも知らずなりにけり」とて、手をおし摺りて仰ぎ居たり。弟子どもにあばめられて、月夜に出でゝぎやうだうするものはやりみづに倒れ入りにけり。よしある岩のかたそばに腰もつきそこなひて病み臥したる程になむ少し物まぎれける。』君は難波の方にわたりて御祓へし給ひて、住吉にも、たひらかにていろいろの願はたし申すべきよし御使して申させ給ふ。俄に所せうて自らはこの度え詣で給はず。殊なる御道遙

などなくて急ぎ入り給ひぬ。二條院におはしましつきて都の人も御供の人も夢の心地して行きあひ、喜び泣きもゆゝしきまで立ち騒ぎたり。女君もかひなきものにおぼし捨てつる命嬉しうおぼさるらむかし。いと美しげにねびとゝのほりて御物思ひの程に所せかりし御ぐしの少しへがれたるしもいみじうめでたきを今はかくて見るべきぞかしと御心落ちゐるにつけては、又かの飽かず別れし人の思へりしさま心苦しうおぼしやらる。猶世と共にかゝる方にて御心のいとまぞなきや。その人の事どもなど聞え出で給へり。おぼし出でたる御氣色浅からず見ゆるを、たゞならずや見奉り給ふらむ。わざとならず「身をば思はず」などほのめかし給ふぞをかしうらうたく思ひ聞え給ふ。かつ見るにだに飽かぬ御さまをいかで隔てつる年月ぞとあさましきまでおもほすに、とりかへし世の中もいとうらめしうなむ。程もなくもとの御位あらたまりてかずより外の權大納言になり給ふ。つぎつぎの人もさるべき限はもとのつかさかへし給ふ。世に許さるゝほど、枯れたりし木の春にあへる心地していとめげでたなり。めしありてうちに參り給ふ。御前に侍ひ給ふにねびまさりていかでさる物むつかしき住ひに年經給ひつらむと見奉る。女房などの院の御時より侍ひて老いしらへるどもは悲しくて今更になき騒ぎめで聞ゆ。上もはづかしうさへおぼされて御よそひなど殊に引きつくろひて出でおはします。御心地例ならず日頃經させ給ひければいたう衰へさせ給へるを、昨日今日ぞ少しよろしう思されける。御物語あめやかにありて夜に入りぬ。十五夜の月おもしろう靜なるに昔の事かきくづしおぼし出でられてあはれなれさせ給ふ。物心細く

思さるゝなるべし。「遊などもせず、昔聞きし物の音なども聞かで、久しうなりにけるかな」との給はするに、

「わたつ海にまなえうらぶれひるのこの足たゝざりし年は經にけり」と聞え給へば、いとあはれに心はづかしう思されて、

「宮ばしらめぐりあひける時しあれば別れし春のうらみのこすな」。いとなまめかしき御有樣なり。院の御ために、御八講行はるべき事まづ急がせ給ふ。春宮を見奉り給ふにこよなくおよすげさせ給ひて珍しうおぼし悅び給へるを限なく哀と見奉り給ふ。御ざえもこよなくまさらせ給ひて世を保ち給はむにはゞかりあるまじくかしこう見えさせ給ふ。入道の宮にも御心少しまづめて御對面のほどにも哀なる事どもあらむかし。誠やかの明石にはかへる波につけて御文つかはす。引きかくしてこまやかに書き給ふめり。「波のよるよるいかに、

「歎きつゝあかしの浦に朝ぎりのたつやと人をおもひやるかな」。かのそちのむすめの五節、あいなく人知れぬ物思ひさめぬる心地して、まくなぎつくらせてさし置かせけり。

「須磨のうらに心をよせし船人のやがてくたせるそでを見せばや」。手などこよなくまさりにけりと見おほせ給ひてつかはす。

「かへりてはかごとやせまし寄せたりし名殘に袖のひがたかりしを」。他かずをかしと思しゝ名殘なれば驚かされ給ひていとゞ思し出づれど、この頃はさやうの御ふるまひ更につゝみ給ふめり。花散里などにも唯御せうそこばかりにて覺束なくなかなかうらめしげなりとなむ。

澪標

さやかに見え給ひし夢の後、院の帝の御事を心にかけ聞え給ひて、いかでかの沈み給ふらむ罪救ひ奉ることをせむとおぼし歎きけるを、かくかへり給ひてはその御いそぎし給ふ。神無月には御八講し給ふ。世の人靡き仕うまつること昔のやうなり。おほささき猶御なやみ重くおはしますうちにも遂にこの人をえけたずなりぬること、心やみおぼしけれど、帝は院の御ゆゑごんを思ひ聞え給ふ。物のむくいありぬべくおぼしけるをなほし立て給ひて御心地すゞしくなむ覺しける。時々おこり惱ませ給ひし御目もさはやぎ給ひぬれど、大方世にえ長くあるまじう心細きことゝのみ久しからぬ事を思しつゝ常に召しありて源氏の君は參り給ふ。世のなかの事なども隔なくの給はせなどしつゝ御ほいのやうなれば大方の世の人もあいなく嬉しきことに喜び聞えける。おり居なむの御心づかひ近くなりぬるにもないしのかみの心細げに世を思ひ歎き給へるいとあはれにおぼされけり。「おとゞうせ給ひ大宮もたのもしげなくのみあつい給へるに我が世の殘り少き心地するになむ、いといとほしう名殘なきさまにてとまり給はむとすらむ。昔より人には思ひおとし給へれどみづからのこゝろざしの又なき習ひに唯御事のみなむあはれにおぼえける。立ちまさる人又御ほいありて見給

ふともおろかならぬ志はしも、なずらはざらむと思ふさへこそ心苦しけれ」とてうちなき給ひぬ。女君顔はいと赤くにほひてこぼるばかりのあいぎやうにて涙もこぼれぬるを、萬の罪忘れてあはれにらうたしと御覽ぜらる。「などかみこをだにもたまへるまじき。口惜しうもあるかな。契深き人のためには今見出で給ひてむと思ふも口惜しや。かぎりあればただ人にてぞ見給はむかし」など行く末の事をさへのたまはするにいと恥しうも悲しうもおぼえ給ふ。御かたちなどなまめかしう清らにて限なき御心ざしの年月にそふやうにもてなさせ給ふに、めでたき人なれどさしも思へらざりし氣色心ばへなど物思ひ知られ給ふまゝに、などて我が心の若くいはけなきに任せてさる騷ぎをさへ引き出でゝ、我名をば更にもいはず、人の御ためさへなど思し出づるに、いとうき御身なり。明くる年のきさらぎに春宮の御元服のことあり。十一になり給へど程よりおほきにおとなしう清らにて、唯源氏の大納言の御顔を二つにうつしたらむやうに見え給ふ。いとまばゆきまで光りあひ給へるを世の人めでたきものに聞ゆれど、母宮はいみじうかたはらいたきことにあいなく御心を盡し給ふ。内にもめでたしと見奉り給ひて世のなか讓り聞え給ふべきことなどなづかしう聞え知らせ給ふ。同じ月の廿餘日みくにゆづりのこと俄なればおぼきさきおぼしあわてたり。「かひなきさまながらも心のどかに御覽ぜらるべき事を思ふなり」とぞ聞え慰め給ひける。坊にはおようきやう殿のみこ居給ひぬ。世の中改まりて引きかへ今めかしき事ども多かり。源氏の大納言内大臣になり給ひぬ。數定まりてくつろぐ所もなかりければ加はり給ふなりけり。やがて世の政を

し給ふべきなれどさやうの事繁きそくには堪へずなむとてちじの大臣攝政し給ふべきよし讓り聞え給ふを、「病によりて位も返し奉りてしを、いよいよ老のつもりそひてさかしき事侍らじ」とうけひき申し給はず。ひとの國にも事移り世の定らぬ折は、深き山に跡を絶えたる人だにもをさまれる世にはしろがみをも恥ぢず出で仕へけるをこそまことのひじりには侍けれ。病に沈みて返し給ひける位を世の中かはりて又改め給はむにさらにとがあるまじうおぼやけ私定めらる。さるたしめもありければすまひはて給はで太政大臣になり給ふ。御年も六十三にぞなり給ふ。世の中すさまじきによりかつは籠り居給ひしを、とりかへし花やぎ給へば御子どもなど沈むやうに物し給へるを皆うかび給ふ。とりわきて宰相中將權中納言になり給ふ。かの四の君の御腹の姫君十二になり給ふを、うちに參らせむとかしづき給ふ。かのたかさご謠ひし君もかうぶりせさせていとおもふさまなり。腹々に御子どもいとあまたつぎつぎに生ひ出でつゝ賑はゝしげなるを、源氏のおとゞは羨み給ふ。大殿腹の若君は人より殊に美くしうて内春宮の殿上し給ふ。故姫君の亡せ給ひしなげきを宮おとゞまた更にあらためておぼし歎く。されどおはせぬ名殘も唯このおとゞの御光によろづもてなされ給ひて年比おぼし沈みつる名殘なきまで榮え給ふ。猶昔に御心ばへかはらず折ふしごとに渡り給ひなどしつゝ若君の御めのとだちさらぬ人々も年比の程罷り出で散らざりけるは、皆さるべき事にふれつゝよすがつけむ事をおぼし置きつるにさいはひ人多くなりぬべし。』二條院にも同じごとまち聞えける人をあはれなるものにおぼして年比の胸あくばかりと思

せば、中將中務やうの人々にはほどほどにつけつゝ情を見え給ふに、御いとまなくて外ありきもまゝ給はず、二條院の東なる宮、院の御そうぶんなりしを二なくあらため作らせ給ふ。花散里などやうの心苦しき人々住ませむなどおぼしあてゝつくろはせ給ふ。まことやかの明石に心苦しげなりしことはいかにとおぼし忘るゝ時なけれど、おほやけわたくしいそがしきまぎれにえおぼすまゝにもとぶらひ給はざりけり。やよひついたちのほど、この比やとおぼしやるに人知れずあはれにて御使あり。とく歸り參りて「十六日になむ女にてたひらかにものし給ふ」と告げ聞ゆ。珍しきさまにてさへあなるをおぼすにおろかならず。などて京に迎へてかゝる事をもせさせざりけむと口惜しうおぼさる。すくえうにみこ三人、みかど、きさき必ず並びて生れ給べし、中のおとりは太政大臣にて位を極むべしと考へ申したりし。中のおとりばらに女は出でき給ふべしとありし事、さしてかなふなめり。大方かみなき位にのぼり世をまつりごち給ふべき事、さばかり賢かりしあまたの相人どもの聞え集めたるは、年比は世のわづらはしさに皆おぼし消ちつるを、當代のかく位にかなひ給ひぬる事を思ひのごと嬉しとおぼす。自らはもてはなれ給へるすぢは更にあるまじきことゝおぼす。あまたのみこ達のなかにすぐれてらうたきものにおぼしたりしかど、たゞ人におぼしおきてける御心を思ふにすくせとほかりけり。うちのかくておはしますをあらはに人の知ることならねど、相人のと空しからずと心のうちに覺しけり。今行く末のあらましごとをおぼすに、住吉の神のまるべ、まことにかの人も世になべてならぬ宿世にてひがひがしき親も及びなき心を

つかふにやありけむ。さるにてはかしこきすぢにもなるべき人のあやしき世界に生れたらむはいとほしう忝なくもあるべきかな。この程すぐして迎へてむとおぼして、ひんがしの院急ぎ造らすべきよし催し仰せ給ふ。さる所にはかばかしき人もありがたからむをおぼして、故院に侍ひし宣旨のむすめ、宮内卿の宰相にてなくなりにし人の子なりしを、母などもうせてかすかなる世に經けるがはかなきさまにて子産みたりと聞しめしつけたるを、知るたよりありて事のついでにまねび聞えける人召してさるべきさまにのたまひ契る。まだ若くて何心もなき人にて明暮れ人まれぬあばらやに眺むる心ぼそさなれば深うも思ひたどらず、この御あたりのことをひとへにめでたう思ひきこえて參るべきよし申させたり。いとあはれにかつはおぼしていだしたて給ふ。物のついでにいみじう忍びまぎれておはしまいたり。さは聞えながらいかにせましと思ひ亂れけるを、いとかたじけなきによろづ思ひ慰めて「たゞのたまはせむまゝに」と聞ゆ。よろしき日なりければ急がし立て給ひて「あやしう思ひやりなきやうなれど、思ふさまことなる事にてなむ、自らも覺えぬ住ひにむすぼゝれたりしためしを思ひよそへて暫しは念じ給へ」など事の有樣委しう語らひ給ふ。上の宮仕時々せしかば見給ふ折もありしをいたう衰へにけり。家のさまもいひまらずあれ惑ひてさすがに大なる所の木立などうとましげにいかですぐしつらむと見ゆ。人ざま若やかにをかしければ御覽じ放たれず。とかく戯ぶれのたまひて「取りかへしつべき心地こそすれ。いかに」とのたまふにつけても、げに同じうは御身近くも仕うまつりなればうき身も慰みなましと見奉る。

「かねてよりへだてぬ中とならはねど別は惜しきものにぞありける。慕ひやせまし」とのまたへば、うはぢらひて、

「うちつけの別を惜しむかごとにて思はぬかたに慕ひやはせぬ」。馴れて聞ゆるをいたしとおぼす。車にてぞ京のほどは行き離れける。いと親しき人さしそへて、ゆめもらすまじく口がため給ひてつかはす。御はかし、さるべきものなど、所せきまでおぼしやらぬくまなし。めのとにもありがたうこまやかなる御いたはりの程浅からず。入道思ひかしづき思ふらむ有様思ひやるもほゝゑまれ給ふこと多く、又あはれに心苦しくも、唯このことの御心にかゝるも浅からぬにこそは。御文にも「おろかにもてなし給ふまじ」と返すがへすいましめ給へり。

「いつしかも袖うちかけむをとめ子が世をへてなでむ岩のおいさき」。津の國までは船にてそれよりあなたは馬にて急ぎつきぬ。入道待ちとり喜びかしこまり聞ゆる事かぎりなし。そなたに向きて拜み聞えてありがたき御心ばへを思ふにいよいよいたはしう恐しきまで思ふ。ちごのいとゆゝしきまでうつくしうおはする事たぐひなし。げにかしこき御心にかしづき聞えむとおぼしたるはうべなりけりと見奉るにあやしき道に出で立ちて夢の心地しつる歎もさめにけり。いとうつくしらうたくおぼえてあつかひ聞ゆ。こもちの君も月比物をのみ思ひ沈みていとどよわれる心地に生きたらむともおぼえざりつるを、この御心おきての少し物思ひ慰めらるゝにぞかしらもたげて御使にもになきさまの志をつくす。とく参りな

むと急ぎ苦しがれば思ふ事ども少し聞え續けて、

「ひとりしてなづるは袖の程なきにおほふばかりのかげをしぞまつ」と聞えたり。あやしきまで御心にかゝりゆかしうおぼさる。女君には殊にあらはして をさをさ聞え給はぬを聞き合せ給ふ事もこそとおぼして、「さこそあなれ。あやしうねぢけたるわざなりや。さもおはせなむと思ふあたりにぼ心もとなくて 思ひの外に口惜しくなむ。女にてさへあなればいとこそものしけれ。尋ね知らでもありぬべきことなれど、さはえ思ひすつまじきわざなりけり。よびにやりて見せ奉らむ。憎み給ふなよ」と聞え給へばおもてうち赤みて「あやしう常にかやうなるすぢのたまひつくる心の程こそ我ながらうとましけれ。ものにくみはいつ習ふべきにか」と怨じ給へば、いとよくうちゑみて、「そよ、誰がならはしにかあらむ。思はずにぞ見え給ふや。人の心よりほかなる思ひやりごとして物怨じなどし給ふよ。思へば悲し」とてはてはては涙ぐみ給ふ。年比飽かず戀しと思ひ聞え給ひし御心の中ども 折々の御文の通ひなどおぼし出づるにはよろづの事すさびにこそあれと、思ひけたれ給ふ。「この人をかうまで思ひやりことゝとふは猶思ひやうの侍るぞ。まだきに聞えばまたひが心得給ふべければ」とのたまふ。「さして人がらのをかしかりしも所からにや、珍しうおぼえきかし」など語り聞え給ふ。あはれなりし夕の煙、いひしことなどまほならねど、その夜のかたちほの見し琴の音のなまめきたりしもすべて心とまれるさまにのたまひ出づるにも、われは又なくこそ悲しと思ひ歎きしか、すさびにても心を別け給ひけむよと、たゞならず思ひ續けられてわれは

われとうちそむきながめて、「あはれなりし世のありさまかな」とひとりごとのやうにうちなげきて、

「思ふどち靡くかたにはあらずともわれぞけぶりにさきだちなまし」。「何とかやこゝろうや。

誰により世をうみ山に行きめぐり絶えぬ涙にうきしづむ身ぞ。いでやいかでか見え奉らむ。命こそかなひ難かべい物なめれ。はかなきことにて人に心おかれじと思ふも、唯ひとつ故ぞや」とて、箏の御琴引き寄せてかき合せすさび給ひて、そゝのかし聞え給へど、かのすぐれたりけむもねたきにや、手も觸れたまはず、いとおほどかに美しうたをやぎ給へるものから、さすがにしうねき所つきて物怨じしたまへるがなかなかあいぎやうづきて腹だちなし給ふををかしう見所ありとおぼす。五月五日にぞいかには當るらむと人知れず數へ給ひて、ゆかしうあはれにおぼしやる。何事もいかにかひあるさまにもてなし嬉しからまし、口惜しのわざや、さる所にしも心苦しきさまにて出で來たるよとおぼす。男君ならましかばかうしも御心にかけ給ふまじきを、かたじけなういとほしう我が御宿世もこの御事につけてぞかたほなりけるとおぼさるゝ。御使出し立てらる。「必ずその日違へず罷りつけ」とのたまへば、五日にいさつきぬ。おぼしやることもありがたうめでたきさまにてまめまめしき御とぶらひもあり。

「うみ松や時ぞともなきかげに居て何のあやめもいかにわくらむ。心のあくがるゝまでなむ。猶かくては得過ぐすまじきを思ひ立ち給ひね。さりとも後めたきことはよも」と書い給へり。入道例の喜びなきして居たり。かゝるをりは生けるかひも作り出でたることわりなりと見ゆ。こゝにもよろづ所せきまで思ひ設けたりければ、この御使なくば闇の夜にてこそ暮れぬべかりけれ。めのともこの女君のあはれに思ふやうなるをかたらひ人にて世のなぐさめにしけり。をさをさ劣らぬ人もるゐにふれてむかへ取りてあらすれど、こよなく衰へたる宮仕人などのいはほのなか尋ぬるが落ちとまれるなどこそあれ。これはこよなうこめき思ひあがれり。聞き所ある世の物語などして、おとゞの君の御有樣世にかしづかれ給へる御おぼえの程も女心地に任せて限なく語り盡せば、げにかくおぼしいづばかりの名殘とゞめたる身もいとたけくやうやう思ひなりけり。御文諸共に見て心のうちに、あはれかうこそ思の外にめでたき宿世はありけれ、うきものは我が身にこそ　りけれと思ひつゞけ、れど、「めのとの事はいかに」などこまやかにとぶらはせ給へるもかたじけなく何事も慰めけり。御返しには、

「かずならぬみしまがくれに鳴くたづをけふもいかにと訪ふ人ぞなき。よろづに思ひ給へむすぼゝるゝありさまをかくたまさかの御なぐさめにかけ侍る。命のほどもはかなくなむ。げに後やすく思ひ給へ置くわざもがな」とまめやかに聞えたり。うちかへし見給ひつゝあはれと長やかにひとりごち給ふを、女君しりめに見おこせて、「浦よりをちにこぐ船の」と忍びやかにひとりごちながめ給ふを、「誠にかくまでとりなしたまふよ。こはたゞかばかり

のあはれぞや。所のさまなどうち思ひやる時々きしかたのこと忘れ難きひとりごとを、ようこそ聞きすぐい給はぬ」など恨み聞え給ひて、うはつゝみばかりを見せ奉らせ給ふ。手などのいとゆゑづきてやんごとなき人苦しげなるを、かゝればなめりとおぼす。かくこの御心とり給ふ程に花散里をかれはて給ひぬるこそいとほしけれ。おほやけごとどもきげく所せき御身に、おぼし憚るにそへても、珍しく御目驚くことのなき程思ひしづめ給ふなりけり。五月雨のつれづれなるころ、おほやけわたくし物忌づかなるにおぼし起して渡り給へり。よそながらも明暮につけてよろづにおぼしやりとぶらひ給ふをたのみにてすぐい給ふ所なれば、今めかしう心にくきさまにそばみ恨み聞え給ふべきならねば心やすげなり。年比にいよいよ荒れまさりすごげにておはす。女御の君に御物語聞え結ひて西の妻戸に夜ふかして立ち寄り給へり。月おぼろにさし入りていとゞえんなる御ふるまひ盡きもせず見え給ふ。いとゞつゝましけれどはし近う眺め給うけるさまながらのどやかにて物し給ふけはひいとめやすし。水鶏のいと近う鳴きたるを、

「くひなだに驚かさずはいかにして荒れたるやどに月をいれまし」。いとなつかしう言ひけち給へるぞとりどりに捨てがたき世かな、かゝることそなかなか身も苦しけれとおぼす。

「おしなべてたゝくくひなに驚かばうはの空なるつきもこそいれ。後めたう」とは猶ことに聞え給へど、あだあだしきすぢなど疑はしき御心ばへにはあらず。年比まち過ぐし聞え給へるも更におろかにはおぼえざりけり。空ながめ給ひそとたのめ聞え給ひしをりのこと

どものたまひ出でゝ、「などてたぐひあらじといみじう物を思ひ沈みけむ。うきみからは同じなげかしさにこそ」との給へるもおいらかにらうたげなり。例のいづこの御言の葉にかあらむ、盡させずぞ語らひ慰め聞え給ふ。かやうの序にもかの五節をおぼし忘れず、又見てしがなと心にかけ給へれど、いとかたき事にてえまぎれ給はず。女は物思ひ絶えぬを親はよろづに思ひいふこともあれど、世に經むことを思ひ絶えたり。心やすき殿づくりしてはかやうの人つどへても思ふさまにかしづき給ふべき人もいでものし給はゞさる人の後見にもとおぼす。かの院のつくりざまなかなか見所多く今めいたり。よしあるずりやうなどをえりてあてに催し給ふ。ないしのかんの君を猶え思ひ放ち聞え給はず。こりずまに立ちかへる御心ばへもあれど、女はうきにこり給ひて昔のやうにもあひまらへ聞え給はず。なかなか所せうさうざうしう世の中をおぼさる。院はのどやかにおぼしなりて、時々につけてをかしき御遊など好ましげにおはします。女御更衣皆例のごと侍ひ給へど、春宮の御母女御のみぞとり立てゝ時めき給ふこともなく、かんの君の御おぼえにおしけたれ給へりしを、かくひきたがへめでたき御さいはひにて離れ出でゝ宮にそひ奉り給へる。このおとゞの御とのゐどころは昔のしげいさなり。梨壺に春宮はおはしませば、ちかどなりの御心よせに何事をも聞え通ひて宮をもうしろみ奉り給ふ。入道さきさいの宮御位を又改め給ふべきならねば太上天皇になずらへてみふ賜はり、ゐんじともなりて、さまことにいつくしう、御行ひくどくのことを常の御いとなみにておはします。年比世にはゞかりていでいりもかたく見奉り給はぬをい

ぶせくおぼしけるにおぼすさまに參りまかで給ふも いとめでたければ、大后はうきものは世なりけりとおぼしなげく。おとゞは事に觸れていと耻かしげに仕うまつり心よせきこえ給ふも、なかなかいとほしげなるを、人も安からずきこえけり。兵部卿のみこ年比の御心ばへのつらくおもはずにて唯世の聞えをのみおぼし憚り給ひし事を、おとゞはうきものにおぼしおきて、昔のやうにもむつび聞え給はず。なべての世には普くめでたき御心なれど、この御あたりはなかなかなさけなきふしもうちまぜ給ふを、入道の宮はいとほしう ほいなき事に見奉り給ふ。世の中の事唯なかばを別けておほきおとゞこのおとゞの御まゝなり。權中納言の御むすめその年の八月にまゐらせ給ふ。おほぢおとゞゐたちて儀式などいとあらまほし。兵部卿の宮の中の君もさやうに心ざしてかしづき給ふ名高きを、大臣は人よりまさり給へとしもおぼさずなむありける。いかゞし給はむとすらむ。』その秋住吉に詣で給ふ。願ども果し給ふべければいかめしき御ありきにて世の中ゆすりて上達部殿上人われもわれもと仕う奉り給ふ。折しもかの明石の人年ごとの例の事にて仕うまつるを、こぞことしさはることとありて怠りけるかしこまりとり重ねて思ひ立ちけり。船にてまうでたり。岸にさし着くるほど、見ればのゝしりて詣で給ふ人のけはひなぎさに満ちていつくしきかんだからをもて續けたり。かく人とをづらさうぞくをとゝのへかたちを選びたり。「たがまうで給へるぞ」と問ふめれば「内大臣どのゝ御願はたしにまうで給ふを知らぬ人もありけり」とてはかなき程のげすだに心地よげにうち笑ふ。げにあさましう月日もこそあれ、なかなかこの有樣を遥に見奉るに身の程口惜しうおぼゆ。さすがにかけ離れ奉らぬ宿世ながら、かくくちをしきさはのものだに物思ひなげにて仕うまつるを色ふしに思ひたるに、何の罪深き身にて心にかけておぼつかなう思ひ聞えつゝかゝりける御ひゞきをも知らで立ち出でつらむなど思ひ續くるに、いと悲しうて人知れずしほたれけり。松原の深緑なる中に花紅葉をこき散らしたると見ゆるうへのきぬの濃き薄き數知らず、六位の中にも藏人は青色しるく見えて、かの賀茂の瑞垣怨みし右近のさまようもゆげひになりてことごとしげなる隨身どもしたる藏人なり。良清も同じすけにて人よりことに物思ひなき氣色にて おどろおどろしきあかぎぬすがたいと清げなり。すべて見し人々ひきかへ花やかに何事思ふらむと見えてうちちりたるに、若やかなる上達部殿上人のわれもわれもと思ひ挑み馬鞍などまでかざりをとゝのへみがき給へるは、いみじきものに田舍人も思へり。御車を遥に見やればなかなか心やましくてこひしき御かげをもえ見奉らず。河原のおとゞの御れいをまねびてわらは隨身をたまはり給ひける。いとをかしげにさうぞきみづらゆひて紫すそごのもとゆひなまめかしうたけすがたとゝのひつくしげにて十人さまことに今めかしう見ゆ。大殿腹の若君限なくかしづきたてゝ馬ぞひわらはのほど皆作りあはせてやうかへてさうぞきわけたり。雲井遥にめでたく見ゆるにつけても若君の數ならぬさまにて物し給ふをいみじと思ふ。いよいよみやしろのかたを拜み聞ゆ。國の守參りて御まうけ例の大臣などの參り給ふよりは殊に世になく仕うまつれりけむかし。いとはしたなければ立ちまじり數ならぬ身の聊のことせむに神も見入

れかずまへ給ふべきにもあらず。歸らむにもなかぞらなり。けふは難波に船さしとめてはらへをだにせむとて漕ぎ渡りぬ。君は夢にも知り給はず、夜一夜いろいろの事をせさせ給ふ。誠に神の喜び給ふべき事をきつくして、きしかたの御ぐわんにもうちそへありがたきまで遊びの〻しりあかし給ふ。惟光やうの人は心のうちに神の御德を哀にめでたしと思ふ。あからさまに立ち出で給へるに侍ひて聞え出でたり。

「すみよしのまつこそものは悲しけれ神代のことをかけて思へば」。げにとおぼし出で〻ふもいとめでたし。かの明石の船、この響におされて過ぎぬる事も聞ゆれば知らざりけるよと哀れにおぼす。神の御きるべおぼし出づるも愚ならねば聊なる御消そこをだにして心慰めばや、なかなかに思ふらむかしとおぼす。みやしろたち給ひてところどころに逍遙をつくし給ふ。難波の御はらへなど殊になゝ瀬によそほしう仕うまつる。堀江のわたりを御覽じて「今はた同じ難波なる」と御心にもあらでうちずじ給へるを、御車のもと近き惟光うけたまはりやしつらむ、さる召しもやとれいにならひて懷に設けたるつか短き筆など御車とゞむる所にて奉れり。をかしとおぼしてたゝうがみに

「みをつくし戀ふるきるしにこゝまでもめぐり逢ひけるえにはふかしな」とて賜へれば、かしこの心きれるしもびとしてやりけり。駒なべてうち過ぎ給ふにも心のみ動くに、露ばかりなれどいとあはれにかたじけなくおぼえてうちなきぬ。

「數ならで難波のこともかひなきになどみをつくし思ひそめけむ」。たみの〻島にみそぎ仕うまつる御はらへのものにつけて奉る。日暮がたになりゆく。夕汐滿ち來て入江のたづもをしまぬほどのあはれなるをりからなればにや、人めもつゝまずあひ見まほしくさへおぼさる。

「つゆけさのむかしに似たる旅衣たみの〻島のなにはかくれず」。道のまゝにかひある逍遙遊びの〻きり給へど御心には なほかゝりておぼしやる。あそびどもの集ひ參れるも上達部と聞ゆれど若やかに事好ましげなるは皆目とゞめ給ふべかめり。されどいでやをかしき事も物のあはれも人がらこそあべけれ。なのめなる事をだに少しあはきかたによりぬるは心とゞむるたよりもなきものをとおぼすに、おのが心をやりてよしめきあへるも疎ましうおぼしけり。かの人は過ぐし聞えて又の日ぞよろしかりければみてぐら奉る。ほどにつけたる願どもなどかつがつはたしける。又なかなか物思ひそはりてあけくれくちをしき身を思ひ歎く。今や京におはしつくらむと思ふ日數も經ず御使あり。このごろの程に迎へむことをぞのたまへる。いとたのもしげにかずまへのたまふめれど、いざや又島漕ぎ離れ中ぞらに心細きことやあらむと思ひわづらふ。入道もさて出し放たむはいと後めたう、さりとてかくうづもれて過ぐさむを思はむもなかなかきしかたの年比よりも心づくしなり。よろづにつゝましう思ひ立ち難きことを聞ゆ。』まことやかの齋宮もがはり給ひにしかばみやす所のぼり給ひてのちかはらぬさまに何事もとぶらひ聞え給ふことはありがたきまでなさけ盡し給へ

ど、昔だにつれなかりし御心ばへのなかなからむ名殘は見じと思ひ放ち給へれば、渡り給ひなどする事は殊になし。あながちにうごかし聞え給ひても我が心ながら知り難くとかくかゝづらはむ御ありきなども所せうおぼしなりにたれば強ひたるさまにもおはせず。齋宮をぞいかにねびなり給ひぬらむとゆかしう思ひきこえ給ふ。なほかの六條のふるみやをいとよくすりしつくろひたりければみやびかにて住み給うけり。よしづき給へることふりがたくてよき女房など多くすいたる人のつどひ所にて物寂しきやうなれど、心やれるさまにて經給ふ程に、俄におもく煩ひ給ひて物のいと心細くおぼされければ、罪深きところに年經つるもいみじうおぼして尼になり給ひぬ。おとゞ聞き給ひて、かけがけしきすぢにはあらぬど猶さるかたの物をも聞え合せ人に思ひ聞えつるを、かくおぼしなりにけるがくちをしうおぼえ給へば、驚きながら渡り給へり。他かずあはれなる御とぶらひ聞え給ふ。近き御枕上におましよそひて脇息におしかゝりて御返りなど聞え給ふ。いたうよわり給へるけはひなれば絶えぬ心ざしの程はえ見え奉らでやとくち惜しうていみじう泣い給ふ。かくまでおぼしとゞめたりけるを女もよろづにあはれにおぼえて齋宮の御事をぞ聞え給ふ。「心細くてとまり給はむを必ず事に觸れてかずまへ聞え給へ。またみゆづる人もなくたぐひなき御有樣になむ。かひなき身ながらも今暫し世の中を思ひのどむる程はとざまかうざまに物をおぼし知るまで見奉らむとこそ思ひ給へつれ」とても消え入りつゝ泣き給ふ。「かゝる御事なくてだに思ひ放ち聞えさすべきにもあらぬを、まして心の及ばむに從ひては何事もうしろみ

聞えむとなむ思ひ給ふる。更に後めたくな思ひ聞え給ひそ」など聞え給へば、「いと難きと誠にうち頼むべき親などにてみゆづる人だに女おやに離れぬるはいとあはれなることにこそ侍るめれ。まして思ほし人めかさむにつけてもあぢきなきかたやうちまじり人に心も置かれ給はむ。うたてある思ひやりごとなれどかけてさやうの世づいたるすぢにおぼしよるな。うき身をつみ侍るにも女は思のほかにて物思ひをそふるものになむ侍りければいかでさるかたをもてはなれて見奉らむと思ひ給ふる」など聞え給へば、あいなくものたまふかなとおぼせど、「年比よろづ思ひ給へ寄りにたるものを、昔のすき心の名殘あり顔にのたまひなすもほいなくなむ。よし　ら」とてとは暗うなり内は大となぶらほのかに物より通りて見ゆるを、もしもやとおぼえてやをら御几帳のほころびより見給へば、心もとなき程の火影に、御ぐしいとをかしげに花やかにそぎて寄り居給へる、繪に書きたらむさましていみじうあはれなり。ちやうの東おもてにそひ臥し給へるぞ宮ならむかし。御几帳のまどけなく引きやられたるより御目とゞめて見通し給へればつらづゑつきていと物悲しとおぼいたるさまなり。はつかなれどいと美しげならむと見ゆ。御ぐしのかゝりたる程かしらつきけはひあてにけだかきものからひぢゝかにあいぎやうづき給へるけはひまゐるく見え給へば、心もとなくゆかしきにもさばかりのたまふものをとおぼしかへす。「いと苦しさまさり侍る。かたじけなきを、はや渡らせ給ひね」とて人にかきふせられ給ふ。「近く參りたるまゐるしによろしうおぼされば嬉しかるべきを、心苦しきわざかな。いかにおぼさるゝぞ」とて覗き給ふけし

きなれば、「いと恐しげに侍るや。みだり心地のいとかく限なる折しも渡らせ給へるはまことに淺からずなむ。思ひ侍るとを少しも聞えさせつればさりとも とたのもしくなむ」など聞えさせ給ふ。「かゝる御ゆゑごんのつらにおぼしけるもいとゞあはれになむ。故院のみこ遂あまたものし給へど親しくむつびおぼすもをさをさなきを、うへの同じみこ達のうちにかずまへ聞え給ひしかばさこそは頼み聞え侍らめ。少しおとなしき程になりぬる齡ながらあつかふ人もなければさうざうしきを」など聞えて歸り給ひぬ。御とぶらひ今少したちまさりてゐばゐば聞え給ふ。七八日ありてうせ給ひにけり。あへなうおぼさるゝに世もいとはかなくて物心ぼそう思されてうちへも參り給はず。とかくの御事などおきてさせ給ふ又たのもしき人もことにおはせざりけり。ふるき齋宮のみやづかさなど仕うまつり馴れたるぞ僅に事ども定めける。御みづからも渡り給へり。宮に御せうそこ聞え給ふ。「何事もおぼえ侍らでなむ」と女別當して聞え給へり。「聞えさせのたまひ置きしとども侍りしを、今は隔なきさまにおぼされば嬉しくなむ」と聞え給ひて、人々めし出でゝあるべき事ども仰せ給ふ。いとたのもしげに年比の御心ばへとりかへしつべう見ゆ。いといかめしう殿の人々數もなう仕うまつらせ給へり。あはれにうちながめつゝ御さうじにてみすおろし込めて行はせ給ふ。宮には常にとぶらひ聞え給ふ。やうやう御心ゐづまり給ひてはみづからも御返りなど聞え給ふ。つゝましうおぼしたれど御めのとなどかたじけなしとそゝのかし聞ゆるなりけり。雪みぞれかき亂れ荒るゝ日にいかに宮の御ありさまかすかに眺め給ふらむと思ひやり聞え給ひて、御使奉れ給へり。「只今の空をいかに御覽ずらむ。

降りみだれひまなき空になき人のあまがけるらむ宿ぞかなしき」。空色の紙のくもらはしきに書い給へり。わかき人の御目にとゞまるばかりと心してつくろひ給へる、いと目もあやなり。宮はいと聞えにくゝゐ給へどこれかれ人づてにてびんなきことゝ責め聞ゆれば、にびいろの紙のいとかうばしうえんなるに墨つぎなどまぎらはして、

「消えがてにふるぞ悲しきかきくらし我が身それともおもほえぬよに」。つゝましげなる書きざまにて、いとおほどかに御手すぐれてはあらねどらうたけにあてはかなる筋に見ゆ。くだり給ひし程よりなほあかずおぼしたりしを、今は心にかけてともかくも聞えよりぬべきぞかしとおぼすには例のひきかへしいとほしくこそ。故みやす所のいと後めたげに心おき給ひしを、ことわりなれど世の中の人もさやうに思ひよりぬべき事なるを、ひきたがへ心清くてあつかひ聞えむ、うへの今少し物おぼし知る齡にならせ給ひなばうちずみせさせ奉りてさうざうしきにかしづきぐさにこそとおぼしなる。いとまめやかにねんごろに聞え給ひてさるべき折々は渡りなどし給ふ。「かたじけなくとも昔の御名殘におぼしなずらへてけどほからずもてなさせ給はゞなむ本意なる心地すべき」など聞え給へどわりなく物はぢをし給ふ。おくまりたる人ざまにてほのかにも御聲など聞かせ奉らむはいと世になくめづらかなることゝおぼしたれば、人々も聞えわづらひてかゝる御心ざまを憂ひ聞えあへり。女別當内侍などいふ人々、あるは離れ奉らぬわかんどほりなどにて心ばせある人々多かるべし。

この人知れず思ふ方のまじらひをせさせ奉らむに、人に劣り給ふまじかめり。いかでさやかに御かたちを見てしがなと おぼすもうちとくべき御親心にはあらずやありけむ。我が御心も定め難ければかく思ふといふことも人にも漏し給はず。御わざなどの御事もとりわきてせさせ給へばありがたき御心を宮人も喜びあへり。はかなく過ぐる月日にそへていとゞさびしく心ぼそき事のみまさるに、侍ふ人々もやうやうあがれゆきなどしてしもつ方の京極わたりなれば人げ遠く山寺の入相の聲々にそへてもねなきがちにてぞ過ぐし給ふ。同じき御親と聞えし中にも片時のまも立ち離れ奉り給はでならはし奉り給ひて、齋宮にも親そひてくだり給ふことは例なきことなるを、あながちに誘ひ聞え給ひしみこゝろに、限ある道にてはたぐひ聞え給はずなりにしをひるまなう おぼし歎きたり。侍ふ人々につけて心かけ聞え給ふ人たかきいやしきもあまたあり。されどおとゞの御めのとたちに「心に任せたることと引き出し仕うまつるな」など親がり申し給へば、いと耻しき御ありさまにびんなき事聞しめしつけられじと言ひ思ひつゝはかなきことのなさけも更に作らず。院にもかのくだり給ひし日大極殿のいつくしかりし儀式にゆゝしきまで見え給ひし御かたちを忘れ難う おぼし置きければ、參り給ひて、「齋院など御はらからの宮々おはしますたぐひにてさぶらひ給へ」と御息所にも聞え給ひにき。されどやんごとなき人々侍ひ給ふにかずかずなる御うしろみもなくてやと覺しつゝみ、うへはいとあつしう おはしますも恐しう、又物思ひやくはへむと憚りて過ぐし給ひしを、今はまして誰かは仕うまつらむと人々思ひたるをねんごろに院には

おぼしのたまはせけり。おとゞ聞き給ひて院よりみけしきあらむをひきたがへよこどり給はむをかたじけなき事とおぼすに、人の御有樣のいとらうたげに見放たむはまた口惜しう て入道の宮にぞ聞え給ひける。「かうかうのことをなむ思う給へわづらふに母みやす所いと おもおもしく心深きさまに物し侍りしを、あぢさなきすき心にまかせてさるまじき名をも流しうきものに思ひ置かれ侍りにしをなむ世にいとほしう思ひ　ふる。この世にてその恨の心とけず過ぎ侍りにしを、今はとなりてのきはにこの齋宮の御事をなむ物せられしかば、さも聞き置き心にも殘すまじうこそはさすがに見置き給ひけめと思ひ給ふるにも忍びがたう、大方の世につけてだに心苦しきことは見聞き過ぐされぬわざに侍るをいかでなさかげにてもかのうらみ忘るばかりと思ひ給ふるを、内にもさこそおとなびさせ給ひたれどいときなき御齡におはしますを少し物の心知れる人は侍はれてもよくやと思ひ給ふるを御定になむ」と聞え給へば、「いとようおぼしよりけるを院にも おぼさむことはげにかたじけなういとほしかるべけれど、かの御ゆゑごんをかこちて知らず顔に參らせ給へかし。今はたさやうの事わざどもおぼしとゞめず御行ひがちになり給ひてから聞え給ふを深うしも おぼし咎めじと思ひ給ふる」、「さらば御氣色ありてかずまへさせ給はゞ催しばかりのことをそふるになし侍らむ。とざまかうざまに思ひ給へ殘す事なきにかくまでさばかりの心がまへもまねび侍るに世の人やいかにとこそ憚り侍れ」など聞え給ひて、後にはげに知らぬやうにてこゝに渡し奉りてむとおぼす。女君にも「さかなむ思ふ。語らひ聞えてすぐい給はむにい

とよき程なるあはひならむ」と聞え知らせ給へば、嬉しき事におぼして御わたりのゝを急ぎ給ふ。入道の宮には兵部卿の宮の姫君をいつしかとかしづきさわぎ給ふめるをおとゞのひまある中にていかゞもてなし給はむと心苦しくおぼす。權中納言の御むすめは弘徽殿の女御と聞ゆ。おほい殿の御子にていとよそほしうもてかしづき給ふ。上もよき御遊びがたきにおぼいたり。宮の中の君も同じ程におはすれば、うたてひゝな遊の心ちすべきを、おとなしき御うしろみはいと嬉しかるべき事とおぼしのたまひてさる御氣色聞え給ひつゝ、おとゞのよろづにおぼし至らぬことなくおほやけがたの御うしろみは更にもいはず明暮につけてこまかなる御心ばへのいとあはれに見えたまふを、たのもしきものに思ひ聞え給ひて、いとあつしくのみおはしませば參りなどし給ひても心やすく侍ひ給ふことも かたきを、少しおとなびてそひさぶらはむ御うしろみはかならずあるべきことなりけり。

蓬生

もしほたれつゝ侘び給ひし頃ほひ都にもさまざまおぼし歎く人多かりしを、さても我が身のより所あるは一方の思こそ苦しげなりしか。二條の上などものどやかにて旅の御すみかをもおぼつかなからず聞え通ひ給ひつゝ位を去り給へるかりの御よそひをも竹の子の世のうきふしを時々につけてあつかひ聞え給ふに慰め給ひけむ。なかなかその數とも人にも知

られず立ち別れ給ひし程の御有樣をもよその事に思ひやり給ふ人々のまたの心碎き給ふたぐひ多かり。常陸の宮の君は父みこのうせ給ひにし名殘に又思ひあつかふ人もなき御身にていみじう心ぼそげなりしを、思ひかけぬ御事の出で來てとぶらひ聞え給ふ事絶えざりしを、いかめしき御勢にこそことにもあらずはかなき程の御情ばかりと思したりしかど、まちうけ給ふ御袂のせばきには大空の星の光を盥の水に寫したる心地してすぐし給ひし程に、かゝる世の騷ぎ出で來てなべての世憂くおぼし亂れしまぎれに、わざと深からぬかたの志はうち忘れたるやうにて遠くおはしましにし後、ふりはへてしもえ尋ね聞え給はず。その名殘に暫しはなくなくもすぐし給ひしを、年月ふるまゝに哀に淋しき御有樣なり。ふるき女ばらなどは「いでやいと口惜しき御宿世なりけり。おぼえず神佛の顯れ給へらむやうなりし御心ばへに、かゝるよすがも人はいでおはするものなりけり」とありがたう見奉りしを大方の世の事とはいひながら又頼むかたなき御有樣こそかなしけれ」とつぶやきなげく。さる方にありつきたりしあなたの年ごろはいふかひなき淋しさにめなれてすぐし給ひしを、なかなか少し世づきてならひにける年月にいと堪へがたく思ひ歎くべし。少しもさてありぬべき人々はおのづから參りつきてありしを皆つぎつぎに隨ひていき散りぬ。女ばらのいのち堪へぬもありて月日に隨ひてかみしもの人數少くなりゆく。もとより荒れたりし宮の中いとゞ狐のすみかになりて疎ましうけどほきこだちにふくろうの聲をあさゆふに耳ならしつゝ人げにこそ、さやうの物もせかれて影隱しけれ。こだまなどけしからぬものども所を得てや

うやうかたちを顯し物侘しきことのみ數知らぬにまれまれ殘りて侍ふ人は「猶いとわりなし。この頃ずりやうどもの おもしろき家づくり好むがこの宮のこだちを心につけて放ち給はせてむやとほとりにつきてあないし申するをさやうにせさせ給ひていとかう物恐しからぬ御住ひにおぼしうつろはなむ、立ちとまり侍ふ人もいと堪へ難し」など聞ゆれど、「あないみじや、人の聞き思はむこともあり、生ける世にしか名殘なきわざはいかゞせむ。かく恐しげに荒れはてぬれど親の御影とまりたる心地するふるきすみかと思ふに慰みてこそあれ」とうち泣きつゝおほしもかけず、御調度どもゝいと古代になれたるが昔やうにてうるはしきをなまものゝ故知らむと思へる人、さるものえうじてわざとその人かの人にせさせ給へると尋ね聞きてあないするもおのづからかゝる貧しきあたりと思ひあなづりて言ひくるを、例の女ばら「いかゞはせむ、そこそは世の常の事」とて取りまぎらはしつゝ目に近きけふあすの見苦しさをつくろはむとする時もあるをいみじう諫め給ひて「見よと思ひ給ひてこそしおかせ給ひけめ、などてか輕々しき人の家の飾りとはなさむ。なき人の御ほい違はむが哀なること」とのたまひてさるわざはせさせ給はず。はかなきことにてもとぶらひ聞ゆる人はなき御身なり。唯御せうとのぜんじの君ばかりぞ稀にも京に出で給ふ時はさし覗き給へど、それも世になきふるめき人にて同じき法師といふ中にもたづきなくこの世を離れたるひじりにものし給ひて、しげき草よもぎをだにかきはらはむものとも思ひより給はず。かゝるまゝにあさぢは庭の面も見えずしげりよもぎは軒を爭ひて生ひのぼるむぐらはにしひんがしのみかどを閉ぢ籠めたるぞ頼もしけれど、崩れがちなるめぐりの垣を馬牛などの蹈みならしたる路にて、春夏になればはなちかふあげまきの心さへぞめざましき。はつき野分荒かりし年廊どもゝ倒れ伏しまもの屋どものはかなきいたぶきなりしなどは骨のみ僅に殘りて立ちとまるげすだになし。煙絶えてあはれにいみじき事多かり。ぬすびとなどいふひたぶる心あるものも思ひやりの寂しければにや、この宮をばふようのものにふみすぎて寄り來ざりければかくいみじきのらやぶなれどもさすがに寢殿の内ばかりはありし御まつらひ變らず、つやゝかにかいはさなどする人もなし。ちりは積れどもまぎるゝことなきうるはしき御すまひにてあかし暮し給ふ。はかなき古歌物語などやうのすさびごとにてこそつれづれをも紛らはし、かゝるすまひをも思ひ慰むるわざなめれ。さやうの事にも心遲く物し給ふ。わざとこのましからねどおのづから又急くことなき程は同じ心なる交通はしなどもうちしてこそ若き人は木草につけても心を慰め給ふべけれど、親のもてかしづき給ひし御心おきてのまゝに世の中をつゝましきものにおぼして稀にも事通ひ給ふべき御あたりをも更に馴れ給はず。ふるめきたるみづしあけて、からもり、はこやのとじ、かぐや姫の物語の繪に書きたるをぞ時々のまさぐりものにしたまふ。古歌とてもをかしきやうにえり出で題をもよみびとをもあらはし心得たることそ見所もありけれ。うるはしきかんやがみ、みちのくにがみなどのふくだめるにふることゞもの目馴れたるなどはいとすさまじげなるを、せめてながめ給ふ折々はひきひろげ給ふ。今のよの人のすめる經うち讀み行ひなどいふことはいと耻

しくし給ひて、見奉る人もなけれどずゞなど取り寄せ給はず、かやうにうるはしくぞ物し給ひける。侍従などいひし御めのとごのみこそ年ごろあくがれ出でぬものにてさぶらひつれど、通ひ參りし齋院うせ給ひなどしていと堪へ難く心ぼそきに、この姫君の母北の方のはらから世におちぶれてず領の北の方になり給へるありけり。むすめどもかしづきてよろしきわがうどゞもゝむげに知らぬ所よりは親どもゝまうで通ひしをと思ひてときどき通ふ。この姫君はかく人うとき御癖なれば睦しくもいひ通ひ給はず、「おのれをばおとしめ給ひておもてぶせにおぼしたりしかば姫君の御有樣の心苦しげなるも見とぶらひ聞えず」などなまにくげなる詞ども言ひ聞かせつゝ時々聞えけり。もとよりありつきたるさやうのなみなみの人は、なかなかよき人のまねに心をつくろひ思ひあがるも多かるを、やんごとなき筋ながらもかうまでおつべきすくせありければにや、心少しなほなほしき御をばにぞありける。わがかくおとりのさまにてあなづらはしく思はれたりしを、いかでかかゝる世の末にこの君を我がむすめどものつかひ人になしてしがな、心ばせなどのふるびたるかたこそあれ、いとうしろやすきうしろみならむと思ひて、「時々こゝに渡らせ給ひて御琴のねも承はらまほしがる人なむ侍る」と聞えけり。この侍従も常に言ひもよほせど、人にいどむ心にはあらで唯こちたき御物づゝみなれば、さもむつび給はぬをねたしとなむ思ひける。かゝるほどにかの家あるじ大貳になりぬ。むすめどもあるべきさまに見置きてくだりなむとす。この君を猶も誘はむの心深くて、「遙にかく罷りなむとするに心細き御ありさまの常にしもとぶらひ

聞えねど近きたのみ侍りつる程こそあれ、いとあはれに後めたくなむ」などことよがるを、更にうけひき給はねば、「あなにくことごとしや、心一つにおぼしあがるともさるやぶはらに年經給ふ人を大將殿もやんごとなくしも思ひ聞え給はじ」などゑんじうけひけり。さる程にげに世の中に許され給ひて都にかへり給ふと、あめのしたの悅にて立ち騷ぐ。我もいかで人より先に深きこゝろざしを御覽ぜられむとのみ思ひきほふ。をとこ女につけてたかきをもくだれるをも人の心ばへを見給ふに、あはれにおぼし知る事さまざまなり。かやうにあわたゞしき程に更に思ひ出で給ふ氣色見えで月日經ぬ。今はかぎりなりけり、年比あらぬさまなる御さまを悲しういみじき事を思ひながらもえ出づる春にあひ給はなむと念じ渡りつれど、たびしかはらなどまで悅び思ふなる御位あらたまりなどするをよそにのみ聞くべきなりけり、悲しかりし折のうれはしさはたゞ我が身一つのためになれるとおぼえしかひなき世かなと、心碎けてつらく悲しければ、人知れずねをのみ泣き給ふ。大貳の北の方、さればよまさにかくたつきなく人わろき御ありさまへ給ふ人はありなむや、ほとけひじりも罪輕きをこそ導きよくし給ふなれ、かゝる御有樣にてたけく世をおぼし、宮うへなどのおはせし時のまゝにならひ給へる御心おごりのいとほしきことゝいとゞをこがましげに思ひて、「猶も思し立ちね。世のうき時は見えぬ山路をこそ尋ぬなれ。田舍などはむづかしきものとおぼしやるらめどひたぶるに人わろげにはよももてなし聞えじ」などいと事よくいへば、むげにくしにたる女ばら「さもなびき給はなむ。たけき事もあるまじき御身をいかにおぼし

てかく立てたる御心ならむ」ともどきつぶやく。侍從もかの大貳のをひだつ人語らひつきて留むべくもあらざりければ、「心よりほかに出で立ちて見奉り置かむがいと心苦しきを」とてそゝのかし聞ゆれど猶かくかけ離れて久しうなり給ひぬる人に頼みをかけ給ふ御心の内に、さりともありへてもおぼし出づるついであらじやは、あはれに心深さちぎりをぞ給ひしに、我が身のうくてかく忘られたるにこそあれ、風のつてにても我がかくいみじきありさまを聞きつけ給はゞ必ずとぶらひ出で給ひてむと年比おぼしければ、おほかたの御家居もありしよりけにあさましけれど、我が心もてはかなき御調度どもなども取り失はせ給はず、心づよく同じさまにて念じすぐし給ふなりけり。ねなきがちにいとゞおぼし沈みたるはたゞ山人の赤きこのみひとつをかほに放たぬと見え給ふ御そばめなどはおぼろけの人の見奉り許すべきにもあらずかし。委しくは聞えじ、いとほしう物いひさがなきやうなり。冬になり行くまゝにいとゞかきつかむかたなく悲しげにながめすごし給ふ。かの殿には故院の御ために御八講世の中ゆすりてし給ふ。殊に僧などはなべてのは召さず、ざえすぐれおこなひにあみ尊きかぎりをえらせ給ひければこのぜんじの君も參り給へりけり。かへりざまに立ち寄り給ひて、「あがあか權大納言殿の御八講にまゐりて侍りつるなり。いとかしこう生ける淨土のかざりに劣らずいかめしうおもしろき事どもの、かぎりをなむあ給ひつる。佛菩薩のへんぐゑの身にこそものし給ふめれ、いつゝのにごり深き世になどて生れ給ひけむ」といひてやがて出で給ひぬ。ことずくなに世の人に似ぬ御あはひにてかひなき世の物語をだにえ

聞え合せ給はず。さてもかばかりつたなき身のありさまをあはれに覺束なくてすぐし給ふは心うの佛菩薩やとつらう覺ゆるを、げに限なめりとやうやう思ひなり給ふに、大貳の北の方俄に來たれり。例はさしもむつびぬを、さそひ立てむのこゝろにて奉るべき御さうぞくなどてうじてよき車に乘りておもゝち氣色ほてりかに物思ひなげなるさましてゆくりもなく走り來てかどあけさするより人わるくさびしき事かぎりなし。左右の戸もよろぼひ倒れにければをのこども助けてとかくあけさわぐ。いづれかこの淋しき宿にも必ずわけたる跡あなる三つのみちとただる。僅にみなみおもての格子あけたるまに寄せたれば、いとゞはしたなしとおぼしたれどあさましうすゝけたる几帳さし出でゝ侍從出で來たり、かたちなど衰へにけり。年ごろいたうつひえたれどなほもの清げによしあるさまして、かたじけなくともとりかへつべくみゆ。「出で立ちなむ事を思ひながら、心苦しき御ありさまの見すて奉りがたきを侍從の迎になむ參り來たる。心うく思し隔て給ひて御みづからこそあからさまにも渡らせ給はねゝこの人をだに許させ給へとてなむ、などかうあはれげなるさまには」とてうちも泣くべきぞかし。されど行く道に心をやりていとこゝちよげなり。「故宮おはせし時おのれをばおもてぶせなりとおぼし捨てたりしかばうとうとしきやうになりそめにしかど、年ごろも何かはやんごとなきさまにおぼしあがり、大將殿などおはしまし通ふ御宿世の程を、かたじけなく思ひ給へられしかばなむ、むつび聞えさせむも憚ること多くて過ぐし侍りつるを、世の中のかくさだめもなかりければかずならぬ身はなかなか心安く侍るものなり

けり。およびなく見奉りし御ありさまのいと悲しく、心苦しきを、近きほどはおのづから怠るをりものどかにたのもしくなむ侍りけるを、かく遙に罷りなむとすればうしろめたくあはれにおぼえ給ふ」など語らへど心とけてもいらへ給はず。「いとうれしきことなれど世に似ぬさまにて何かは。かうながらこそ朽ちもうせめとなむ思ひ侍る」とのみの給へば「げにおろかなむおぼさるべけれど、生ける身を捨てゝかくむくつけきすまひするたぐひは侍らずやあらむ。大將殿のつくりみがき給はむにこそは引きかへ玉のうてなにもなりかへらめとはたのもしうは侍れど、只今は兵部卿の宮の御むすめよりほかに心わけ給ふかたもなかりけり。昔よりすきずきしき御心にてなほざりに通ひ給ひけるところどころ皆おぼし離れにたなり。ましてかう物はかなきさまにて藪原にすぐし給へる人をば、心清く我を頼み給へるありさまと尋ねきこえ給ふことといと難くなむあるべき」など言ひ知らするをげにとおぼすもいと悲しくてつくづくと泣き給ふ。されど動くべうもあらねばよろづに言ひ煩ひくらして、さらば侍從をだにと日の暮るゝまゝに急げば、心あわただしくて泣くなく「さらばまづけふはかう責め給ふおくりばかりにまうで侍らむ、かの聞え給ふもことわりなり。又おぼし煩ふもさることに侍れば中に見給ふるも心苦しくなむ」と忍びて聞ゆ。この人さへうち捨てゝむとするをうらめしうもあはれにもおぼせど言ひとゞむべきかたもなくていとゞねをのみたけきことにてものし給ふ。かたみにそへ給ふべきみなれごろもゝまほなれたれば、年經ぬるまろし見せ給ふべきものなくて、我みぐしの落ちたりけるを取り集めてかづらにし給へるが九尺よばかりにていときよらなるを、をかしげなる箱に入れてむかしのくのえかうのいとかうばしき一壺ぐしてたまふ。

「たゆまじきすぢと頼みし玉かづらおもひの外にかけはなれぬる。こまゝののたまひ置きしこともありしかばかひなき身なりとも見はてゝむとこそ思ひつれ。うち捨てらるゝもことわりなれど、誰に見讓りてかとうらめしうなむ」とていみじう泣き給ふ。この人も物も聞えやらず「まゝのゆゑごんは更にも聞えさせず、年ごろの忍び難き世のうさをすぐし侍りつるにかくおぼえぬみちにいざなはれて遙にまかりあくがるゝことゝとて、

「玉かづら絶えてもやまじ行く道のたむけの神もかけてちかはむ。いのちこそ知り侍らねゝ」などいふに「いづら、唖うなりぬ」とつぶやかれて心もそらにて引き出づれば、かへりみのみせられけり。年ごろわびつゝも行き離れざりつる人のかく別れぬることをいと心ぼそうおぼすに、世に用ゐらるまじきおいびとさへ、いでやことわりぞ、いかでか立ちとまりたまはむ我等もえこそ念じはつまじけれと、おのが身々につけたるたよりども思ひ出でゝとまるまじう思へるを人わろく聞きおはす。霜月ばかりになりぬれば雪霰がちにてほかには消ゆるまもあるを、朝日夕日をふせぐよもぎむぐらのかげに深うつもりて越の白山思ひやらるゝ雪のうちに出で入るしもびとだになくてつれづれとながめ給ふ。はかなき事を聞えなぐさめ泣きみ笑ひみまぎらはしつる人さへなくて、夜も塵がましき御帳の内もかたはらさびしく物悲しくおぼさる。』かの殿にはめづらし人にいとゞ物さわがしき御ありさまにてい

とやんごとなくおぼされぬところどころにはわざともえ音づれ給はず。ましてその人はまだ世にやおはすらむとばかりおぼし出づる折もあれど、尋ね給ふべき御こゝろざしもいそがでありふるに、年かはりぬ。卯月ばかりに花散里を思ひ出で聞え給ひて忍びて對の上に御いとま聞えて出で給ふ。日ごろふりつる名殘の雨少しそゝぎてをかしきほどに月さし出でたり。昔の御ありきおぼし出でられて艶なる程の夕づく夜に、道のほどよろづの事おぼし出でゝおはするにかたもなく荒れたる家の木立しげく森のやうなるを過ぎ給ふ。大きなる松に藤の咲きかゝりて月かげに靡きたる、風につきてさと匂ふがなつかしくそこはかとなきかをりなり。橘にはかはりてをかしければさし出で給へるに、柳もいたうおだりて、ついひぢもさはらねば亂れふしたり。見し心地する木立かなとおぼすはやうこの宮なりけり。いとあはれにておしとゞめさせ給ふ。例の惟光はかゝる御しのびありきにおくれねば侍ひけり。召し寄せて、「こゝは故常陸の宮ぞかしな」。「おか侍り」と聞ゆ。「こゝにありし人はまだやながむらむ。とぶらふべきをわざと物せむもところせし。かゝるついでに入りてせうそこせよ、能く尋ねよりてをうち出てよ。人違へしてはをこならむ」とのたまふ。こゝにはいとゞながめまさるころにて、つくづくとおはしけるに、ひるねの夢に故宮の見え給ひければ覺めていと名殘悲しくおぼして、もりぬれたる廂の端つかたをおしのごはせて、こゝかしこのおまし引きつくろはせなどしつゝ例ならず世づき給ひて、

「なき人を戀ふる袂のひまなきに荒れたる軒のおづくさへそふ」も心苦しき程になむあ

めりける。惟光入りてめぐるめぐる、人の音する方やと見るに、いさゝか人げもせず。されば こそゆきゝの道に見入るれど人住みげもなきものをと思ひてかへり參る程に、月あかくさし出でたるに見れば、格子ふたまばかりあげて簾垂動く氣色なり。僅に見つけたる心地恐しくさへおぼゆれど寄りてこわづくれば、いと物ふりたる聲にてまづしはぶきをさきに立てゝ、「かれはたれぞ何人ぞ」と問ふ。名のりして、「侍從の君と聞えし人にたいめん給らむ」といふ。「それは外になむ物し給ふ。されどおぼしわくまじき女なむ侍る」といふ聲いたうねびすぎたれど、聞きしおいびとゝ聞き知りたり。内には思ひ寄らず狩衣姿なる男の忍びやかにもてなしてなごやかなれば、見ならはずなりにけるめにて、もし狐などのへんげにやと覺ゆれど、近うよりて「たしかになむ承らまほしき。變らぬ御有樣ならば尋ね聞えさせ給ふべき御心ざしも足らずなむおはしますめるかし。こよひも行き過ぎがてにとまらせ給へるをいかゞ聞えさせむ。後やすくを」といへば女どもうち笑ひて、「變らせ給ふ御有樣ならばかゝるあさぢが原をうつろひ給はでは侍りなむや、たゞ推し量りて聞えさせ給へかし。年經たる人の心にもたぐひあらじとのみ珍らかなる世をこそは見奉り過ぐし侍れ」とやゝくづし出でゝ問はず語りもおつべきがむつかしければ、「よしよしまづかくなむと聞えさせむ」とて參りぬ。「などかいと久しかりつる。いかにぞ。昔の跡も見えぬ蓬のおげさかな」とのたまへば、「おかじかなむたどりよりて侍りつる。侍從がをばの少將といひ侍りしおい人なむ、變らぬ聲にて侍りつる」とありさま聞ゆ。いみじうあはれにかゝるおげさ中に何心地してすぐし

給ふらむ、今までとはざりけるよと我が御心のなさけなさもおぼし知らる。「いかゞすべき。かゝるしのびありきも難かるべきを、かゝる序ならではえ立ち寄らじ。變らぬありさまならばげにさこそあらめと推し量らるゝ人ざまになむ」とはのたまひながら、ふと入り給はむことと猶つゝましうおぼさる。故ある御消そこもいと聞えまほしけれど、見給ひし程の口おそさもまだかはらずば御使の立ちわつらはむもいとほしうおぼしとゞめつ。惟光も「更にえ分けさせ給ふまじき蓬の露けさになむ侍る。露少し拂はせてなむ入らせ給ふべき」と聞ゆれば、

「尋ねても我こそとはめ道もなく深きよもぎのもとのこゝろを」とひとりごちて猶おり給へば御さきの露を馬の鞭して拂ひつゝ入れ奉る。あまぞゝぎも猶秋の時雨めきてうちそゝげばみかささぶらふ。「げにこの下露は雨にまさりて」と聞ゆ。御指貫の裾はいたうそぼちぬめり。昔だにあるかなきかなりし中門などましてかたもなくなりて、入り給ふにつけてもいとむとくなるを立ちまじり見る人なきぞ心安かりける。姫君はさりともとまちすぐし給へる心もおろく嬉しけれど、いと耻しき御ありさまにてたいめんせむもいとつゝましくおぼしたり。大貳の北の方の奉り置きし御ぞどもをも心ゆかずと思されしゆかりに見入れ給はざりけるをこの人々のからの御からびつに入れたりけるがいとなつかしきかおたるを奉りければ、いかゞはせむに着かへ給ひて、かの煤けたる御几帳ひきよせておはす。入り給ひて、「年比の隔ても心ばかりはかはらずなむ思ひやり聞えつるを、さしもおどろかい給はぬうらめしさに今までこゝろみ聞えつるを、杉ならぬ木立のおるさに、え過ぎでなむまけ聞

えにける」とてかたびらを少しかきやり給へれば、例のいとつゝましげにとみにもいらへ聞え給はず。かくばかりわけ入り給へるが淺からぬに思ひおこしてぞほのかに聞え出で給ひける。「かゝる草がくれに過ぐし給ひける年月のあはれもおろかならず、また變らぬ心ならひに人の御心のうちもたどり知らずながら、分け入り侍りつる露けさなどをいかゞおぼす。年比の怠はたなべての世におぼし許すらむ。今より後の御心にかなはざらむなむいひしにたがふ罪もおふべき」など、さしもおぼされぬ。事もなさけなさけしう聞えなし給ふことゞもあめり。立ちとゞまり給はむも所のさまより始めまばゆき御有樣なれば、つきづきしうのたまひ過ぐして出で給ひなむとす。ひき植ゑしならねど、松のこ高くなりにける年月のほどもあはれに夢のやうなる御身のありさまもおぼしつゞけらる。

「ふぢなみのうち過ぎがたく見えつるは松こそ宿のおるしなりけれ。數ふればこよなう積りぬらむかし。都にかはりにける事の多かりけるもさまざまあはれになむ。今のどかにぞひなのわかれに衰へし世の物語も聞えつくすべき。また年經給ひつらむ春秋の暮しがたさなども誰にかは憂へ給はむとうらもなく覺ゆるもかつはあやしうなむ」など聞え給へば、

「年を經てまつおるしなき我が宿を花のたよりにすぎぬばかりか」と忍びやかにうちみじろき給へるけはひも袖の香も昔よりはねびまさり給へるにやとおぼさる。月入り方になりて西の妻戸のあきたるよりさはるべき渡殿だつ屋もなく軒のつまも殘りなければいと花やかにさし入りたればあたりあたり見ゆるに、昔に變らぬ御おつらひのさまなど、おのぶ草

にやつれたる上の見るめよりはみやびかに見ゆるを、昔物語にだうこぼちたる人もありけるをおぼしあはするに、同じさまにて年ふりにけるもあはれなり。ひたぶるに物づゝみしたるけはひのさすがにあてやかなるも心にくゝおぼされて、さるかたにて忘れじと心苦しく思ひしを、年比さまざまの物思ひにほれぼれしくて隔てつる程つらしと思はれつらむといとほしくおぼす。かの花散里もあざやかに今めかしうなどは花やぎ給はぬ所にて御目うつしこよなからぬにとが多う隠れにけり。祭ごけいなどのほど御いそぎどもにことつけて人の奉りたるものゝいろいろに多かるを、さるべきかぎり御心加へ給ふ。中にもこの宮にはこまやかにおぼしよりてむつましき人々におぼせごと給ひ、しもべどもなど遣して蓬拂はせめぐりの見苦しきに板垣といふものうち堅めつくろはせ給ふ。かう尋ね出で給へりと聞き傳へむにつけても我が御ためめんぼくなければ渡り給ふことなし。御文いと細やかにかき給ひて「二條院いと近き所を造らせ給ふをそこになむ渡し奉るべき。よろしきわらはべなど求めて侍はせ給へ」など人々の上までおぼしやりつゝとぶらひ聞え給へば、かくあやしき蓬のもとには置き所なきまで女ばらも空を仰きてなむそなたに向きて喜び聞えける。なげの御すさびにてもおしなべたるよのつねの人をば目とゞめ見立て給はず。世に少しこれはとおもほえ、心にとまるふしあるあたりを尋ねより給ふものと人の知りたるに、かくひきたがへ何事もなのめにだにあらぬ御有様を物めかし出で給ふはいかなりける御心にかありけむ、これも昔の契なめりかし。今はかぎりとあなづりはてゝさまざまにきほひ散りあがれしうへしもの人々、われもわれも参らむと爭ひ出づる人もあり。心ばへなどはたうもれいたきまでよくおはする御有様に心やすくならひて殊なる事なきなま受領などやうの家にある人は、ならはずはしたなき心地するもありてうちつけの心みえに参り歸る。君はいにしへにもまさりたる御いきほひの程にて物の思ひやりもまして添ひ給ひにければ、こまやかにおぼしおきてたるにほひ出でゝ宮の内やうやう人め見え、木草の葉もたゞすごくあはれに見えなされしを、やりみづかき拂ひ前栽のもとだちも涼しうしなどして、殊なるおぼえなきしもげいしのとに仕へまほしきは、かくみこゝろとゞめておぼさるゝことなめりと見とりて御氣色給はりつゝ追しようし仕うまつる。二年ばかりこのふる宮に詠め給ひてひんがしの院といふ所になむ後には渡し奉り給ひける。たいめんし給ふことなどはいと難けれども、近きしめのほどにて大方にも渡り給ふにさし覗きなどし給ひつゝいとあなづらはしげにもてなし聞え給はず。かの大貳の北の方のぼりて驚き思へるさま、侍從が嬉しきものゝ今しばしまち聞えざりける心淺さを恥しう思へる程などを、今少し間はず語もせまほしけれど、いと頭痛ううるさくものうければ今又も序あらむ折に思ひ出でゝなむ聞ゆべきとぞ。

關屋

伊豫の介といひしは故院かくれさせ給ひてまたの年常陸になりて下りしかば、かの箒木も

いざなはれにけり。須磨の御たびゐも遙に聞きて人まれず思ひやり聞えぬにしもあらざりしかど、傳へ聞ゆべきよすがだになくて筑波嶺の山を吹き越す風も浮きたる心地して聊のつたへだになくて年月かさなりにけり。限れる事もなかりし御たびゐなれど京に歸り住み給ひて又の年の秋ぞ常陸はのぼりける。關入る日しもこの殿石山に御ぐわんはたしにまうで給ひけり。京よりかの紀の守などいひし子ども迎に來たる人々「この殿かくまうで給ふべし」と告げゝれば道のほどさわがしかりなむものぞとてまだ曉より急ぎけるを、をんな車多く所せうゆるぎくるに日たけぬ。うちいでの濱くるほどに殿は粟田山越え給ひぬとてごぜんの人々道もさりあへずきこみぬれば、せき山に皆おり居てこゝかしこの杉のしたに車どもかきおろしこがくれに居かしこまりて過ぐし奉る。車などかたへはおくらかし先にたてなどまたれど猶るゐひろく見ゆ。車十ばかりぞ袖口物の色あひなども漏り出てゝ見えたる。田舍びずよしありて齋宮の御くだり何ぞやうの折の物見車おぼし出てらる。殿もかく世に榮え出で給ふ珍しさに數もなきごぜんども皆目とゞめたり。ながつきつごもりなれば紅葉のいろいろこきまぜ霜がれの草むらむらをかしう見え渡るに、關屋よりさとはづれ出でたる旅姿どものいろいろのあをのつきづきしき縫物くゝりぞめのさまもさるかたにをかしう見ゆ。御車は簾垂おろし給ひてかの昔の小君今は右衛門の介なるを召し寄せて「今日の御關むかへはえ思ひすて給はじ」などの給ふ。御心の中いとあはれにおぼし出づると多かれど、

おほざうにてかひなし。女も人知れず昔のこと忘れねばとり返して物あはれなり。

「行くとくとせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ」。えまり給はじかしとおもふにいとかひなし。石山より出で給ふ御むかへに右衛門の介參れり。ひとひまかり過ぎしかしこまりなど申す。むかしわらはにていとむつましうらうたきものにし給ひしかば、かうぶりなど得しまでこの御德に隱れたりしを、おぼえぬ世のさわぎありしころ物の聞えに憚りて常陸にくだりしをぞ少し御心おきて年比はおぼしけれど色にも出し給はず。昔のやうにこそあらねど猶親しき家人の内にはかぞへ給ひけり。紀の守といひしも今は河内の守にぞなりにける。その弟の右近のざう解けて御供にくだりしをぞとりわきてなし出で給ひければそれにぞ誰も思ひ知りて、などて少しも世に從ふ心をつかひけむなど思ひ出でける。介召し寄せて御せうそこあり。今はおぼし忘れぬべきことを心長くもおはするかなと思ひ居たり。一日はちぎり知られじをさはおぼし知りけむや。

わくらばに行きあふ道をたのみしもなほかひなしやしほならぬ海。關守のさもうらやましく目ざましかりしかな」とあり。「年比のとだえもうひうひしくなりにけれど心にはいつとなく只今の心ちするならひになむ。すきずきしいとゞにくまれむや」とて賜へればかたじけなくてもていきて「なほ聞えたまへ。昔には少しおぼしのくことあらむと思ひ給ふるに、同じやうなる御心のなつかしさなむいとゞありがたき。すさびことぞようなきことゝ思へど、えこそすくよかに聞えかへさね。女にてはまけ聞え給へらむに罪許されぬべし」など

いふ。今はましていと耻しうよろづのとうひうひしき心地すれど、めづらしきにや、え忍ばれざりけむ。

「あふさかの關やいかなるせきなればしげきなげきの中をわくらむ。夢のやうになむ」と聞えたり。あはれもつらさも忘れぬふしとおぼし置かれたる人なれば折々はなほのたまひうごかしけり。かゝる程にこの常陸の守おひのつもりにや、惱しうのみして物心ぼそかりければ、子どもに唯この君の御事をのみ言ひ置きて「よろづのことたゞこの御心にのみ任せて我がありつる世にかはらで仕うまつれ」とのみあけくれいひけり。女君心うきすくせありてこの人にさへ後れていかなるさまにはふれ惑ふべきにかあらむと思ひ歎き給ふを見るに、いのちの限あるものなれば惜みとゞむべきかたなし。いかでかこの人の御ために殘し置くたましひもがな、我が子どもの心も知らぬをと、後めたう悲しきことにいひ思へど心えにとゞめぬものにてうせぬ、暫しこそさのたまひしものをなどなさけつくれど、うはべこそあれ、つらきこと多かり。とあるもかゝるも世のことわりなれば、身一つのうきことにてなげきあかしくらす。唯このかうちの守のみ昔よりすきごゝろありて少しなさけがりける。「あはれにのたまひおきしを數ならずともおぼし疎までのたまはせよ」などつねそうしよりていとあさましき心の見えければ、うきすくせある身にてかく生きとまりてはてはては珍しき事どもを聞きそふるかなと、人知れず思ひ知りて人にさなむとも知らせで尼になりにけり。ある人々いふかひなしと思ひなげく。守もいとつらう「おのれを厭ひ給ふほどにのこりの御齡

多くものし給ふらむいかでかすぐし給ふべき」などぞあいなのさかしらやなどぞ侍るめる。

繪合

前の齋宮の御まゐりのこと中宮の御心に入れて催し聞え給ふ。こまかなる御とぶらひまでとり立てたる御後見もなしとおぼしやれど、大殿は院にも聞しめさむことを憚り給ひて二條院に渡し奉らむことをもこのたびはおぼしとまりて唯きらず顏にもてなし給へれど、大方の事どもはとりもちて親めき聞え給ふ。院はいと口惜しくおぼしめせど、人わろければ御せうそこなど絶えにたるを、その日になりてえならぬ御よそひども御櫛の箱うちみだりの箱かうごの箱どもよのつねならずくさぐさの御たき物どもくぬえかうまたなきさまに百ぶのほかを多く過ぎ匂ふまで心ことにとゝのへさせ給へり。おとゞ見給ひもせむにとかねてよりやおぼし設けゝむ、いとわざとがましかめり。殿も渡り給へるほどにてかくなむと女別當御覽ぜさす。唯御櫛の箱の片つ方を見給ふに、つきせずこまかになまめきてめづらしきさまなり。さしぐしの箱のこゝろばに、

わかれぢに添へしをぐしをかごとにてはるけき中と神やいさめし」。おとゞこれを御覽じつけておぼしめぐらすに、いとかたじけなくいとほしくて我が御心ならひのあやにくなる身をつみてかのくだり給ひしほど御心におもほしけむこと、かう年經て歸り給ひてその

御志をも遂げ給ふべき程に、かゝるたがひめのあるをいかにおぼすらむ、御位を去り物ぎづかにて、世をうらめしとやおぼすらむ、われになりて心動くべきふしかなとおぼしつゝけ給ふにいとほしく、何にかくあながちなる事を思ひはじめて心苦しくおぼしなやますらむ、つらしとも思ひ聞えしかど又懐しくあはれなる御心ばへをなど思ひ亂れ給ひて、とばかりうち眺め給へり。「この御かへりはいかやうにか聞えさせ給ふらむ、又御せうそこもいかゞ」など聞え給へど、いとかたはらいたければ御文はえ引き出てず。宮は惱しげにおぼして御返りいと物うくぎ給へど「聞え給はざらむもいとなさけなくかたじけなかるべし」と人々そゝのかし煩ひ聞ゆるけはひを聞き給ひて「いとあるまじき御事なり。ぎるしばかり聞えさせ給へ」と聞え給ふもいとはづかしけれどいにしへおぼし出づるに、いとなまめき清らにていみじう泣き給ひし御さまをそこはかとなくあはれと見奉り給ひし御をさな心も只今の事とおぼゆるに、故みやす所の御事などもかきつらねあはれにおぼされて、たゞかく、

「わかるとて遥にいひしひとことをもかへりてものは今ぞかなしき」とばかりやありけむ。

御使の祿ぎなどに賜はす。おとゞは御返りをいとゆかしうおぼせど聞えたまはず。院の御ありさまは女にて見奉らまほしきをこの御けはひも似げなからずいとよき御あはひなめるを、内はまだいといはけなくおはしますめるに、かく引き違へ聞ゆるを人知れずものしとやおぼすらむなど、にくき事をさへおぼしやりて胸づふれ給へど、今日になりておぼしとゞむべきことにしあらねば、事どもあるべきさまにのたまひおきて睦しうおぼす。すりの宰相をくはしう仕うまつるべくのたまひてうちに参り給ひぬ。うけばりたる親ざまには聞しめされじと院を包み聞え給ひて御とぶらひばかりと見せ給へり。よき女房などはもとより多かる宮なれば里がちなりしも参り集ひていとになくけはひあらまほしく、あはれおはせましかばいかにかひありておぼしいたづかましと、昔の御心ざまおぼし出づるに、大方の世につけては惜しうあたらしかりし人の御有樣ぞや。さこそえあらぬものなりければよしありし方は猶すぐれて物の折ごとに思ひ出で聞え給ふ。中宮もうちにぞおはしましける。うへは珍しき人参り給ふと聞しめしければ、いとうつくしう御心づかひして坐します。程よりはいみじうざれおとなび給へり。宮には「かく耻しき人参り給ふを、御心づかひして見え奉らせ給へ」と聞え給ひけり。人ぎれずおとなは耻しうやあらむとおぼしけるをいたく夜更けて参うのぼり給へり。いとつゝましげにおぼどかにてさゝやかにあえかなるけはひのしたまへれば、いとをかしとおぼしけり。弘徽殿には御覽じつけたれば睦ましうあはれに心安くおもほし、これは人ざまもいたうぎめり耻しげにおとゞの御もてなしもやんごとなくよそほしければあなづりにくゝ思されて、御とのゐなどはひとしくし給へどうちとけたる御わらは遊に盡など渡らせ給ふことはあなたがちにおはします。權中納言は思ふ心ありて聞え給ひけるに、かく参り給ひて御むすめにきしろふさまにて侍ひ給ふをかたがたに安からずおぼすべし。院にはかの櫛の箱の御かへり御覽ぜしにつけても御心離れ難かりけり。その頃おとゞの参り給へるに御物語こまやかなり。事のついでに齋宮のくだり給ひしことささざきもの

たまひ出づれば、聞え出で給ひてさ思ふ心なむありしなどはえあらはし給はず。おとゞもかへる御氣色聞き顔にはあらで、只いかにおぼしたるとゆかしさに、とかうかの御事のたまひ出づるにあはれなる御氣色のあさはかならず見ゆればいといとほしくおぼす。めでたしとおぼしまみにける御かたち、いかやうなるをかしさにかとゆかしう思ひ聞え給へど、更にえ見奉り給はぬをねたうおもほす。いとおもりかにて夢にもいはけたる御ふるまひあらばこそおのづからほの見え給ふついでもあらめ、心にくき御けはひのみ深さまされば、見奉り給ふまゝに、いとあらましと思ひ聞え給へり。かくすきまなくて二所さぶらひ給へば兵部卿の宮すがすがともえおもほしたらず。帝おとなび給ひなばさりともえ おもほし捨てじとぞまち過ぐし給ふ。』二所の御おぼえどもとりどりにいどみ給へり。うへはよろづの事にすぐれて、繪を興あるものにおぼしたり。立てゝ好ませ給へばにや、になく書かせ給ふ。齋宮の女御いとをかしう書かせ給ひければ、これに御心うつりて渡らせ給ひつゝかき通はさせ給ふ。殿上の若き人々もこの事まねぶをば御心とゞめて をかしきものにおもほしたれば、ましてをかしげなる人の心ばへあるさまにまほならず書きすさびなまめかしうそひふしてとかく筆うちやすらひ給へるさま、らうたげさに御心ゑみて、いとゑげう渡らせ給ひてありしよりけに御思ひまされるを、權中納言聞き給ひて飽くまでかどかどしく今めき給へる御心にて、われ人に劣りなむやとおぼし勵みて、すぐれたる上手どもを召し取りていみじういましめてまたなきさまなる繪どもをになき紙どもに書き集めさせ給ふ。物語繪こそ心ばへに見えて

見所あるものなれどて、おもしろく心ばへある限をえりつゝ書かせ給ふ。例の月なみの繪も見馴れぬさまに言の葉を書き續けて御覽ぜさせ給ふ。わざとをかしうまたれば、又こなたにてもこれを御覽ずるに心やすくもとり出で給はず、いといたく秘めて この御方にもて渡らせ給ふを惜みらうじ給へば、おとゞ聞き給ひて、「猶權中納言の御心の若々しさこそ改まりがたかめれ」など笑ひ給ふ。「あながちに隱して心安くも 御覽ぜさせず惱ましゐ聞ゆるいとめざましや。古代の御繪どもの侍る參らぜむ」と奏し給ひて、殿に舊き新しき繪ども入りたる御厨子ども開がせ給ひて女君と諸共に今めかしきはそれぞれとえり整へさせ給ふ。長恨歌王昭君などやうの繪はおもしろくあはれなれど、事の忌あるはこたみは奉らじとえりとゞめ給ふ。かの旅の御日記のはこをも取り出でさせ給ひて、このついでにぞ女君にも見せ奉り給ひける。知らで今見む人だに少し物思ひ知らむ人は涙惜むまじくあはれなり。まいて忘れがたくその夜の夢をおぼしさます折なき御心どもには取り返し悲しうおぼし出でらる。今まで見せ給はざりけるうらみをぞ聞え給ひける。

「一人居て眺めしよりはあまのすむかたを書きてぞ見るべかりける。おぼつかなさは慰みなましものを」とのたまふ。いとあはれとおぼして、

「うきめ見しそのをりよりも今日はまた過ぎにしかたにかへる涙か」。中宮ばかりには見せ奉るべきものなり。かたはなるまじき一てふづゝさすがに浦々の有樣さやかに見えたるをえり給ふついでにもかのあるじの家居ぞまづいかにとおぼしやらぬ時の間もなき。から

繪ども集めらると聞き給ひて、權中納言いとゞ心をつくして軸表紙ひものかざりいよいよ整へ給ふ。やよひの十日の程なれば空もうらゝかにて人の心も延び、物おもしろき折なるにうちわたりもさるべき節會どものひまなれば唯かやうの事どもにて御かたがたくらし給ふを、おなじくは御覽じ所もまさりぬべくて、奉らむの御心つきていとわざと集め參らせ給へり。こなたかなたとさまざま多かり。物語繪はこまやかに懷しさまざまるめるを、梅壺の御かたはいにしへの物語名高くゆゑあるかぎり弘徽殿はその頃世に珍しくをかしき限を選りて書かせ給へれば、うち見る目の今めかしき華やかさはいとこよなくまされり。うへの女房などもよしあるかぎり、これはかれはなど定めあへるをこの頃のことにすめり。中宮も參らせ給へる頃にてかたがた御覽じて捨て難くおもほすことなれば、御おこなひも怠りつゝ御覽ず。この人々とりどりに論ずるを聞しめして、ひだり右とかた分たせ給ふ。梅壺の御方には、へいないしのすけ、侍從の內侍、少將の命婦、右には大貳のないしのすけ、中將の命婦、兵衛の命婦を只今は心にくきいうそくどもにて心々にあらそふ。口つきどもをかしと聞しめしてまづ物語の出で來はじめの親なる竹取のおきなに、空穗の俊蔭を合せて爭ふ。「なよ竹の世々にふりにけることをかしきふしもなけれど、かぐや姫のこの世の濁にも穢れず、遙に思ひのぼれる契たかく、神世のことなめればあさはかなる女めおよばぬならむかし」といふ。右は「かぐや姫の昇りけむ雲ゐはげに及ばぬことなれば誰も知りがたし。この世の契は竹の中に結びければくだれる人のことゝこそ見ゆめれ。ひとつ家の內は照しけめど百數のかし

こき御光にはならはずなりにけり。安部のおほしが千々のこがねを棄てゝ火鼠のおもひ片時に消えたるもいとあへなし。くら持のみこのまことの蓬萊の深き心も知りながらいつはりて玉の枝に疵をつけたるをあやまちとなす」。繪は巨勢のあふみ、手は紀の貫之かけり。かんや紙に唐の綺をばいして赤紫の表紙紫檀の軸世の常のよそひなり。「俊蔭ははげしき波風におぼゝれ知らぬ國に放たれしかど猶さして行きけるかたの志もかなひて遂にひとの御門にも我が國にもありがたきさゑの程をひろめ名を殘しけるふるき心をいふに、繪のさまも唐土と日の本とを取りならべておもしろき事ども猶ならびなし」といふ。白き色紙青き表紙黃なる玉の軸なり。繪はつねのり、手はみちかぜなれば、今めかしうをかしげに目も輝くまで見ゆ。左にはそのことわりなし。次に伊勢物語に正三位を合はせてまた定めやらず。これも右はおもしろく賑はゝしく、うちわたりより、はじめ近き世のありさまを書きたるはをかしう見所まさる。平內侍、

「伊勢の海のふかきこゝろをたどらずてふりにし跡と波やけつべき。世の常のあだことのひきつくろひ飾れるにおされて業平が名をやくたすべき」と爭ひかねたり。右のすけ、

「雲のうへに思ひのぼれるこゝろには千ひろの底もはるかにぞ見る」。兵衛の大君の心高さはげに捨てたれど在五中將の名をばえくたさじとのたまはせて、宮、

「見るめこそうらぶれぬらめ年經にしいせをのあまの名をや沈めむ」。かやうの女ごとにて亂りがはしく爭ふに、一卷に言の葉を盡してえもいひやらず。唯淺はかなる若人どもはま

にかへりゆかしがれどうへのも宮のも片はしをだにえ見ず、いとといたう秘めさせ給ふ。おとゞ参り給ひてかくとりどりに爭ひ騒ぐ心はへどもをかしくおぼして、同じくは御前にてかちまけ定めむとのたまひなりぬ。かゝることもやとかねておぼしければ、中にも殊なるはえりとゞめ給へるに、かの須磨明石のふたまきはおぼす所ありてとりまぜさせ給へりけり。中納言もその心劣らず、この比の世には唯かく面白き紙繪を整ふることを天の下いとなみたり。今改め書かむことはほいなきことなり。唯ありけむ限をこそとのたまへど、中納言は人にも見せで、わりなき窓をあけて書かせ給ふめるを、院にもかゝる事聞かせ給ひて梅壺に御繪ども奉らせ給へり。年の内の節會どもの面白く興あるを昔の上手どものとりどりに書けるに、延喜の手づから事の心書かせ給へるに又我が御世の事も書かせ給へる卷に、かの齋宮の下り給ひし日の大極殿の儀式御心にあまみておぼしければ書くべきやう委しく仰せられて、公茂が仕う奉れるがいとゝいみじきを奉らせ給へり。艶に透きたるぢんの箱に同じきこゝろばのさまなどいと今めかし。御せうそこはたゞ言葉にて、院の殿上にもさぶらふ左近中將を御使にてあり。かの大極殿の御輿寄せたる所のかうがうしきに、

「身こそかくあめのほかなれそのかみの心のうちをわすれしもせず」とのみあり。聞え給はざらむもいとかたじけなければ、苦しくおぼしながら昔の御かんざしの端をいさゝか折りて、

「あめのうちは昔にあらぬ心ちして神代のことも今ぞこひしき」とて、はなだの唐の紙に

包みて参らせ給ふ。御使の祿などいとなまめかし。院の帝御覽ずるに限なくあはれとおぼすにぞ、ありし世をとりかへさまほしくおぼしける。おとゞをもつらしと思ひ聞えさせ給ひけむかし。過ぎにしかたの御報にやありけむ、院の御繪はきさいの宮より傳りてあの女御の御方にも多く参るべし。ないしのかんの君も、かやうの御このましさは人にすぐれて、をかしきさまにとりなしつゝ集め給ふ。』その日と定めて俄なるやうなれどをかしきさまにはかなうしなしてひだり右の御繪ども参らせ給ふ。女房のさぶらひにおましよそはせて北みなみかたがたに別れてさぶらふ。殿上人はこうらう殿の簀子に各心よせつゝさぶらふ。左は紫檀の箱に蘇芳のけそく、敷物には紫地の唐の錦、うちしきはえび染のからの綺なり。わらは六人、赤色に櫻がさねのかざみ、袙は紅に藤かさねの織物なり。すがた用意などなべてならず見ゆ。右はぢんの箱に淺香の下机、うちしきは青地のこまの錦、あしゆひの組けそくのこゝろばへなどいといまめかし。わらは青色に柳のかざみ、山吹がさねのあこめ着たり。皆おまへにかき立つ。上の女房まへしりへとさうぞき分けたり。召しありて内のおとゞ權中納言参り給ふ。その日そちの宮も参り給へり。いとよしありておはするなかに繪をなむたてゝ好み給へばおとゞのあたにすゝめ給へるやうやあらむ。ことごとしき召しにはあらで殿上にさぶらひ給ふを仰言ありておまへに参り給ふ。この判仕うまつり給ふ。いみじうげに書き盡したる繪どもあり。更にえ定めやり給はず。例の四季の繪も古の上手どもの面白き事どもを選びつゝ筆とゞこほらず書きながしたるさま譬へむかたなしと見るに紙繪はかぎりありて山

水のゆたかなる心ばへをえ見せつくさぬものなれば、唯筆のかざり人の心に作り立てられて今のあさはかなるも昔の跡にはぢなく賑はゝしくあなおもしろと見ゆるすぢはまさりて、多くの爭ひども今日はかたがたに興ある事ども多かり。朝がれひの御さうじを開けて中宮もおはします。深くおろしめしたらむと思ふに、おとゞもいというにおぼえ給ひて所々の判ども心もとなき折々に時々さしいらへ給ひける程あらまほし。定めかねて夜に入りぬ。左猶數ひとつあるはてに須磨のまきいできたるに、中納言の御心さわぎにけり。あなたにも心して、はての卷は心ことにすぐれたるをえり置き給へるにかゝるいみじきものゝ上手の心のかぎり思ひすまして靜に書き給へるは譬ふべきかたなし。みこより始め奉りて涙とゞめ給はず。その世に心苦し悲しとおぼしゝ程よりも、おはしけむ有樣御心におぼしけむ事ども只今のやうに見ゆ。所のさまおぼつかなき浦々磯の隱れなく書きあらはし給へり。さうの手に、かんなの所々に書きまぜてまほの委しき日記にはあらず。あはれなる歌などもまじれるたぐひゆかしう誰もことごとおぼさず。さまざまの御繪の興これに皆うつりはてゝ、あはれにおもしろし。よろづ皆おしゆづりて左かつになりぬ。夜明け方近くなる程に物いとあはれにおぼされて御かはらけなどまゐるついでに、昔の御物語ども出で來て、「いはけなき程より學問に心を入れて侍りしに少しもざえなどつきぬべくや御覽じけむ、院ののたまはせしやう、才學といふもの世にいと重くするものなればにやあらむ、いたう進みぬる人の命さいはひと並びぬるはいとかたきものになむ、しなたかく生れ、さらでも人に劣るまじき程にて

あながちにこの道な深く習ひそと、諫めさせ給ひてほんざいのかたがたの物敎へさせ給ひしに、拙きこともなくまたとり立てゝこの事と心得ることも侍りざりき。繪書くことのみをなむあやしくはかなきものからいかにしてかは心行くばかり書きて見るべきと思ふをりをり侍りしを、おぼえぬ山がつになりてよもの海の深き心を見しに更に思ひよらぬ隈なくいたられにしかど、筆の行くかぎりありて心よりは事ゆかずなむ思う給へられしを、ついでなく御覽ぜさすべきならねばかうすきずきしきやうなる後の聞えやあらむ」とみこに申し給へば「何のざえも心よりはなちて並ぶべきわざならねど道々にものゝ師あり、學び所あらむは事の深さ淺さは知らねどおのづからうつさむにあとありぬべし。筆とる道と碁うつことゝぞあやしうたましひの程見ゆるを、深きさらうなく見ゆるおれものもさるべきにて、書き打つたぐひも出て來れど、家の子の中には猶人にぬけぬる人の何事をも好み得けるとぞ見えたる。院の御まへにてみこたち內親王いづれかはさまざまとりどりのざえならはせ給はざりけむ。その中にもとり立てたる御心に入れて傳へうけとらせ給へるかひありて、もんざんをばさるものにはず、さらぬ事の中にはきん彈かせ給ふことなむいちのざえにて、次には横笛琵琶箏の琴をなむつぎつぎに習ひ給へると、うへもおぼしのたまはせき。世の人まか思ひ聞えさせたるを繪は猶筆のついでにすさびさせ給ふあだごとゝこそ思ひ給へしか。いとかうまさなきまで、古の墨かきの上手とも跡をくらうなしつべかめるはかへりてけしからぬわざなり」と、うち亂れ聞え給ひて、ゑひなきにや、院の御事聞え出でゞ打ちまほたれ給ひ

ぬ。』廿餘日の月さし出でゝこなたはまだきはやかならねど大方の空をかしきほどなるにふんの司の御琴めし出でゝ、權中納言和琴たまはり給ふ。さはいへど人にはまさりてかきたて給へり。みこさうの御琴、おとゞきん、琵琶は少將の命婦仕うまつる。うへ人の中にすぐれたるを召して、はうじたまはす。いみじう面白し。明けはつるまゝに花の色も人の御かたちどもゝほのかに見えて鳥の囀るほど心地ゆきめでたきあさぼらけなり。祿どもは、中宮の御方より賜はす。みこは御ぞ又重ねて賜はり給ふ。その頃の事にはこの繪の定めをし給ふ。「かの浦々の卷は中宮は侍はせ給へ」と聞えさせ給ひければ、これがはじめ又のこりの卷々ゆかしがらせ給へど、「今つぎつぎに」と聞えさせ給ふ。うへにも御心ゆかせ給ひておぼしめしたるを嬉しく見奉り給ふ。はかなき事につけてもかうもてなし聞え給へば、權中納言は猶おぼえをさるべきにやと心やましう思さるべかめり。上の御でゝろざしはもとよりおぼしまみにければ猶こまやかにおぼしたるさまを、人知れず見奉り給ひてぞ頼もしくさりともとおぼされける。さるべき節會どもにもこの御時よりと末の人の言ひ傳ふべき例をそへむとおぼし、私ざまのかゝるはかなき御遊も珍しきすぢにせさせ給ひていみじき盛の御世なり。おとゞぞ猶常なきものに世をおぼして今少しおとなびおはしますと見奉りて猶世を背きなむと深くおもほすべかめる。昔のためしを見聞くにも、齡足らでつかさ位高くのぼり世にぬけぬる人の長くはえ保たぬわざなりけり。この御世には身のほどおぼえ過ぎにけり。中頃なきになりて沈みたりしうれへに變りて今までもながらふるなり。今より後のさかえは猶命う

しろめたし。まづかに籠り居て後の世の事をつとめかつは齡をも延べむとおぼして、山里の長閑なるをまめてみ堂作らせ給ふ。佛經のいとなみ添へてせさせ給ふめるに、末の君たち思ふさまにかしづきいだして見むとおぼしめすにぞ、疾く捨て給はむことは難げなる。いかにおぼし置きつるにかといとまりがたむ。

松風

ひんがしの院つくり立てゝ、花ちる里と聞えしうつろはし給ふ。西の對渡殿などかけてまどころけいしなどあるべきさまにしおかせ給ふ。東の對は明石の御方とおぼしおきてたり。北の對は殊に廣く造らせ給ひて、かりにても哀とおぼして行く末かけて契り頼め給ひし人々集ひ住むべきさまにへだてへだてしつらはせ給へるしも懐しう見所ありてこまかなり。寢殿はふたげ給はず時々渡り給ふ御すみどころにしてさる方なる御しつらひどもしおかせ給へり。明石には御せうそこ絶えず。今は猶上り給ひぬべきとをばのたまへど、女は猶我が身の程を思ひ知るにゝこよなくやんごとなきさはの人々だになかなかさてかけはなれぬ御有樣のつれなきを見つゝ物思ひまさりぬべく聞くを、まして何ばかりの覺えなりとてかさし出てまじらはむ、この若君の御おもてぶせに數ならぬ身の程こそあらはれめ、たまさかにはひわたり給ふついでを待つことにて人わらへにはしたなき事いかにあらむと思ひ亂れてもま

たさりとてかゝる所にて生ひ出でかずまへられ給はざらむもいと哀なればひたすらにもえ恨み背かず。親たちもげにことわりと思ひ歎くになかなか心もつきはてぬ。昔母君の御おぼぢ、中務の宮と聞えけるがらうじ給ひける所、大ゐ河のわたりにありけるをその御のちはかばかしうあひつぐ人もなくて年比荒れ惑ふを思ひ出でゝ、かの時より傳はりて宿守のやうにてある人を呼び取りて語らふ。「世の中を今はと思ひはてゝかゝるすまひに沈みそめしかども末の世に思ひかけぬ事出できてなむ。更に都のすみか求むるを俄にまばゆき人中いとはしたなく、田舍びにける心地もしづかなるまじきをふるさ所尋ねてとなむ思ひよる。さるべき物はあげ渡さむ。すりなどしてかたのごと入住みぬべくはつくろひなされなむや」といふ。あづかり「この年比らうずる人ももの し給はず 怪しき藪になりて侍ればしもやにぞつくろひて宿り侍るを、この春の比より内のおほ殿の造らせ給ふ御堂近くて、かのわたりなむいと人げ騒しうなりにて侍る。いかめしき御堂ども建てゝ、多くの人なむ造りいとなみ侍るめる。靜なるほいならば其や違ひ侍らむ」。「何かそれもかの殿の御かげにかたかけてと思ふとありて、おのづからおひおひに内の事どもはまてむ。まづ急ぎて大方の事どもを物せよ」といふ。「自ららうする所に侍らねど又知り傳へ給ふ人もなければ、かごかなる習ひにて年頃かくろへ侍りつるなり。御さうの田はたけなどいふことの荒れ侍りしかば故民部の大輔の君に申し給はりて、さるべき物など奉りてなむらうじ作り侍るを」なんど、そのあたりのたくはへの事どもをあやふげに思ひて鬚がちにつなしにくき顔を鼻などうち赤めつゝはぢ

ぶきいへば、「更にその田などやうの事はこゝに知るまじ。唯年頃のやうに思ひてものせよ劵などはこゝになむあれどすべて世の中を捨てたる身にて年頃ともかくも尋ね知らぬをそのことも今委しくまたゝめむ」などいふにも、おほい殿のけはひをかくれば、頗はしくてその後物など多く受け取りてなむ急ぎつくりける。かやうに思ひよるらむとも知り給はでのぼらむ事を物うがるも心得ずおぼし、若君のさてつくづくと物し給ふを後の世に人の言ひ傳へむ、今ひとときは人わろきにやとおもほすに、造りはてゝぞ然々の所をなむ思ひ出でたると聞えさせける。人にまじらはむ事を苦しげにのみものするは、かく思ふなりけりと心得給ふ。口惜しからぬ心の用意の程かなとおぼしなりぬ。惟光の朝臣、例のまのぶる道はいつとなくいろひ仕うまつる人なれば遣してさるべきさまに此處彼處の用意などせさせ給ひけり。「あたりをかしうて海づらに通ひたる所のさまになむ侍りける」と聞ゆれば、さやうのすまひによしなからずはありぬべしとおぼす。造らせ給ふ御堂は大覺寺の南にあたりて瀧殿の心ばへなど劣らずおもしろき寺なり。これは川づらにえもいはぬ松かげに何のいたはりもなく建てたる寢殿のことそぎたるさまもおのづから山里の哀を見せたり。内のしつらひなどまでおぼしよる。親しき人々いみじう忍びてくだしつかはす。遁れ難くて今はと思ふに年經つる浦を離れなむこと哀に、入道の心ぼそくて一人とまらむことを思ひ亂れてよろづに悲し。すべてなどかく心づくしになり始めけむ身にかと露のかゝらぬ類ひうらやましく覺ゆ。親たちもかゝる御迎にて上るさいはひは年頃寢てもさめても願ひわたりし志のかな

ふといと嬉しけれどあひ見て過ぐさむいぶせさの堪へ難う悲しければ夜昼おぼゝれて同じ事をのみ「さらば若君をば見奉らでは侍るべきか」といふより外の事なく母君もいみじう哀なり。年頃だに同じいほりにも住まずかけ離れつればまして誰によりてかはかけとゞまらむ。唯あだにうち見る人の淺はかなる語らひにだにみなれそなれて別るゝ程はたゞならざめるをましてもて僻めたる頭つき心おきてこそたのもしげなけれど、又さる方にこれこそは世を限るべきすみかなめれと、ありはてぬ命を限に思ひて契りすぐし來つるを俄に行き離れなむも心細し。若き人々のいぶせう思ひ沈みつるは嬉しきものから見捨て難き濱のさまを又はえしもかへらじかしと寄する波にそへて袖ぬれがちなり。秋のころほひなれば物の哀れ取り重ねたる心地してその日とある曉秋風涼しくて蟲の音もとりあへぬに海の方を見出して居たるに、入道例の後夜より深う起きて鼻すゝりうちして行ひゐましたり。いみじうことといみすれど誰も誰もいと忍びがたし。若君はいともいとも美くしげに、よる光りけむ玉の心地して袖より外に放ち聞えざりつるを見馴れてまつはし給へる心ざまなどゆゝしきまでかく人に違へる身をいまいましく思ひながら、片時見奉らではいかでかすぐさむとすらむとつゝみあへず。

「行くさきをはるかに祈るわかれ路にたへぬは老の涙なりけり。いともゆゝしや」とておしのごひかくす。尼君、

「もろともに都はいできこのたびやひとり野中の道にまどはむ」とて泣き給ふさまいと

ことわりなり。こゝら契りかはしてつもりぬる年月の程を思へばかう浮きたる事を頼みて捨てし世にかへるも思へばはかなしやゝ。御かた、

「生きて又あひ見むことをいつとてかかぎりも知らぬ世をば頼まむ。送にだに」とせちにのたまへど、かたかたにつけてえさるまじきよしをいひつゝさすがに道のほどもいと後めたき氣色なり。「世の中を捨て始めしにかゝる人の國に思ひ下り侍りしことも唯君の御ためと思ふやうに明暮の御かしづきも心にかなふやうもやと思ひ給へ立ちしかど、身の拙かりけるきはの思ひ知らるゝ事多かりしかば、更に都に歸りてふるずらうのまづめる類にて、貧しき家の蓬葎もとの有樣あらたむる事もなきものから公私にをこがましき名をひろめて、親の御なきかげをはづかしめむことのいみじさになむ。やがて世を捨てつるかどでなりけりと人にも知られにしをその方につけてはよう思ひ放ちてけりと思ひ侍るに、君のやうやうおとなび給ひ物おもほし知るべきにそへてなどかう口惜しき世界にて錦をかくし聞ゆらむと心の闇はれまなく歎きわたり侍りしまゝに、佛神を頼み聞えてさりともかう拙き身に引かれて山がつのいほりにはまじり給はじと思ふ心一つを頼み侍りしに、思ひより難くて嬉しき事どもを見奉りそめてもなかなか身の程をとざまかうざまに悲しう歎き侍りつれど、若君のかう出でおはしましたる御宿世のたのもしさにかゝる渚に月日をすぐし給はむもいとかたじけなう契ことに覺え給へば、見奉らざらむ心惑ひはまづめ難けれどこの身は長く世を捨てし心侍りき。君だちは世を照し給ふべき光まるければ暫しかゝる山賤の心を

亂り給ふばかりの御契こそはありけめ。天に生るゝ人のあやしき二つの途に歸るらむ、一時に思ひなずらへて今日長く別れ奉りぬ。命つきぬと聞しめすとも、後の事おぼしいとなむな、さらぬ別れに御心動し給ふなゝど、言ひ放つものから煙ともならむ夕までは若君の御事をなむ六時のつとめにも猶心ぎたなくうちまぜ侍りぬべき」とてこれにぞうちひそみぬる。御車はあまたつゞけむも所せくかたへづゝ分けむも煩はしとて、御供の人々もあながちにかくろへ忍ぶれば船にて忍びやかにと定めたり。辰の時に船出ぢ給ふ。昔の人も哀といひける浦の朝霧隔たり行くまゝにいと物悲しくて、入道は心すみはつまじくあくがれて眺め居たり。こゝら年を經て今更に歸るも猶思ひつきせず、尼君は泣き給ふ。

「かのきしに心よりにし海士船のそむきしかたにこぎかへるかな」。御うた、

「いくかへり行きかふ秋をすぐしつゝうき木にのりてわれかへるらむ」。思ふ方の風にて限りける日違へず入り給ひぬ。人に見咎められじの心もあれば道の程も輕らかにぢなしたり。家のさまも面白うて年頃經つる海づらに覺えたれば所かへたる心地もせず、昔のこと思ひ出でられて哀なること多かり。作りそへたるらうなど故あるさまに水の流れもをかしうぢなしたり。まだこまやかなるにはあらねどすみつかばさてもありぬべし。親しきけいしに仰せ給ひて御まうけの事せさせ給ひけり。渡り給はむことはとかうおぼしたばかる程に日頃經ぬ。なかなか物思ひ續けられてすてし家居も戀しう徒然なればかの御形見のきんをかきならすをりのいみじう忍び難ければ、人離れたる方にうちとけて少し彈くに松風はした

なく響きあひたり。尼君物悲しげにてよりふし給へる、起きあがりて

「身をかへてひとりかへれる山里にきゝしに似たる松風ぞふく」。御かた、

「故里に見し世の友をこひわびて囀ることをたれかわくらむ」。かやうに物はかなくて明し暮すに、おとゞなかなかぢづ心なく思さるれば人めをもえ憚りあへ給はでわたり給ふを、をんな君にはかくなむとたしかに知らせ奉り給はざりけるを、例の聞きもやあはせ給ふとてせうそこ聞え給ふ。「桂に見るべき事侍るをいざや心にもあらで程經にけり。とぶらはむと言ひし人さへ、かのわたり近く來居て待つなれば心苦しくてなむ。嵯峨野の御堂にもかざりなき佛の御とぶらひすべければ二三日は侍りなむ」と聞え給ふ。桂の院といふ所俄に作らせ給ふと聞くはそこにする為給へるにやとおぼすに、心づきなければ「斧の柄さへ改め給はむ程や。待遠に」と心ゆかぬ御氣色なり。「例の比べ苦しき御心かな。いにしへの有樣名殘なしと世の人もいふなるものを」と何やかやと御心とり給ふ程に日たけぬ。忍びやかにぢぜんれうとときはまぜて御心づかひして渡り給ひぬ。たそがれ時に坐しつきたり。かりの御ぞにやつ給へりしだに世に知らぬ心地せしを、ましてさる御心してひきつくろひ給へる御直衣姿世になくなまめかしうまばゆき心地すれば思ひむせびつる心のやみも晴るゝやうなり。珍しう哀にて若君を見給ふもいかゞ淺くはおぼされむ。今まで隔てける年月だに淺ましく悔しきまでおぼす。おほい殿ばらの君を、美しげなりと世人もて騷ぐは猶時代によれば人の見なすなりけり。かくこそはすぐれたる人の山口はぢるかりけれとうち笑みたる顏の何心なき

が愛敬づき匂ひたるをいみじうらうたしとおぼす。めのとの下りし程は衰へたりしかたちねびまさりて月頃の御物語など馴れ聞ゆるを哀にさるまほやの傍に過ぐしつらむことをおぼしのたまふ。「こゝにもいと里離れて渡らむことも難きを猶かのほいある所にうつろひ給へ」とのたまへど「いとうひうひしき程すぐして」と聞ゆるもことわりなり。夜一夜よろづに契り語らひ明し給ふ。繕ふべき所々のあづかり、今加へたるけいしなどに仰せらる。桂の院に渡り給ふべしとありければ近きみさうの人々参り集りたりけるも皆尋ね参りたり。前栽どもの折れふしたるなどつくろはせ給ふ。「こゝかしこのたて石どもゝ皆轉びうせたるをなさけありてまなさばをかしかりぬべき所かな。かゝる所をわざとつくろふもあいなきわざなり。さても過ぐしはてねば立つ時物うく心とまる苦しかりき」などきし方のとゞものたまひ出でゝ泣きみ笑ひみうちとけ給へるいとめでたし。尼君のぞきて見奉るに老も忘れ物思ひもはるゝ心地してうち笑みぬ。東の渡殿の下より出づる水の心ばへつくろはせ給ふとていとなまめかしき袿姿うちとけ給へるをいとめでたう嬉しと見奉るに、閼伽の具などのあるを見給ふにおぼし出でゝ「尼君はこなたにか。いとまどけなき姿なりけりや」とて御直衣召し出でゝ奉る。几帳のもとにより給ひて「罪輕くおぼし立て給へる人の故は御おこなひのほど哀にこそ思ひなし聞ゆれ。いといたく思ひすまし給へりし御すみかを捨てゝうき世に歸り給へる志淺からず。又彼處にはいかにとまりて思ひおこせ給ふらむとさまざまになむ」といとなつかしうのたまふ。「捨て侍りし世を今さらに立ち歸り思ひ亂るゝを推しはからせ

給ひければ命ながさのまるしも思ひ給へ知られぬる」とうち泣きて「あら磯かげに心苦しう思ひ聞えさせ侍りし二葉の松も今は頼もしき御おひさき」といはひ聞えさするを「淺き根ざしゆゑやいかゞとかたがた心盡され侍る」など聞ゆるけはひよしなからねば昔物語に御子の住み給ひける有樣など語らせ給ふにつくろはれたる水の音なひかごとがましう聞ゆ。

「住み馴れし人はかへりてたどれども清水ぞ宿のあるじがほなる」。わざとはなくていひけつさまみやびかによしと聞き給ふ。

「いさらゐはは や・くのことも忘れじをもとのあるじや面がはりせる」。あはれとうち眺めて立ち給ふ。姿にほひ世に知らずとのみ思ひきこゆ。御寺に渡り給ひて月ごとの十四五日つごもりに行はるべき普賢講、阿彌陀、さかの念佛の三昧をばさるものにて又々加へ行はせ給ふべき事定め置かせ給ふ。堂のかざり佛の御具などめぐらし仰せらる。月の明きに歸り給ふ。ありし夜の事おぼし出でらるゝ折すぐさずかのきんの御ことさし出でたり。そこはかとなく物哀なるに、え忍び給はでかきならし給ふ。まだまらべも變らず彈きかへしそのをり今の心ちし給ふ。

「契りしにかはらぬことのまらべにて絶えぬ心のほどを知りきや」で女、

「かはらじと契りしことをたのみにて松のひゞきに音をそへしかな」と聞えかはしたるも似げなからぬこそは身に餘りたる有樣なめれ。こよなうねびまさりにけるかたちけはひえおもほしすつまじう若君はたつきもせずまもられ給ふ。いかにせまし。かくろへたるさま

にておひ出でむが心苦しう口惜しきを、二條院に渡して心の行くかぎりもてなさば後の覺えも罪免れなむかしとおもほせど又思はむ事いとほしくてえうち出で給はで涙ぐみて見給ふ。幼き心地に少し耻らひたりしがやうやううち解けて物いひ笑ひなどしてむつれ給ふを見るまゝにほひまさりてうつくし。抱きておはするさま見るかひありて宿世こよなしと見えたり。又の日は京へ歸らせ給ふべけれども、少し大殿籠り過ぐしてやがてこれより出で給ふべきを桂の院に人々多く參り集ひてこゝにも殿上人あまた參りたり。御さうぞくなどし給ひて「いとはしたなきわざかな。かく見顯はさるべき隈にもあらぬを」とてさわがしきに引かれて出で給ふ。心苦しければさりげなくもぎらはして立ちとまり給へる戸口にめのと若君抱きてさし出でたり、哀なる御氣色にかきなで給ひて「見てはいと苦しかりぬべきこそいとうちつけなれ。いかゞすべき。いと里遠しや」とのたまへば「遙に思ひ給へたりける年頃よりも今からの御もてなしの覺束なう侍らむは心づくしに」など聞ゆ。若君手をさし出でゝ立ち給へるを慕ひ給へばつゝ居給ひて「怪しう物思ひ絶えぬ身にこそありけれ。おばしにても苦しや。いづら。など諸共に出でゝはをしみ給はぬ、さらばこそ人心地もせめ」とのたまへばうち笑ひて、女君にかくなむと聞ゆ。なかなか物思ひ亂れて臥したればとみにしも動かれず、あまり上手めかしと思したり。人々も傍いたがれば、おぶおぶにねざり出でゝ几帳にはた隱れたるかたはらめいみじうなまめいてよしあり。たをやぎたるけはひみこたちといはむにもたりぬべし。かたびら引きやりてこまやかに語らひ出で給ふとてとばかりかへり見

給へるにさこそおづめつれ、見送り聞ゆ。いはむ方なき盛の御かたちなり。いたうそびやぎ給へりしが少しなりあふ程になり給ひにけり。御姿などかくてこそものしかりけれと御指貫の裾までなまめかしう愛敬のこぼれ出づるぞあながちなる見なしなるべき。かの解けたりしくらうどもかへりなりにけり。靫負の尉にて今年かうぶり得てけり。昔にあらため心ちよげにてみはかし取りにより來たり。人影を見つけて「さし方の物忘れし侍らねどかしこければえこそ。浦風覺え侍る曉の寢覺にも驚し聞えさすべきよすがだになくて」とけしきばむを「やへたつ山は更に島がくれにも劣らざりけるを松も昔のとたどられつるに忘れぬ人もものし給ひけるにたのもし」などいふ。こよなしや、我も思ひなきにしもあらざりしを などあさましう覺ゆれど「今殊更に」とうちけざやぎて參りぬ。いとよそほしくさし歩み給ふ程、かしかましう追ひ拂ひて御車のまりに頭の中將兵衛督のせ給ふ。「いとかるがるしき隱れが見顯されぬるこそねたう」といたうからがり給ふ。「よべの月に口惜しう御供に後れ侍りにけると思ひ給へられしかば、今朝霧をわけて參り侍る山の錦はまだしう侍りけり。野邊の色こそ盛に侍りけれ。なにがしの朝臣の小鷹にかゝづらひて立ち後れ侍りぬる、いかゞなりぬらむ」などいふ。今日は猶桂殿にとてそなたざまにおはしましぬ。俄なる御あるじまゐぎて鵜飼ども召したるに、海士のさへづりおぼし出でらる。野にとまりぬる君たち小鳥まるしばかりひきつけさせたる荻のえだなどつとにして參れり。おほみきあまたたびずんなかれて、川のわたり危げなれど、醉に紛れておはしましくらしつ。おのおのぜくなど作りわ

たして月華やかにさし出づる程に大御遊はじまりていと今めかし。ひきもの琵琶和琴ばかり笛ども上手のかぎりして折にあひたる調子吹きたつる程、川風吹き合せておもしろきに月高くさしあがり、萬の事すめる夜のやゝふくる程に殿上人四五人ばかりつれて參れり。上に侍ひけるを「御遊ありけるついでに今日は六日の御物忌あく日にて必ず參り給ふべきをいかなれば」と仰せられければこゝにかうとまらせ給ひにけるよし聞し召して御せうそこあるなりけり。御使は藏人の辨なりけり。

「月のすむ河のをちなる里なればかつらのかげはのどけかるらむ。うらやましう」とあり。畏まり聞えさせ給ふ。上の御遊よりも、猶所からのすごさゝへ添へたる物の音をめでゝまた醉ひ加はりぬ。こゝにはまうけの物もさぶらはざりければ大井に「わざとならぬまうけのものや」と言ひ遣したり。とりあへたるに從ひて參らせたり。絹櫃ふたかけにてあるを御使の辨はとくかへり參れば女のさうぞくかづけ給ふ。

「久かたのひかりに近き名のみしてあさゆふきりも晴れぬ山里」。行幸まち聞え給ふ御心ばへなるべし。「中に生ひたる」とうちずんじ給ふついでに、かの淡路島をおぼし出でゝ躬恒がところからかもとおぼめきけむことなどのたまひ出でたるに、物哀なるゑひなきどもあるべし。

「めぐりきて手にとるばかりさやけさや淡路の島のあはと見し月」。頭中將、

「うき雲にまばしまがひし月影のすみはつるよゝのどけかるべき」。右大辨すこしおとな

びて故院の御時にもむつましう仕うまつりなれし人なりけり。

「雲の上のすみかをすてゝ夜はの月いづれの谷にかげかくしけむ」。心々にあまたあめれどうるさくてなむ。けぢかううちまづまりたる御物語少しうちみだれて、千年も見聞かまほしき御有樣なれば、斧の柄も朽ちぬべけれど今日さへはとて急ぎ歸り給ふ。物どもまゝなるにかづきて霧の絶間に立ちまじりたるも前栽の花に見えまがひたる色あひなど殊にめでたし。近衛づかさの名高き舍人、物のふしどもなどさぶらふに、さうざうしければその駒などゝ亂れ遊びてぬぎかけ給ふ色々、秋の錦を風の吹きおほふかと見ゆ。のゝしりて歸らせ給ふ響を大井には物隔てゝ聞きて名殘さびしう詠め給ふ。御せうこそをだにせてとおとゞも御心にかゝれり。殿におはしてとばかりうちやすみ給ふ。山里の御物語など聞え給ふ。「暇聞えし程過ぎつればいと苦しうこそ。このすきものどもの尋ね來ていと痛うまゝひとゞめしにひかされて今朝はいとなやまし」とて大殿ごもれり。例の心とけず見え給へど見知らぬやうにて、「なずらひならぬ程をおぼしくらぶるもわろきわざなめり。我はわれと思ひなし給へ」と敎へ聞え給ふ。暮れかゝる程にうちに參り給ふにひきそばめて急ぎ書き給ふはかしこへなめり。そばめこまやかに見ゆ。うちさゞめきてつかはすを御達などにくみ聞ゆ。その夜は內にも侍ひ給ふべけれどとけざりつる御氣色とりに夜更けぬれどまかて給ひぬ。ありつる御かへりもて參れり。えひき隱し給はで御覽ず。殊ににくかるべきふしも見えねば「これやりかくし給へ。むつかしやかゝるものゝちらむも、今はつきなき程になりにけり」とて御脇息

により居給ひて、御心のうちにはいと哀に戀しうおぼしやらるれば火をうちながめて殊に物ものたまはず。文はひろごりながらあれどをんな君見給はぬやうなるを「せめて見隱し給ふ御まじりこそ煩はしけれ」とてうち笑み給へる御愛敬所せきまでこぼれぬべし。さしより給ひて「誠はらうたげなるものを見しかば契淺くも見えぬをさりとて物めかさむ程もはじかり多かるに思ひなむわづらひぬる。同じ心に思ひめぐらして御心に思ひ定め給へ。いかじすべき。こゝにてはぐゝみ給ひてむや。ひるのこが齡にもなりにけるを罪なささまなるも思ひすてがたうこそ。いはけなげなる下つかたも紛はさむなど思ふを、目ざましと思さずはひきゆひ給へかし」と聞え給ふ。「思はずにのみとりなし給ふ御心のへだてをせめて見知らずうらなくやはとてこそ、いはけなからむ御心にはいとようかなひぬべくなむいかに美しき程に」とて少しうち笑み給ひぬ。ちごをわりなうらうたきものにし給ふ御心なれば、えていだきかしづかばやとおぼす。いかにせまし、迎へやせましとおぼし亂る。渡り給ふことといとかたし。嵯峨野の御堂の念佛など待ち出でゞ、月にこたびばかりの御契なめり。年のわたりには立ちまさりぬべかめるを、及びなきことゝ思へども猶いかゞものおもはしからぬ。

澪雲

冬になり行くまゝに、河づらのすまひいとゞ心ぼそさまさりて、うはの空なる心地のみしつ

ゝ明し暮すを、君も「猶かくてはえすぐさじ。かの近き所に思ひ立ちね」と勸め給へど、つらき所多く試みはてむも殘りなき心ちすべきをいかにいひてかなどいふやうに思ひ亂れたり。「さらばこの若君をかくてのみはびんなきことなり。思ふ心あればかたじけなし。對に聞き置きて常にゆかしがるをゝばし見ならはせて袴着のことなども人知れぬさまならずゝなさむとなむ思ふ」とまめやかに語ひ給ふ。さおぼすらむと思ひ渡る事なればいとゞ胸つぶれぬ。「改めてやむごとなき方にもてなされ給ふとも人の漏り聞かむことはなかなかにやつくろひ難くおぼされむ」とて放ち難く思ひたり。「ことわりにもあれど、うしろ安からぬ方にやなどはな疑ひそ。かしこには年經ぬれどかゝる人もなきがさうざうしく覺ゆるまゝにさきの齋宮のおとなび物し給ふをだにこそあながちにあつかひ聞ゆめればましてかく惡み難げなめる程をおろかには思ひ放つまじき心ばへになむ」とをんな君の御有樣の思ふやうなる事も語り給ふ。げに古はいかばかりの事に定り給ふべきにかとつてにもほの聞えし御心の名殘なくゝづまり給へるはおぼろけの御宿世にもあらず。人の御ありさまもこゝらの御中にすぐれ給へるにこそはと思ひやられて、數ならぬ人のならび聞ゆべき覺えにもあらぬを、さすがに立ち出でゝ人も目ざましとおぼすことやあらむ、我が身はとてもかくても同じ事、おひさき遠き人の御上も、遂にはかの御心にかゝるべきにこそあめれ。さりとならばげにかう何心なき程にや讓り聞えましと思ふ。又手を放ちてうしろめたからむと徒然も慰む方なくてはいかゞ明し暮すべからむ。何につけてかたまさかの御立ちよりもあらむなどさまざ

ま思ひ亂るゝにも身の憂き事かぎりなし。尼君思ひやり深き人にて、「あじきなし。見奉らざらむことはいと胸いたかりぬべけれど遂にこの御ために よかるべからむ事をこそ思はめ。淺くおぼして のたまふ事にはあらじ。たゞうち頼み聞えて渡し奉り給ひてよ。母方からこそ、帝の御子もきさはきにおはすめれ。このおとゞの君の世に二つなき御有樣ながら世に仕へ給へば故大納言の今ひときざみなり劣り給ひて更衣腹といはれ給ひしけぢめにこそおはすめれ。ましてたゞ人はなずらふべき事にもあらず。又みこだち大臣の御腹といへど猶さし向ひたるおとりの所には人も思ひおとし親の御もてなしも えひとしからぬものなり。ましてこれはやむごとなき御方々にかゝる人出でものし給はゞこよなくけたれ給ひなむ。ほどほどにつけて親にもひとふしもてかしづかれぬる人こそやがて貶しめられぬはじめとはなれ。御袴着のほども、いみじき心をつくすともかゝる深山隱にては何のはえかあらむ。唯任せ聞え給ひてもてなし給はむ有樣をも聞き給へ」と敎ふ。「さかしき人の心のうらどもにも物問はせなどするにも猶渡り給ひてはまさるべし」とのみいへば思ひよわりにたり。殿もしかおぼしながら思はむ所のいとほしさに强ひてえのたまはで「御袴着の事いかやうにか」とのたまへる、御返りに「萬のかひなき身にたぐへ聞えてはげにおひさきもいとほしかるべく覺え侍るを、たちまじりていかに人笑へにや」と聞えたるをいと哀におぼす。日など取らせ給ひて忍びやかにさるべき事などのたまひおきてさせ給ふ。放ち聞えさせむことは猶いと哀に覺ゆれど君の御ためによかるべき事をこそはと念ず。めのとをもひき別れなむこと

明暮の物おもはしさつれづれをも打ち語らひて慰めならひつるにいとゞたつぎなき事をさへとりそへいみじう覺ゆべきこと」と君も泣く。めのとも「さるべきにや覺えぬさまにて見奉りそめて年比の御心ばへの忘れ難う戀しう覺え給ふべきをうちたえ聞ゆることはよも侍らじ。終にはと頼みながら暫しにてもよそよそに思の外のまじらひし侍らむが、安からずも侍るべきかな」など、うち泣きつゝすぐす程に十二月にもなりぬ。雪霰がちに心細さまさりて、怪しくさまざまに物思ふべかりける身かなとうち歎きて常よりもこの君を撫でつくろひつゝ居たり。雪かきくらし降り積るあしたさし方行くさきの事殘らず思ひつゞけて例はことにはしぢかなるいでゐなどもせぬを、みぎはの氷など見やりて白ききぬどものなよゝかなるあまた着てながめたるやうだい頭つきうしろてなど、かぎりなき人と聞ゆともかうこそおはすらめと見ゆ。落つる涙をかいはらひて「かやうならむ日ましていかにおぼつかなからむ」とらうたげにうちなげきて、

「雪ふかき深山のみちははれずともなほふみかよへ跡たえずして」とのたまへばめのとうち泣きて、

「ゆきまなきよしの、山を尋ねてもこゝろの通ふ跡たえめやは」といひ慰む。この雪少し解けて渡り給へり。例は待ち聞ゆるにさならむと思ふ事により胸うちつぶれてひとやりならず覺ゆ。我が心にこそあらめ、いなび聞えむを、きひてやは、あぢきなと覺ゆれどかろかろしきやうなりとせめて思ひかへす。いと美しげにて前に居給へるを見給ふにおろかには思

ひ難かりける人の宿世かなとおもほす。この春よりおぼす御ぐし尼そぎの程にてゆらゆらとめでたくつらつきまみのかをれる程などいへばさらなり。よその物に思ひやらむ程の心の闇推しはかり給ふにいと心苦しければうちかへしのたまひ明す。「何かかく口惜しき身の程ならずだにもてなし給はゞ」と聞ゆるものから念じあへずうちなくけはひ哀なり。姫君は何心もなくて、御車に乗らむことを急ぎ給ふ。寄せたる所に、母君みづから抱き出で給へり。かたことの聲はいとうつくしうて、袖をとらへて乗り給へと引くもいみじうおぼえて、

「末とほき二葉の松にひきわかれいつか木だかきかげを見るべき」。えもいひやらずいみじう泣けば、さりや、あなくるしとおぼして

「おひそめし根も深ければたけくまの松にこまつのちよをならべむ。長閑にを」と慰め給ふ。さることゝは思ひまづむれどえなむ堪へざりける。乳母少將とてあてやかなる人ばかりみはかし、あまがつやうの物取りてのる。人だまひによろしき若人わらはなど乗せて御送にまゐらす。道すがらとまりつる人の心苦しさをいかに罪やうらむとおぼす。暗うおはし着きて御車よするより花やかにけはひ殊なるを田舎びたる心地どもははしたなくてやまじらはむと思ひつれど、西おもてを殊にまつらはせ給ひて小き御調度ども美しげに整へさせ給へり。めのとの局には西の渡殿の北に當れるをせさせ給へり。若君は道にて寝給ひにけり。抱きおろされて泣きなどはまゐ給はず。こなたにて御くだものまゐりなどまゐ給へどやうやう見廻らして母君の見えぬを求めてらうたげにうちひそみ給へば乳母召し出でゝ慰めまぎらはし聞え給ふ。山里のつれづれましていかにとおぼしやるはいとほしけれど明暮おぼすさまにかしづきつゝ見給ふは物あひたる心地し給ふらむ、いかにぞや、人の思ふべきさまこそとはこのわたりに出でおはせでと口をしく おぼさる。まばしは人々もとめて泣きなどまゐ給ひしかど大方心安くをかしき心ざまなれば上にいとよくつきむつび聞え給へればいみじう美くしき物得たりと覺しけり。ことごとなく抱きあつかひ翫び聞え給ひて乳母もおのづから近う仕うまつりなれにけり。又やんごとなき人の、ちある添へて參り給ふ。御袴着は何ばかりわざとおぼし急ぐ事はなけれど氣色となり。御まつらひひゝな遊の心地してをかしう見ゆ。參り給へるまらうどゞも唯明暮のけぢめしなければあながちに目もたゝざりき。唯姫君のたすきひきゆひ給へる胸つきぞ美しげさそひて見え給へる。大井にはつきせず戀しきにも、身のをこたりを歎きそへたり。さこそいひしが、尼君もいとゞ涙もろなれどかくもてなしかしづかれ給ふを聞くは嬉しかりけり。何事をかなかなかとぶらひ聞え給はむ、唯御方の人々に、乳母より初めて世になき色あひを思ひ急ぎてぞ送り聞え給ひける。待遠ならむもいとゞされば よと思ばむにいとほしければ年の内に忍びて渡り給へり。いとゞ淋しきすまひに明暮のかしづきぐさをさへ離れ聞えて思ふらむとの心苦しければ御文なども絶間なく遣す。女君も今は殊にゑじ聞え給はず美しき人に罪免し聞え給へり。年もかへりぬ。うらゝかなる空に思ふ事なき御有樣はいとゞめでたく磨き改めたる御よそひに參り集ひ給ふめる人のおとなしき程のは七日の御悦などし給ふ。ひきつれ給へり。若やかなるは何ともなく心

地よげに見えたり。つぎつぎの人も心の中には思ふ事もやあらむ。うはべはほこりかに見ゆるころほひなりかし。ひんがしの院の臺の御方も有樣は好ましう、あらまほしきさまに侍ふ人々わらはべの姿などうちとけず心づかひしつゝ過ぐし給ふに、近きまるしはこよなくて長閑なる御暇のひまなどにはふとはひ渡りなどし給へどよる立ちとまりなどやうにわざとは見え給はず。唯御心ざまのおいらかにこめきて、かばかりの宿世なりける身にこそあらめと思ひなしつゝありがたきまでうしろやすく長閑に物し給へば、をりふしの御心おきてなども、こなたの御有樣に劣るけぢめこよなからずもてなし給うてあなづり聞ゆべうはあらねばおなじごと人も參り仕う奉りて、べたうけいしどもゝ事怠らず、なかなか亂れたる所なくめやすき御有樣なり。山里の徒然をも絶えずおぼしやれば公私物騒しき程過ぐして渡り給ふとて常より殊にうちけさうじ給ひて櫻の御直衣にえならぬ御ぞひき重ねてたきしめさうぞき給ひてまかり申しを給ふさまくまなき夕日にいとゞしく清らに見え給ふを、をんな君たゞならず見奉り送り聞え給ふ。姫君はいはけなく御指貫の裾にかゝりて慕ひ聞え給ふほどにとにも出で給ひぬべければ立ちとまりていと哀とおぼしたり。こしらへ置きて「あすかへりこむ」と口ずさびて出で給ふに、渡殿の口に待ちかけて中將の君して聞え給ふ。

「船とむるをち方人のなくばこそあすかへりこむせなとまち見め」。いたうなれて聞ゆれば、いとにほひやかにほゝゑみて、

「行きて見てあすもさねこむなかなにをちかた人は心おくとも」。何事とも聞きわかでされありき給ふ人を上は美しと見給へば遠方人のめざましきもこよなくおぼしゆるされにたり。いかに思ひおこすらむと我にていみじう戀しかりぬべきさまをとうちまもりつゝ懷に入れて美しげなる御ちをくゝめ給ひつゝ戯ぶれ居給へる御さま見所多かり。お前なる人々は「などか同じくは、いでや」など語らひあへり。彼所にはいとのどやかに心ばせあるけはひに住みなして家の有樣もやうはなれて珍しきにみづからのけはひなどは見る度ごとにやんごとなき人々に劣るけぢめこよなからず。かたち用意あらまほしうねびまさり行く。唯よの常のおぼえにかきまぎれたらばさる類ひなくやはと思ふべきを世に似ぬひがものなる親の聞えなどこそ苦しけれ、人の程などはさてもあべきものをなどおぼす。はつかに飽かぬ程にのみあればにや心のどかならず、立ちかへり給ふも苦しくて夢のわたりの浮橋かとのみうち歎かれて箏の琴のあるを引き寄せて、かの明石にて小夜ふけたりしねも例のおぼし出でらるれば、琵琶をわりなくせめ給へば、少しかき合せたる、いかでかうのみひきすぐしけむとおぼさる。若君の御ことなどこまやかに語り給ひつゝおはす。こゝはかゝる所なれどかやうに立ちとまり給ふ折々あればはかなきくだものこはいひばかりは聞しめす時もあり近き御寺桂殿などにおはしまぎらはしつゝいとまほには亂れ給はねど又いとけざやかにはしたなくおしなべてのさまにはもてなし給はぬなどこそはいと覺えことには見ゆめれ。女もかゝる御心の程を見知り聞えて過ぎたりと覺すばかりの事はまいでず。又いたくひげせずなどして御心おきてにもて違ふことなくいとめやすくぞありける。おぼろげにやんごとな

き所にてだに、かばかりもうち解け給ふことなくけだかき御もてなしを聞き置きたれば近き程にまじらひてはなかなかいとめなれて人あなづられなる事どもぞあらまし、たまさかにてかやうにふりはへ給へるこそたけき心地すれと思ふべし。明石にもさこそいひしか。この御心おきてありさまをゆかしがりておぼつかなからず人は通はしつゝ胸つぶるゝこともあり又おもだゝしく嬉しと思ふことも多くなむありける。』その比おほきおとゞうせ給ひぬ。世のおもしとおはしつる人なればおほやけにもおぼし歎く。暫し籠り給へりしほどをだに天の下のさわぎなりしかばまして悲しと思ふ人多かり。源氏のおとゞもいと口惜しう萬の事おし讓りきこえてこそ暇もありつるを心細く事繁くもおぼされて歎きおはす。帝は御年よりはこよなうおとなおとなしうねびさせ給ひて世のまつりごとも後めたく思ひ聞え給ふべきにはあらねども又とりたてゝ御後見き給ふべき人もなきを誰に讓りてかは靜なる御ほいもかなはむとおぼすにいと飽かず口をし。後の御わざなどにも御子どもうまごに過ぎてなむこまやかにとぶらひ扱ひ聞え給ひける。その年大方世の中さわがしくておほやけざまに物のさとし繁く長閑ならで、天つ空にも例に違へる月日星の光見え、雲のたゝずまひありとのみ世の人驚く事多くて、みちみちのかんがへ文ども奉れるにも怪しう世になべてならぬ事どもまじりたり。うちのおとゞのみなむ、御心の中に煩はしく覺し知らるゝ事ありける。入道ささいの宮、春の始より惱み渡らせ給ひて三月にはいと重くならせ給ひぬれば行幸などあり。院に別れ奉らせ給ひし程はいといはけなくて物深くもおぼされざりしをいみじ

うおぼし歎きたる御氣色なれば宮もいと悲しく思しめさる。「今年は必ず遁るまじき年と思う給へつれどおどろおどろしき心地にも侍らざりつれば、命の限りぞ顔に侍らむも人やうたてことごとしう思はむと憚りてなむ功德の事などもわざと例よりも取り別きてしも侍らずなりにける。參りて心のどかに昔の御物語もなど思ひ給へながら、うつしざまなる折少なく侍りて口惜しういぶせくて過ぎ侍りぬること」といと弱げに聞え給ふ。三十七にぞおはしましける。されどいと若く盛におはしますさまを惜しく悲しと見奉らせ給ふ。愼ませ給ふべき御年なるに、はればれしからで月頃過ぎさせ給ふことだに歎きわたり侍りつるに、御つゝしみなどをも、常よりも異にせさせ給はざりけることゝいみじうおぼしめしたり。たゞこの頃ぞおどろきてよろづの事せさせ給ふ。月頃は常の御惱とのみうちたゆみたりつるを、源氏のおとゞも深くおぼし入りたり。限あれば程なく還らせ給ふも悲しきことおほかり。宮いと苦しうてはかばかしう物も聞えさせ給はず。御心の中におぼしつゞくるに高き宿世世のさかえも並ぶ人なく心の中にあかず思ふことも人にまさりける身とおぼし知らる。上の夢の中にもかゝる事の心を知らせ給はぬをさすがに心苦しう見奉らせ給ひてこれのみぞ後めたくむすぼゝれたることにおぼし置かるべき心地し給ひける。大臣はおほやけがたざまにてもかくやんごとなき人のかぎりうち續き失せ給ひなむことを人知れずおぼし歎く。人知れぬ哀はた限りなくて御いのりなどおぼしよらぬことなし。年頃思し絶えたりつるすぢさへ今一度聞えずなりぬるがいみじくおぼさるれば近き御几帳のもとによりて御有樣なども

さるべき人々に問ひ聞き給へば親しきかぎり侍ひてこまかに聞ゆ。月頃惱ませ給へる御心ちに御おこなひを時のまもたゆませ給はずせさせ給ふつもりのいとゞいたうくづほれさせ給へるにこの頃となりては柑子などをだに觸れさせ給はずなりにたれば頼み所なくならせ給ひにたる事と歎く人々おほかり。「院の御遺言にかなひて、内の御後見仕うまつり給ふ事年頃思ひ知り侍る事多かれど、何につけてかはその心よせ殊なるさまをも漏し聞えむとのみ、長閑に思ひ侍りけるを、今なむ哀に口惜しく」とほのかにのたまはするもほのぼの聞ゆるに御いらへも聞えやり給はず泣き給ふさまいとみじなどがうしも心弱きさまにと人めをおぼしかへせど古へよりの御有樣を大方の世につけてもあたらしく惜しき人のさまを心にかなふわざならねばかけとゞめ聞えむ方なくいふかひなくおぼさるゝ事限なし。「はかばかしからぬ身ながらも、昔より御後見仕うまつるべきことを心の至るかぎりはおろかならず思ひ給ふるにおほきおとゞのかくれ給ひぬるをだに世の中心あわたゞしく思ひ給へらるゝに又かくおはしませば よろづに心亂れ侍りて世に侍らむことも殘なき心地なむし侍る」と聞え給ふ程に燈火などの消え入るやうにてはて給ひぬればいふかひなく悲しき事をおぼしなげく。かしこき御身の程と聞ゆる中にも御心ばへなどの世のためにも普く哀におはしまして、がうけにことよせて人の愁とあるとなどもおのづからうちまじるを聊もさやうなる事のみだれなく、人の仕うまつることをも世のくるしびとあるべき事をばとゞめ給ふ。功德の方とてもすゝむるにより給ひて、いかめしう珍しう為給ふ人など昔のさかしき世

にも皆ありけるを、これはさやうなる事なく唯もとよりのたから物、え給ふべきつかさ、かうぶり、み封のものゝさるべきかぎりして、誠に心深き事どものかぎりをまおかせ給へれば何とわくまじき山伏などまで惜み聞ゆ。をさめ奉るにも世の中ひゞきて悲しと思はぬ人なし。殿上人などなべてひとつ色に黑みわたりて物のはえなき春の暮なり。二條院の御まへの櫻を御覽じても花の宴の折など思し出づ。「今年ばかりは」とひとりごち給ひて人の見咎めつべければ御念ず堂に籠り居給ひて日一日泣き暮し給ふ。夕日華やかにさして山際の木ずえあらはなるに雲の薄く渡れるがにびいろなるを何事も御目とゞまらぬ頃なれどいと物哀におぼさる。

「入日さす峯にたなびくうす雲はものおもふ袖にいろやまがへる」。人聞かぬ所なればかひなし。御わざなども過ぎて事どもまづまりて、帝物心ぼそく思したり。この入道の宮の御母后の御世より傳りて、御祈の師にて侍ひける僧都、故宮にもいとやんごとなく親しきものにおぼしたりしをおぼやけにも重き御ぎおぼえにていかめしき御ぐわんども多くたてゝ世にかしこき聖なりける。年七十ばかりにて今は終のおこなひをせむとて籠りたるが、宮の御事によりて出でたるをうちより召しありて常にさぶらはせ給ふ。この比は猶もとの如く參りさぶらはるべきよし大臣も勸めのたまへば「今は夜居などいと堪へ難う覺え侍れど、仰言のかしこきによりふるき御志をそへて」とてさぶらふに、靜なる曉に人も近く侍はずあるはまかでなどしぬる程に古代にうちまはぶきつゝ世の中の事ども奏し給ふ序に「いと奏し難く

てかへりては罪にもや能りあたらむと思ひ給へ憚る事多かれど、ものしめざれぬに罪重くて天のまなこ恐しく思う給へらるゝことを心にむせび侍りつゝ命終り侍りなば何のやくかは侍らむ。佛も心ぎたなしとや思しめさむ」とばかり奏しさしてえうち出でぬことあり。うへ何事ならむ、この世に怨殘るべく思ふことやあらむ、法師は聖といへどもあるまじき横さまのそねみ深くうたてあなるものをとおぼして「いはけなかりし時より隔て思ふことなきを、そこにはかく忍び殘されたる事ありけるをなむつらく思ひぬる」とのたまはすれば「あなかしこ、更に佛のいさめ守り給ふ眞言の深き道をだに隱し留むるとなく廣め仕うまつり侍り。まして心にくまあること何事にか侍らむ。これはきし方行くさきの大事と侍ることを、過ぎおはしましにし院ささいの宮、只今世をまつりごち給ふおとゞの御ためすべてかへりて善からぬ事にやもり出て侍らむ。かゝるおい法師の身にはたとひ憂へ侍りとも何の悔か侍らむ。佛天の告げあるによりて奏し侍るなり。我が君はらまれおはしましたりし時より故宮の深く思し歎く事ありて御祈仕うまつらせ給ふ故なむ侍りし。委しく法師の心にえ悟り侍らず。事の違ひめありておとゞ横さまの罪にあたり給ひし時、いよいよおぢ思しめして重ねて御祈ども承り侍りしをおとゞも聞しめしてなむ又更に事加へ仰せられて御位に即きおはしましゝまで仕うまつる事ども侍りし。その承りしさま」とて委しく奏するを聞し召すに、あさましう珍らかにて恐しうも悲しうもさまざまに御心亂れけり。とばかり御いらへもなければ僧都進み奏しつるをびんなく思しめすにやとわづらはしう思ひてやをら畏まりてまか

づるを召しとゞめて「心に知らで過ぎなましかば、後の世までの咎めあるべかりけるとを今まで忍びとめられたりけるをなむ、却りて後めたき心なりと思ひぬる。又この事を知りて漏し傳ふる類ひやあらむ」とのたまはす。「更になにがしと王命婦とより外の人この事の氣色見たる侍らず、さるによりなむいと恐しう侍る、天變頻にさとし世の中靜ならぬはこのけなり。いとさなく物の心ぢろしめすまじかりつる程こそ侍りつれ。やうやう御齡足りおはしまして何事も辨へさせ給ふべき時に至りてとがをもぢめすなり。よろづの事親の御世より始まるにこそ侍るなれ。何の罪ともぢろしめさぬが恐しきにより、思ひ給へ消ちてしことを更に心より出し侍りぬること」となくなく聞ゆるほどに明けはてぬればまかでぬ。上は夢のやうにいみじき事を聞し召していろいろにおぼし亂れさせ給ふ。故院の御ためもうしろめたく、おとゞのかくたゞ人にて世に仕へ給ふも哀にかたじけなかりける事、かたがた覺し惱みて日たくるまで出でさせ給はねばかくなむと聞き給ひておとゞも驚きて參り給へるを御覽ずるにつけても いとゞ忍び難く思しめされて御涙のこぼれさせ給ひぬるを、大方故宮の御事をひるよなく思しめしたる頃なればなめりと見奉り給ふ。その日式部卿の御子うせ給ひぬるよし奏するに、いよいよ世の中の騷しさことを歎きおぼしたり。かゝる頃なればおとゞは里にもえまかで給はでつと侍ひ給ふ。ものめやかなる御物語のついでに「世はつきぬるにやあらむ、物心ぼそく例ならぬ心地のみなむするを、天の下もかく長閑ならぬに萬あわたゞしくなむ。故宮のおぼさむ所によりてこそよのなかのことも思ひ憚りつれ。今は心安きさまに

ても過ぐさまほしくなむ」と語らひ聞え給ふ。「いとあるまじき御事なり。世の靜ならぬ事は必ず政の直くゆがめるにもより侍らず。さかしき世にしもなむ善からぬ事どもゝ侍りける。聖の帝の世にも横ざまの亂れ出で來ること唐土にも侍りける。我が國にもさなむ侍る。ましてことわりの齡どもの、時至りぬるを思し歎くべき事にも侍らず」などすべて多くのことゞもを聞え給ふ。片端まねぶもいと傍いたしや。常よりも黑き御よそひにやつしたまへる御かたち違ふ所なし。上も年頃御鏡にもおぼしよる事なれど聞し召しゝことの後は又こまかに見奉り給ひつゝ、殊にいとゞ哀に思しめさるれば、いかでこの事をかすめ聞えばやと思せどさすがにはしたなくも思しぬべき事なれば、若き御心地につゝましくふともえうち出で聞え給はぬ程は唯大方の事どもを常より殊に懷しう聞えさせ給ひ、うちかしこまり給へる樣にていと御氣色ことなるを、かしこき人の御目には怪しと見奉り給へど、いとかくさださだと聞しめしたらむとはおぼさゞりけり。上は王命婦に委しき事問はまほしう思しめせど今更にあか忍び給ひけむ事知りにけりとかの人にも思はれじ。唯おとゞにいかでほのめかし問ひ聞えてささざきかゝる事の例はありけむやと聞かむとぞおぼせど更に序もなければいよいよ御學問をせさせ給ひつゝさまざま文どもを御覽ずるに唐土には顯はれても忍びても亂りがはしき事いと多かりけり。日の本には更に御覽じ得る所なし。たとひあらむにてもかやうに忍びたらむ事をばいかでか傳へ知るやうのあらむとする。一世の源氏又納言大臣になりて後に更にみこにもなり位にもつき給へるもあまたの例ありけり。人がらのかしこき

にことよせてさもや讓り聞えましなどよろづにぞおぼしける。秋の司召に太政大臣になり給ふべき事うちうちに定め申し給ふついでになむ帝おぼしよするすぢの事漏し聞え給ひけるをおとゞいとまばゆく恐しうおぼして更にあるまじきよしを申し返し給ふ。故院の御志あまたの御子たちの御中に取りわきて思しめしながら位を讓らせ給はむ事をおぼしめしよらずなりにけり。何かその御心改めて及ばぬきはにはのぼり侍らむ、唯もとの御掟のまゝにおほやけに仕うまつりて今少しの齡かさなり侍りなば長閑なる行ひに籠り侍りなむと思ひ給ふる」と常の御言の葉にかはらず奏し給へば、いと口惜しうなむおぼしける。太政大臣になり給ふべき定めあれど暫しとおぼす所ありて唯御位そひてうしくるまゆるされて參りまかでし給ふを、帝飽かず辱きものに思ひ聞え給ひて猶みこになり給ふべきよしをおぼしのたまはすれど、世の中の御後見し給ふべき人なし。權中納言大納言になりて右大將かけ給へるを、今ひときはあがりなむに何事も讓りてむ。さて後にともかくも靜なるさまにとぞおぼしける。猶おぼし廻らすに故宮の御ためにもいとほしう又上のかく思し惱めるを見奉り給ふもかたじけなきにたれかゝる事を漏し奏しけむと怪しうおぼさる。命婦は御匣殿のかはりたる所にうつりて曹司賜はりて參りたり。おとゞたいめんし給ひて「この事をもし物のついでに露ばかりにても漏し奏し給ふ事やありし」とあないし給へど「更にかけても聞し召さむことをいみじき事におぼしめして、かつは罪うるとにやとうへの御ためを猶おぼしめし歎きたりし」と聞ゆるにも、一方ならず心深くおはせし御有樣などつきせず戀ひ聞えさせ給

ふ。『齋宮の女御はおぼしゝもまゐるき御後見にてやんごとなき御おぼえなり。御用意有様なども思ふさまにあらまほしう見え給へれば辱なきものにもてかしづき聞え給へり。秋のころ二條院にまかで給へり。寢殿の御まつらひいとゞかゞやくばかりし給ひて、今はむげの親ざまにもてなしてあつかひ聞え給ふ。秋の雨いと静に降りて、おまへの前栽のいろいろ亂れたる露のまげさに古への事どもかき續けおぼし出でられて御袖もぬれつゝ女御の御方にわたり給へり。こまやかなるにび色の御直衣姿にて世の中の騒しきなどことつけ給ひて、やがて御精進なればずゞひきかくして御さまよくもてなし給へる、つきせずなまめかしき御有様にてみすの内に入り給ひぬ。御几帳ばかりを隔てゝみづから聞え給ふ。「前栽どもこそ殘りなくひもとき侍りにけれ。いと物すさまじき年なるを心やりて時知り顔なるも哀にこそ」とて柱により居給へる夕ばえいとめでたし。昔の御事どもかの野の宮にたち煩ひし曙などを聞え出で給ふ。いと物哀とおぼしたり。宮もかくればとにや少しなき給ふけはひいとらうたげにて、うちみじろき給ふ程もあさましくやはらかになまめきておはすべかめる。見奉らぬこそ口惜しけれと胸うちつぶるゝぞうたてあるや。「過ぎにし方殊に思ひ惱むべき事もなくて侍りぬべかりし世の中にも、猶心からすきずきしき事につけて物思ひの絶えずも侍りけるかな。さるまじき事どもの心苦しきがあまた侍りし中に、遂に心もとけずむすぼゝれて止みぬる事二つなむ侍る。まづ一つは、このすぎ給ひにし御事よ。あさましうのみ思ひつめてやみ給ひにしが、長き世の憂はしき節と思ひ給へられしをかうまでも仕う奉り御覽ぜら

るゝをなむ慰めに思う給へなせど燃えし煙のむすぼゝれ給ひけむは猶いぶせうこそ思ひ給へらるれ」とて今一つはのたまひさしつ。「中頃身のなきに沈み侍りし程かたがたに思ひ給へしことどかたはしづゝかなひにたり。ひんがしの院にものする人のそこはかとなくて心苦しう覺え渡り侍りしもおだしう思ひなりにて侍り。心ばへのにくからぬなど我も人も見給へあきらめていとこそさはやかなれ。かく立ちかへり公の御後見仕うまつる喜びなどはさしも心に深くまゐまず、かやうなるすきがましき方はまづめ難うのみ侍るをおぼろげに思ひ忍びたる御後見とはおぼし知らせ給ふらむや。哀とだにのたまはせずは、いかにかひなく侍らむ」とのたまふ。むづかしうて御いらへもなければ「さりや、あな心う」とて異事に言ひ紛はし給ひつ。「今はいかでのどやかに生ける世のかぎり思ふこと殘さず後の世のつとめも心に任せて籠り居なむと思ひ侍るをこの世の思出にまつべきふしの侍らぬこそさすがに口惜しう侍りぬべけれ。數ならぬ幼き人の侍る、おひさきいと待遠なりや。辱くとも猶この門廣げさせ給ひて、侍らずなりなむ後にもがずまへさせ給へ」など聞え給ふ。御いらへはいとおほどかなるさまに辛うじてひとことばかりかすめ給へるけはひ、いとなつかしげなるに聞きつきてまめまめと暮るゝまでおはす。「はかばかしき方ののぞみはさるものにて年の内ゆき更る時々の花紅葉空の氣色につけても心の行く事もまゐ侍りにしがな。春の花の林秋の野のさかりをとりどりに人あらそひ侍りけるその頃のげにと心よるばかりあらはなる定こそ侍らざなれ。唐土には春の花の錦にまくものなしといひはべめり。やまと言の葉には秋の哀

をとり立てゝ思へる、いづれも時々につけて見給ふに目うつりてえこそ花鳥の色をもねを
も辨へ侍らぬ。せばき垣根の内なりともその折々の心見まるばかり春の花の木をも植ゑわ
たし秋の草をも堀りうつしていたづらなる野邊の蟲をもすませて人に御覽ぜさせむと思ひ
給ふるをいづかたにか御心よせ侍るべからむ」と聞え給ふにいと聞えにくき事とおぼせど
むげに絶えて御いらへ聞え給はざらむもうたてあれば、「ましていかゞ思ひわき侍らむ。げ
にいつとなきなかにあやしと聞きし夕こそはかなう消え給ひにし露のよすがにも思ひ給へ
られぬべけれ」とまどけなげにのたまひけつも、いとらうたげなるにえ忍び給はで、
「君もさはあはれをかはせ人知れず我身にまむる秋のゆふ風。まのび難き折々も侍りし
が」と聞え給ふにいづこの御いらへかはあらむ。心得ずとおぼしたる御氣色なり。このつい
でに、え籠め給はで恨み聞え給ふ事どもあるべし。今少しひが事もまゝ給ひつべけれどもいと
うたてとおぼいたるもことわりに我が御心も若々しうけしからずとおぼしかへしてうち歎
き給へるさまの物深うなまめかしきも心づきなうぞおぼしなりぬる。やはらづゝひき入り
給ひぬる氣色なれば「あさましうも疎ませ給ひぬるかな。誠に心深き人は、かくこそあらざ
なれ。よし今よりにくませ給ふなよ。つらからむ」とて渡り給ひぬ。うちまめりたる御にほひ
とまりたるさへうとましくおぼさる。人々御格子など參りて「この御まとねのうつりがいひ
しらぬものかな。いかでかく取り集め柳の枝にさかせたる御有樣ならむ。ゆゝし」と聞えあ
へり。對にわたり給ひてとみにも入り給はずいたうながめて端近うふし給へり。とうろ遠く

かけて近く人々さぶらはせ給ひて物語などせさせ給ふ。からあながちなる事に胸ふたがる
くせの猶ありけるよとわれながらおぼし知らる。これはいと似げなきことなり。恐しう罪深
き方は多くまさりけめど、古のすきは思ひやりすくなき程のあやまちに、ほとけ神も免し給
ひけむとおぼしさますも、猶この道はうしろやすく深き方のまさりけるかなとおぼし知ら
せ給ふ。女御は秋のあはれを知りがほにいらへ聞えけるも悔しうはづかしと御心ひとつに
物むつかしう惱しげにさへまた給ふを、いとすくよかにつれなくて常よりもおやがりありき
給ふ。をんな君に「女御の秋に心をよせ給へりしもあはれに君の春の曙に心まめ給へるもこ
とわりにぞそあれ。時々につけたる木草の花によせても御心とまるばかりの遊びなどして
しがな。公私のいとなみまげきみこそふさはしからね。いかで思ふ事してしがなと唯御ため
さうざうしくやと思ふこそ心苦しけれ」など語らひ聞え給ふ。山里の人も、いかになど絶え
ずおぼしやれど所せさのみまさる御身にて渡り給ふことといとかたし。世の中を味氣なく憂
しと思ひ知る氣色などかさしも思ふべき。心やすく立ち出でゝおぼざうの住ひはせじと思
へるをおほけなしとはおぼすものからいとほしくて例の不斷の御念佛にことづけて渡り給
へり。住み馴るゝまゝに、いと心すごげなる所のさまにいと深からざらむことにてだにあは
れそひぬべし。まして見奉るにつけても、つらかりける御契のさすがに淺からぬを思ふに、
なかなかにて慰め難き氣色なれば、こしらへかね給ふ。いと木まげき中より、篝火どものか
げの、遣水の螢に見えまがふもをかし。「かゝるすまひにまほじまざらましかば、珍らかに覺

えまし」との給ふに、

「いさりせしかげ忘られぬかゞり火は身のうきふねや慕ひ來にけむ。思ひこそまがへられ侍れ」と聞ゆれば、

「淺からぬまたの思ひを知らねばや猶かゞり火のかげはさわげる。たれうきもの」とおしかへしうらみ給ふ。大かたものまづかにおぼさるゝ頃なればたゞふとき事どもに御心とまりて、例よりは日ごろ經給ふにやすこし思ひまぎれけむとぞ。

權

齋院は、御ぶくにており居給ひにきかし。おとゞ例のおぼしそめつること絶えぬ御くせにて、御とぶらひなどいとしげう聞え給ふ。宮煩はしかりしことをおぼせば御返りもうちとけて聞え給はず。いと口惜しとおぼしわたる。九月になりて桃園の宮に渡り給ひぬるを聞きて女五の宮のそこにおはすればそなたの御とぶらひにことつけてまうで給ふ。故院の子のみこたちをば心殊にやんごとなく思ひ聞え給へりしかば今も親しくつぎつぎに聞え交し給ふめり。同じ寢殿の西ひんがしにぞ住み給ひける。程もなく荒れにける心地して哀にけはひしめやかなり。宮たいめんし給ひて御物語聞え給ふ。いとふるめきたる御けはひまはぶきがちにおはす。このかみにおはすれど故おほ殿の宮はあらまほしくふりがたき御有樣なるを

もてはなれ聲ふつゝかにこちごちしく覺え給へるもさるかたなり。「院のうへ崩れ給ひて後萬心ぼそく覺え侍りつるに年の積るまゝにいと涙がちにて過ぐしはべるをこの宮さへかくうちすて給へればいよいよあるかなきかにとまり侍るをかく立ち寄りとはせ給ふになむ物忘れしぬべく侍る」と聞え給ふ。かしこくもふり給へるかなと思へどうち畏まりて「院崩れ給ひて後はさまざまにつけて、同じ世のやうにも侍らず。覺えぬ罪にあたり侍りて知らぬよに惑ひ侍りしを、たまたまおほやけにかずまへられ奉りては又とりみだり暇なくなどして年頃も參りて、古の御物語をだに聞え承はらぬをいぶせく思ひ給へ渡りつゝなむ」など聞え給ふを「いともいとともあさましく何方につけても定めなき世を同じさまにて見給へすぐす。命長さのうらめしき事多く侍れどかくて世に立ちかへり給へる御悦になむ、ありし年頃を見奉りさしてましかば、口惜しからましと覺え侍る」とうちわなゝき給ひて「いと清らにねびまさり給ひにけるかな。わらはに物し給へりしを見奉りそめし時世にかゝる光の出でおはしたることゝ驚かれ侍りしを、時々見奉るだにゆゝしく覺え侍りてなむ。内のうへなむいとよく似奉らせ給へると人々聞ゆるをさりとも劣り給へらむとこそ推し量りはべれ」と長々と聞え給へば、殊にかくさし向ひて人の譽めぬわざかなとをかしくおぼす。「山がつになりていたう思ひくづほれ侍りし年頃の後こよなくおとろへにて侍るものを。内の御かたちは古の世にも並ぶ人なくやとこそあり難く見奉り侍れ。怪しき御おしはかりになむ」と聞え給ふ。「時々見奉らばいとゞしき命やのび侍らむ。今日は老も忘れうき世のなげき皆さめぬる心

地なむ」とても又なく給ふ「三の宮うらやましくさるべき御ゆかりそひて親しく見奉り給ふを羨み侍る。このうせ給ひぬるも、さやうにこそ悔い給ふ折々ありしか」とのたまふにぞ、少し耳とまり給ふ。「さも侍ひなれなましかば今に思ふさまに侍らまし。皆さし放たせ給ひて」とうらめしげに氣色ばみ聞え給ふ。あなたの御まへを見遣り給へればかれがれなる前栽の心ばへも殊に見渡されて、のどやかに眺め給ふらむ御有樣かたちもいとゆかしく哀にてえ念じ給はで「かくさぶらひたるついでを過ぐし侍らむは志なきやうなるをあなたの御とぶらひ聞ゆべかりけり」とてやがて簀子より渡り給ふ。暗うなりたる程なれど、にび色のみすに黒き御几帳の透影あはれに、追風なまめかしく吹きとほし、けはひあらまほし。簀子はかたはらいたければ南の廂に入れ奉る。宣旨たいめんして御せうそこきこゆ。「今さらにわかわかしき心地する御簾の前かな。神さびにける年月のらう數へられ侍るに今は内外も許させ給ひてむとぞ頼み侍りける」とて飽かずおぼしたり。ありし世は皆夢になして今なむさめてはかなきにやと思ひ給へ定め難く侍るにらうなどはおづかにや定め聞えさすべう侍らむ」と聞え出し給へり。げにこそ定め難き世なれと、はかなき事につけてもおぼしつゞけらる。

「人知れず神のゆるしを待ちしまにこゝらつれなき世をすぐすかな。今は何のいさめにかこたせ給はむとすらむ。なべて世に煩はしきことさへ侍りし後樣々に思ひ給へあつめしかな。いかで片端をだに」とあながちに聞え給ふ。御用意なども昔よりも今少しなまめかしきけさへそひ給ひにけり。さるはいといたう過ぐし給へど御位の程にはあはざめり。

「なべて世のあはればかりをとふからに誓ひしことゝ神やいさめむ」とあれば「あなこゝろう、その世の罪は皆科戸の風にたぐへてき」との給ふ。あいぎやうもこよなし。「みそぎを神はいかゞ侍りけむ」などはかなき事を聞ゆるもまめやかにいと傍いたし。世づかぬ御有樣は年月にそへても物深くのみひき入り給ひてえ聞え給はぬを見奉りなやめり。「すきずきしきやうになりぬるを」など淺はかならずうち歎きて立ち給ふに「齡のつもりにはおもなくてそなるわざなりけれ。世に知らぬやつれを今ぞとだに聞えさすべくやはもてなし給ひける」とて出で給ふ名殘所せきまで例の聞えあへり。大方の空もをかしき程に木の葉の音なひにつけても過ぎにしものゝ哀とり返しつゝその折々をかしくもあはれにも深く見え給ひし御心ばへなども思ひ出で聞えさす。心やましくて立ち出で給ひぬるはまして寝覺がちにおぼし續けゝる。疾く御格子まゐらせ給ひて朝霧をながめ枯れたる花どもの中に朝顔のこれかれにはひまつはれてあるかなきかに咲きて匂も殊にかはれるを折らせ給ひて奉れ給ふ。「けざやかなりし御もてなしに人わろき心地し侍りて、うしろでもいとゞいかゞ御覽じけむとねたく。されど、

見しをりの露忘られぬあさがほの花のさかりは過ぎやすぬらむ。年頃のつもりも哀とばかりはさりともおぼし知るらむとなむ。かつは」など聞え給へり。おとなび給へる御文の心ばへに、おぼつかなからむも見知らぬやうにやとおぼし、人々も御硯とりまかなひて聞ゆれば、

「秋はて〻霧のまがきにむすぼ〻れあるかなきかにうつるあさがほ。似つかはしき御よそへにつけても露けく」とのみあるは何のをかしきふしもなきをいかなるにかおき難く御覽ずめり。青にびの紙のなよびかなる墨つきはしも、をかしく見ゆめり。人の御ほど書きざまなどにつくろはれつ〻、その折は罪なきこともつきづきしうまねびなすにはほ〻ゆがむこともあめればこそ、さかしらに書き紛はしつ〻覺束なき事も多かりけり。立ちかへり今さらにわかわかしき御ふみがきなども似げなき事とおぼせど猶かく昔よりもてはなれぬ御氣色ながら、口をしくて過ぎぬるを思ひつ〻えやむまじく思さるればさらがへりてまめやかに聞え給ふ。ひんがしの對にはなれおはして宣旨を迎へつ〻語らひ給ふ。さぶらふ人々のさしもあらぬきはの事をだに靡きやすなるなどは過ちもしつべくめで聞ゆれど宮はそのかみだにこよなく覺し離れたりしを今はまして誰も思ひなかるべき御齡覺えにてはかなき木草につけたる御かへりなどの折過ぐさぬもかるがるしくやとりなさるらむなど人の物いひを憚り給ひつ〻うちとけ給ふべき御氣色もなければ、ふりがたく同じさまなる御心ばへを世の人にかはり珍しくもねたくも思ひ聞え給ふ。世の中に漏り聞えて、前齋院にねんごろに聞え給へばなむ女五の宮などによろしく思したなり。「似げなからぬ御あはひならむ」などいひけるを、對の上は傳へ聞き給ひてしばしはさりともさやうならむこともあらば隔て〻はおぼしたらじとおぼしけれどうちつけに目留め聞え給ふに、御氣色なども例ならずあくがれたるも心うくまめまめしくおぼしなるらむことを、つれなく戯れにいひなし給ひけむ

よと同じすぢには物し給へど、覺え殊に昔よりやんごとなく聞え給ふを御心などうつりなばはしたなくもあべいかなと、年頃の御もてなしなどは立ち並ぶ方なくさすがにならひて人におしけたれむとなど人知れずおぼし歎かる。かきたえ名殘なきさまにはもてなし給はずともいと物はかなきさまにて見馴れ給へる年頃のむつびあなづらはしき方にこそはあらめなど樣々に思ひ亂れ給ふに、よろしき事こそうちゑしなどにくからず聞え給へ、まめやかにつらしとおぼせば色にも出し給はず。端近うながめがちに、丙ずみまげくなり、役とは御文を書き給へばげに人の事は空しかるまじきなめり。氣色をだにかすめ給へかしとうとましくのみ思ひ聞え給ふ。冬つ方かんわざなどもとまりてさうざうしきに徒然とおぼしあまりて五の宮に例の近づき參り給ふ。雪うち散りて艶なるたそがれ時に、なつかしき程になれたる御ぞどもをいよいよたきしめ給ひて心こことにけさうじ暮し給へれば、いとゞ心弱からむ人はいかゞと見えたり。さすがにまかり申しはた聞え給ふ。「女五の宮のなやましくまた給ふなるをとぶらひ聞えになむ」とてつい居給へれば見もやり給はず。若君ともてあそび紛はしおはするそばめのたゞならぬを「怪しく御氣色の變れる頃かな。罪もなしや。まほやき衣のあまりめなれみだてなくおぼさるゝにや」ととてとだえおくを「又いかゞ」など聞え給へば「なれ行くこそげにうき事多かりけれ」とばかりにてうち背きて臥し給へるは見捨てゝ出て給ふ道物うけれど宮に御せうそこ聞え給ひてければ出で給ひぬ。かゝりける事もありける世をうらなくて過ぐしけるよと思ひ續けて臥し給へり。にびたる御ぞどもなれど色あひ重

なり好ましく、なかなか見えて雪の光にいみじく艶なる御姿を見出して、誠にかれまさり給はゞと忍びあへずおぼさる。ごぜんなど忍びやかなるかぎりして「うちよりほかのありきは物うき程になりにけりや。桃園の宮の心細ささまにて物し給ふ式部卿の宮に年頃は譲り聞えつるを今は頼むなと思しのたまふもことわりにいとほしければ」など、人々にものたまひなせど「いでや御すき心のふり難きぞ あたら御瑕なめる。かるがるしきことも出で來なむ」などつぶやきあへり。宮には北おもての人繁き方なる御門は入り給はむもかろがろしければ、西なるがことごとしきを人入れさせ給ひて宮の御方に御せうそこあれば今日しも渡り給はじとおぼしけるを驚きてあけさせ給ふ。御門守寒げなるけはひうすゞき出で來てとみにもえあけやらず。これより外のをのこはたなきなるべし。ごほごほと引きて「錠のいたくさびにければあかず」とうれふるを哀と聞しめす。昨日今日とおぼす程に、三十年のあなたにもなりにける世かな、かゝるを見つゝかりそめのやどりをえ思ひすてず、木草の色にも心をうつすよとおぼし知らる。くちすさびに、

「いつのまに蓬がもとゝむすぼゝれ雪ふる里と荒れしかき根ぞ」。やゝ久しくひこしろひあけて入り給ふ。宮の御方に、例の御物語聞え給ふにふることゞものそこはかとなきうちはじめ聞え盡し給へど御耳も驚かずねぶたきに宮もあくびうちし給ひて「よひまどひをし侍れば、物もえ聞えやらず」とのたまふほどもなく鼾とか聞き知らぬ音すれは喜びながら立ち出で給はむとすゝに、又いと古めかしきまはぶきうちして參りたる人あり。「かしこけれど、

聞しめしたらむと頼み聞えさするを世にあるものともかずまへさせ給はぬになむ。院の上はをばおとゞと笑はせ給ひし」など名のり出づるにぞおぼし出づる。源内侍のすけといひし人は尼になりてこの宮の御弟子にて行ふと聞きしかど、今まであらむとも尋ね知り給はざりつるをあさましうなりぬ。「その世の事は皆昔がたりになり行くを遙に思ひ出づるも心細きにうれしき御聲かな。親なしにふせる旅人とはぐゝみ給へかし」とて寄り居給へる御けはひにいとゞ昔思ひ出でつゝ、ふりがたくなまめかしきさまにもてなして、いたうすげみにたる口つき思ひやらるゝこわづかひの流石にまたつきにてうちざれむとは猶思へり。云ひこし程になど聞えかゝるまばゆさよ。今しもきたる老のやうになどほゝゑまれ給ふものからひきかへこれも哀なり。このさかりにいどみし女御更衣。あるはひたすらなくなり給ひあるはかひなくてはかなき世にさすらへ給ふもあべかめり。入道の宮などの御齢ひよ、あさましとのみおぼさるゝ世に、年のほど身の殘少なげさに心ばへなども物はかなく見えし人のいきとまりてのどやかに行ひをもうちして過ぐしけるは猶すべて定めなき世なりとおぼすに、物哀なる御氣色を心とときめきに思ひてわかやぐ。

「年經れどこのちぎりこそわすられね親のおやとかいひしひとこと」と聞ゆればうとましくて

「身をかへて後も待ち見よこの世にて親を忘るゝ例ありやと。たのもしき契ぞや。今のどかにぞ聞えさすべき」とて立ち給ひぬ。西おもてには御格子參りたれど厭ひ聞えがほならむ

もいかゞとて一ま二まはおろさず、月さし出で丶薄らかに積れる雪の光にあひてなかなかいと面白き夜のさまなり。ありつる老らくの心げさうもよからぬもの丶世のたとひとか聞きしとおぼし出でられてをかしくなむ。今宵はいとまめやかに聞え給ひて「ひとことにくしなども、人づてならでのたまはせむを思ひたゆるふしにもせむ」とおり立ちてせめ聞え給へど、昔われも人も若やかに罪免されたりし世にだに故宮などの心よせおぼしたりしを、猶あるまじくはづかしと思ひ聞えてやみにしを、世のすゑにさだすぎ、つきなきほどにて一聲もいとまばゆからむとおぼして、更に動きなき御心なれば、あさましうつらしと思ひ聞え給ふ。流石にはしたなくさし放ちてなどはあらぬ人づての御返りなとぞ心やましきや。夜もいたう更け行くに風のけはひ烈しくて誠にいと物心ぼそく覺ゆればさまよき程におしのごひ給ひて、

「つれなさを昔にこりぬ心こそ人のつらさにそへてつらけれ。心づから」との給ひすさぶるを、げに傍いたしと人々例の聞ゆ。

「あらためて何かは見えむ人のうへにかゝりと聞きし心がはりを。昔に變る事は習はず」と聞え給へり。いふかひなくていとまめやかにゑじ聞えて出て給ふもいと若々しき心地し給へば、「いとかく世のためしになりぬべき有樣漏し給ふなよ。ゆめゆめいさら川などもなれなれしや」とて切にうちさゝめき語らひ給へど何事にかあらむ。人々も「あなかたじけな。あながちになさけ後れてももてなし聞え給ふらむかるらかにおし立ちてなどは見え給はぬ

御氣色を、心苦しう」といふ。げに人の程のをかしきにも哀にもおぼし知らぬにはあらねど、物思ひ知るさまに見え奉るとて、おしなべての世の人のめで聞ゆらむつらにや思ひなされむ。かつはかるがるしき心の程も見知り給ひぬべく、耻しげなめる御有樣をとおぼせば、懷しからむなさけもいとゞあいなし。よその御返りなどうち絶えて覺束なかるまじき程に聞え給ふ。人傳の御いらへはしたなからで過ぐしてむ、年頃ゑづみつる罪失ふばかり、御おこなひをとはおぼし立てど、俄にかゝる御事をしも、もてはなれ顏にあらむもなかなか今めかしきやうに見え聞えて人のとりなさじやはと世の人の口さがなさをおぼし知りにしかばかつはさぶらふ人にもうちとけ給はず。いたう御心づかひし給ひつゝやうやう御行ひをのみし給ふ。御はらからのきん達あまたものし給へど、ひとつ御腹ならねばいとうとうとしく宮の内いとかすかになりゆくまゝにさばかりめでたき人のねんごろに御心を盡し聞え給へば皆人心をよせ聞ゆるもひとつ心と見ゆ。おとゞはあながちにおぼしいらるゝにしもあらねど、つれなき御氣色のうれたきにまけて止みなむも口惜しくげにはた人の御有樣世のおぼえ殊にあらまほしく物を深くおぼし知り世の人のとあるかゝるけぢめも聞き集め給ひて昔よりもあまた經まさりておぼさるれば今さらの御あだげもかつは世のもどきをもおぼしながら、むなしからむはいよいよ人笑へなるべし、いかにせむと御心動きて二條院に夜がれ重ね給ふををんな君は、戯ぶれにくゝのみおぼす。忍び給へど、いかゞうちこぼるゝ折もなからむ。「怪しく例ならぬ御氣色こそ心得がたけれ」とてみぐしをかきやりつゝいとほしとお

ぼしたるさまも繪に書かまほしき御あはひなり。「宮うせ給ひて後上のいとさうざうしげにのみ世をおぼしたるも心苦しう見奉る。おぼきおとゞも物し給はで、見ゆづる人なき事まげさになむ。この程の絶間などを見習はぬことにおぼすらむもことわりに哀なれど、今はさりとも心のどかにおぼせ。おとなび給ひたためれどまだいと思ひやりもなく人の心も見知らぬさまに物し給ふこそらうたけれ」などまろかれたる御ひたひ髪ひきつくろひ給へどいよいよ背きて物も聞え給はず。「いといたく若び給へるはたがならはし聞えたるぞ」とて常なき世にかくまで心おかるゝも味氣なのわざやとかつはうちながめ給ふ。「齋院にはかなしごと聞ゆるや。もし思し僻むるかたある、それはいともてはなれたることぞよ。おのづから見給ひてむ。昔よりこよなうけどぼき御心ばへなるをさうざうしき折々たゞならで聞えなやますに、彼處も徒然に物し給ふ所なればたまさかの御いらへなどし給へどまめまめしきさまにもあらぬをかくなむあるとしもうれへ聞ゆべき事にやは。後めたうはあらじとを思ひなほし給へ」など日一日慰め聞え給ふ。雪の痛う降り積りたる上に今も散りつゝ松と竹とのけぢめをかしう見ゆる夕暮に人の御かたちも光まさりて見ゆ。「時々につけても人の心をうつすめる花紅葉のさかりよりも冬の夜のすめる月に雪の光りあひたる空こそ怪しう色なきものゝ身にしみてこの世の外の事まで思ひ流され面白さも哀さも殘らぬをりなれ。すさまじきためしに言ひ置きけむ人の心あさゝよ」とてみす卷きあげさせ給ふ。月は隈なくさし出でゝひとつ色に見え渡されたるにまをれたる前栽のかげ心苦しう遣水もいと痛うむせびて池の氷もえもいはずすごきに、わらはべおろして雪まろばしせさせ給ふ、をかしげなる姿かしらつきども月にはえて大きやかになれたるがさまざまの袖亂れ着、帶まどけなき宿直姿なまめいたるに、こよなう餘れる髪の末、白き庭にはましてもてはやしたるいとけざやかなり。小きはわらはげて喜びはしるに扇なども落してうちとけ顏をかしげなり。いと多うまろばさむとふくつけがれどえも押し動かさでわぶめり。かたへは東のつまなどに出で居て心もとなげに笑ふ。「一とせ中宮の御まへに雪の山造られたりし世にふりたることなれど猶珍しくもはかなき事をまなし給へりしかな。何の折々につけても口惜しう飽かずもあるかな。いとけどぼくもてなし給ひてくはしき御有樣を見ならし奉りしことはなかりしかど御まじらひの程に後やすきものにはおぼしたりきかし。うち頼み聞えてとある事かゝる折につけて何事も聞え通ひしに、もて出でゝらうらうしき事も見え給はざりしかど、いふかひありて思ふさまにはかなき事わざをもまなし給ひしはや。世に又さばかりのたぐひありなむや。やはらかにおびれたるものから深う由づきたる所の並びなく物し給ひしを君こそはさいへど紫のゆゑこよなからず物し給ふめれど少し煩はしきけそひてかどかどしさのすゝみ給へるや苦しからむ。前齋院の御心ばへは又さまことにぞ見ゆる。さうざうしきに、何とかはなくとも聞え合せわれも心づかひせらるべき御あたり唯このひとゝころや世に殘り給へらむ」とのたまふ。「ないしのかみこそはらうらうしくゆゑゆゑしき方は人にまさり給へれ。淺はかなるすぢなどもてはなれ給へりける人の御心を怪しくもありける事どもかな」とのたま

へば「さかし。なまめかしうかたちよき女のためしには猶引き出づべき人ぞかし。さも思ふにいとほしく悔しきことの多かるかな。まいてうちあたけすぎたる人の年積り行くまゝにいかに悔しきこと多からむ。人よりはこよなきまづけさと思ひしだに」などのたまひ出でゝ、かんの君の御ことにも涙少しはおとし給ひつ。「この數にもあらずおとしめ給ふ山里の人こそは身のほどにはやゝうちすぎ物の心などえつべけれど人より異なるべきものなればは思ひあがれるさまをも見けちて侍るかな。いふかひなきさはの人はまだ見ず。人は勝れたるは難き世なりや。東の院にながむる人の心ばへこそふりかたくらうたけれ。さはた更にえあらぬものをさる方につけての心ばせ人にとりつゝ見そめしより同じやうに世をつゝましげに思ひて過ぎぬるよ。今はたかたみに背くべくもあらず。深う哀と思ひ侍る」など昔今の御物語に夜ふけゆく。月いよいよすみて靜におもしろし。女君

「氷とぢいしまの水はゆきなやみそらすむ月のがけぞながるゝ」。とを見出して少し傾き給へるほど似る物なく美しげなり。かんざしおもやうの戀ひ聞ゆる人の面かげにふとおぼえてめでたければいさゝかわくる御心もとりかへしつべし。鴛鴦のうち鳴きたるに、

「かきつめてむかし戀しき雪もよに哀をそふるをしのうきねか」。入り給ひても宮の御事を思ひつゝ大殿籠れるに夢ともなくほのかに見奉るをいみじく怨み給へる御氣色にて、もらさじとのたまひしかどうき名のかくれなかりければ耻しう苦しきめを見るにつけてもつらくなむ」との給ふ。御いらへ聞ゆとおぼすにおそはるゝ心地してをんな君の「こはなどかくは」との給ふに、驚きていみじく口惜しく胸のおき所なくさわげば、おさへて涙も流れ出でにけり。今もいみじくぬらしそへ給ふ。をんな君、いかなることにかとおぼすに、うちもみじろかで臥し給へり。

「とけて寢ぬねざめさびしき冬の夜にむすぼゝれつる夢のみじかさ」なかなか飽かず悲しとおぼすに、疾く起き給ひてさとはなくて所々に御ず經などせさせ給ふ。苦しきめ見せ給ふと恨み給へるもさぞおぼさるらむかし。おこなひをも給ひ萬に罪かろげなりし御有樣ながらこのひとつことにてぞこの世の濁をすゝぎ給はざらむと、物の心を深くおぼしたどるに、いみじく悲しければ何わざをしてもるべなき世界におはすらむをとぶらひ聞えにまうでゝ罪にもかはり聞えばやなどつくづくとおぼす。かの御ためにとり立てゝ何わざをもし給はむは人とがめ聞えつべし。内にも御心のおにゝ、思す所やあらむとおぼしつゝむほどに、阿彌陀ほとけを心にかけて念じ奉り給ふ。「おなじはちすにとこそは、

なき人をまたふ心にまかせてもかげ見ぬ水の瀨にやまどはむ」とおぼすぞうかりけるとや。

少女

年かはりて宮の御はても過ぎぬれば、世の中色あらたまりてころもがへのほどなども今め

かしきを、まして祭の頃は大かたの空の景色心ちよげなるに前齋院はつれづれと眺め給ふ。おまへなる桂の下風懐しきにつけても若き人々は思ひ出づる事どもあるを、大殿より御禊の日はいかにのどかにおぼさるらむととぶらひ聞えさせ給へり。「今日は、

かけきやは川瀬の波もたちかへり君がみそぎのふぢのやつれを」。紫の紙たてぶみすくよかに藤の花につけ給へり。折のあはれなれば御かへりあり。

「ふぢ衣きしは昨日と思ふまに今日はみそぎの瀬にかはる世を。はかなく」とばかりあるを例の御目とじめ給ひて見おはす。御ぶくなほしの程などにも、せんじのもとに所せきまでおぼしやれる事どもあるを院は見苦しきことにおもほしのたまへどをかしやかに氣色ばめる御文などのあちばこそとかくも聞えかへさめ、年比もおほやけざまの折々の御とぶらひなどは聞えならはし給ひていとまめやかなればいかゞは聞えも紛はすべからむともて煩ふべし。女五の宮の御方にもかやうに折過ぐさず聞え給へば「いと哀にこの君の昨日今日のちごと思ひしをかくおとなびてとぶらひ給ふと、かたちのいとも清らなるにそへて心さへこそ人にはことにおひ出で給へれ」と譽め聞え給ふを若き人々は笑ひ聞ゆ。こなたにもたいめ志給ふ折は、「このおとゞのかくねんごろに聞え給ふめるをなにか、今始めたる御志にもあらず、故宮もすぢことになり給ひてえ見奉り給はぬ歎をし給ひては思ひ立ちしことをあながちにもてはなれ給ひし事などのたまひ出でつゝ、悔しげにこそおぼしたりし折々ありしか。されど故大殿の姫君物せらし限は三の宮の思ひ給はむことのいとほしさにとかくこと

そへ聞ゆる事もなかりしなり。今はそのやんごとなくえさらぬ筋にて物せられし人さへなくなられにしかばげになどてかはさやうにておはせましも悪しからましとうち覺え侍るにもさらがへりてかくねんごろに聞え給ふも、さるべきにもあらむとなむ思ひ侍る」など、いと古代に聞え給ふを心づきなしとおぼして「故宮にもまか心ごはきものに思はれ奉りて過ぎ侍りにしを今更に又世に靡き侍らむもいとつきなき事になむ」と聞え給ひて耻しげなる御氣色なれば強ひてもえ聞えおもむけ給はず。宮人もかみしも皆心かけ聞えたれば世の中いと後めたくのみおぼさるれど、かの御自らは我が心をつくし、哀を見え聞えて人の御氣色のうちもゆるがむ程をこそ待ちわたり給へ。さやうにあながちなるさまに御心破り聞えむなどはおぼさゞるべし。大殿ばらの若君の御元服のことおぼし急ぐを二條院にてとおぼせど大宮のいとゆかしげにおぼしたるもことわりに心苦しければ猶やがてかの殿にてせさせ奉り給ふ。右大將殿をはじめ聞えて御をぢの殿ばら皆上達部のやんごとなき御覺えことにてのみ物し給へばあるじ方にもわれもわれもとさるべき事ども、とりどりに仕うまつり給ふ。大かた世ゆすりて所せき御いそぎのいきほひなり。四位になしてむとおぼし、世の人もさぞあらむと思へるを、まだいとさびはなる程を、我が心に任せたる世にて、まかゆくりかなからむも、なかなかめなれたる事なりとおぼし留めつ。淺黄にて殿上に還り給ふを、大宮は飽かずあさましきことゝおぼしたるぞことわりにいとほしかりける。御たいめんありてこの事聞え給ふに「只今から強ちにしもまたきに追ひつかすまじう侍れど思ふやう侍りて、

大學の道にしばしならはさむのほい侍るにより今二三年を徒らの年に思ひなしておのづからおほやけにも仕うまつりぬべき程にもならば今ひとゝなり侍りなむ。みづからは九重の内に生ひ出で侍りて世の中の有樣もまだ侍らず、よるひる御まへにさぶらひて僅になむはかなき文なども習ひ侍りし。たゞ畏き御手より傳へ侍りしだに何事も廣き心を知らぬ程はもんざいまねぶにも琴笛のしらべにもねたらず及ばぬ所の多くなむ侍りける。はかなき親に賢き子の優るためしはいと難きことになむ侍れば、まして次々傳はりつゝ隔たりゆかむほどの行くさきいと後めたきによりなむおもう給へおきて侍る。たかき家の子として、つかさかうふり心にかなひ、世の中盛に驕りならひぬれば學問などに身を苦めむことはいと遠くなむ覺ゆべかめる。たはぶれ遊を好みて、心のまゝなる官じやくに上りぬれば時に隨ふ世の人のまたにははなまじろきをしつゝつゐせうし氣色とりつゝ隨ふほどは、おのづから人と覺えてやんごとなきやうなれど時移りさるべき人に立ち後れて世衰ふる末には人にかるめあなづらるゝにかゝり所なきことになむ侍る。猶ざえを本としてこそ大和魂の世に用ゐらるゝ方もつよう侍らめ。さしあたりては心もとなきやうに侍りともつひの世のおもしとなるべき心おきてをならひなば、侍らずなりなむ後も後安かるべきによりなむ、只今ははるばるしからずながらもかくてはぐゝみ侍らばせまりたる大學の衆とて笑ひあなづる人もよも侍らじと思う給ふる」など聞え知らせ給へば、うち歎き給ひて、「げにかくもおぼしよるべかりけるを、この大將などもあまりひき違へたる御事なりと傾き侍るめるを、この幼心地に

もいと口惜しく大將左衛門督の子どもなどを我よりは下臈と思ひおとしたりしだに皆各加階しのぼりつゝおよすげあへるに淺黄をいとからしと思はれたるが心苦しう侍るなり」と聞え給へばうち笑ひ給ひて「いとおよすけても恨み侍るなりな。いとはかなしや。この人のほどよ」とて、いとうつくしとおぼしたり。「學問などして、少し物の心もえ侍らばその恨はおのづから解け侍りなむ」と聞え給ふ。あざなつくることはひんがしの院にてし給ふ。ひんがしの對をまづらはれたり。上達部殿上人珍しくいぶかしきことにしてわれもわれもと集ひ參り給へり。博士どもゝなかなか臆しぬべし。「憚る所なく例あらむに任せてなだむることなくきびしう行へ」と仰せ給へば、まひてつれなく思ひなして、家より外に求めたるさう束どものうちあはずかたくなしき姿などをもはぢなくおもゝちこわづかひうべうべしくもてなしつゝ座につき並びたる作法より初め、見も知らぬさまどもなり。若きさんだちはえ堪へずほゝゑまれぬ。さるは物笑ひなどすまじくすぐしつゝ靜まれる限をとえり出して、瓶子なども取らせ給へれどすぢ異なりける交らひにて右大將民部卿などのおふなおふなかはらけとり給へるを淺ましう咎め出でつゝおろす「おほしかいもとあるじはなはだ非ざうに侍りたうぶ。かくばかりのまろしとあるなにがしを知らずしてやおほやけには仕う奉り給ふ。はなはだをこなり」などいふに人々皆ほゝろびて笑ひぬれば「又なり高し、なり止まむ、はなはた非ざうなり。座をひきて立ちたうびなむ」などおどしいふもいとをかし。見ならひ給はぬ人々は珍しく興ありと思ひ、この道より出で立ち給へる上達部などはまたり顔にうちほ

ゝるみなどしつゝかゝる方さまをおぼし好みて心ざし給ふがめでたきとと限なく思ひ聞え給へり。聊か物いふをも制す。なめげなりとても咎む。かしかましう詈り居る顔どもゝ夜に入りてはなかなか今少しけちえんなる火影に猿がうがましく侘しげに人わろげなるなどさまざまにげにいとなべてならずさま異なるわざなりけり。おとゞは「いとあざれかたくなゝる身にてけうさうしまどはされなむ」との給ひてみすの内に隠れてぞ御覧じける。數定まれる座に着きあまりて歸りまかづる大學の衆どもあるを聞しめして釣殿の方に召し留めて殊に物など賜はせけり。事はてゝまかづる博士才人どもめして又々文作らせ給ふ。上達部殿上人もさるべき限をば皆とゞめさぶらはせ給ふ。博士の人々は四韻、たゞの人は大臣をはじめ奉りてぜく作り給ふ。興ある題のもじえりてもんさう博士奉る。短きころの夜なれば明けはてゝぞ講ずる。左中辨講じ仕うまつる。かたちいと清げなる人のこわづかひものしくかんさびて讀みあげたる程いと面白し。おぼえ心ことなる博士なりけり。かゝるたかき家に生れ給ひて、世界の榮花にのみたはぶれ給ふべき御身をもちて窓の螢をむつび枝の雪をならし給ふ志のすぐれたるさまを萬の事によそへなずらへて心々に作り集めたる、句ごとに面白く、唐土にもて渡り傳へまほしげなる世の文どもなりとなむそのころ世にめでゆすりける。おとゞの御は更なり、親めき哀なる事さへすぐれたるを涙おとしてずじさわぎしかど女のえ知らぬ事まねぶはにくきことをどうたてあれば漏しつ。うちづゞき入學といふ事せさせ給ひてやがてこの院の内に御曹子作りてまめやかにざえ深き師にあづけ聞え給うてぞ

學問せさせ奉り給ひける。大宮の御許にもをさをさ參うで給はず、よるひるうつくしみて、猶ちごのやうにのみもてなし聞え給へればこの彼處にてはえ物習ひ給はじとて靜なる所に籠め奉り給へるなりけり。月に三度ばかりを參り給へとぞ許し聞え給ひける。つと籠り居給ひていぶせきまゝに殿をつらくもおはしますかな、かく苦しからでも高き位にのぼり世に用ゐらるゝ人はなくやはあると思ひ聞え給へど大方の人がらまめやかにあだめきたる所なくおはすればいと能く念じていかでさるべき文ども疾く讀みはてゝまじらひもし世にも出でたらむと思ひて唯四五月の中に史記などいふふみは讀みはて給ひてけり。今は寮試うけさせむとてまづ我が御まへにて心みさせ給ふ。例の大將左大辨式部の大輔左中辨などばかりして御師の大内記を召して史記のかたき卷々れうし受けむに博士のかへさうべき節々を引き出でゝひとわたり讀ませ奉り給ふに至らぬ隈なくかたがたに通はし讀み給へるさまつまじるし殘らずあさましきまでありがたければさるべきにこそおはしけれと誰も誰も涙落し給ふ。大將はまして、「故大臣おはせましかば」と聞え出でゝ泣き給ふ。殿もえ心強うもてなし給はず「人の上にてかたくなゝりと見聞き侍りしを子のおとなぶるに親の立ちかはりまれ行くことは幾何ならぬ齡ながらかゝる世にこそ侍りけれ」などの給ひておしのごひ給ふを見る御師の心ち嬉しくめいぼくありと思へり。大將盃さし給へば、いたう醉ひまれてをる顔つきいとやせやせなり。世のひがものにてざえの程よりは用ゐられず、すげなくて身貧しくなむありけるを御覧じうる所ありてかくとりわき召し寄せたるなりけり。身に餘るまで

御かへりみを給はりてこの君の御德にたちまちに身をかへたると思へばまして行くさきは並ぶべき人なき御覺えぞあらむかし。大學に參り給ふ日は寮門に上達部の御車ども數まらず集ひたり。大方世に殘りたる人あらじと見えたるに、又なくもてかしづかれて繕はれ入り給へるくわざの君の御樣げにかゝる交らひには堪へずあてに美しげなり。例の怪しき者共の立ちまじりつゝ來居たる座の末をからしと思すぞいとゝわりなるや。こゝにても又おろしのゝしるものどもありてめざましけれど少しも臆せず讀みはて給ひつ。昔覺えて大學の榮ゆる頃なればかみなかしもの人我も我もとこの道に志し集まればいよいよ世の中にざえありはかばかしき人多くなむありける。もんにんぎさうなどいふなる事どもよりうちはじめ、すかずがしらまはて給へれば偏に心に入れて師も弟子もいとゞ勵まし給ふ。殿にも文作りまぜく博士才人ども所えたり。すべて何事につけても道々のざえの程顯はるゝ世になむありける。』かくてきさき居給ふべきを齋宮の女御をこそは母君も御後見とゆづり聞え給ひしかばとおとゝもことづけ給ふ。源氏のうちまさり后に居給はむこと世の人免し聞えず。弘徽殿のまづ人より先に參り給ひにしもいかゞなどうちうちに此方彼方に心よせ聞ゆる人々覺束ながり聞ゆ。兵部卿の宮と聞えし今は式部卿にてこの御時にはましてやんごとなき御覺えにておはする御むすめほいありて參り給へり。同じごと王女御にてさぶらひ給ふを同じくは御母かたにて親しくおはすべきにこそ、母きさきのおはしまさぬ御かはりの後見にとゞとよせて似つかはしかるべくととりどりにおぼし爭ひたれど猶梅壺居給ひぬ。御さい

はひのかく引きかへ勝れ給へりけるを世の人驚き聞ゆ。おとゞ太政大臣にあがり給ひて大將內大臣になり給ひぬ。世の中の事どもまつりごち給ふべく讓り聞え給ふ。人がらいとすくよかにきらきらしくて心もちゐなども畏く物し給ふ。學問を立てゝまさ給ひければ、韻ふたぎには負け給ひしかど、公事にかしこくなむ。腹々に御子ども十餘人おとなびつゝ物し給ふも次々になり出でつゝ、劣らず榮えたる御家のうちなり。むすめは女御と今一所となむおはしける。わかんどほり腹にてあてなるすぢは劣るまじけれどその母君あぜちの大納言の北の方になりてさし向ひたる子どもの數多くなりてそれに任せて後の親に讓らむ、いとあいなしとてとり放ち聞え給ひて大宮にぞ預け聞え給へりける。女御にはいとことよなく思ひおとし聞え給へれど人がらかたちなどいと美しうぞおはしたる。くわざの君一つにて生ひ出で給ひしかど各十に餘り給ひて後は、御方ことにて睦ましき人なれど、をのこ子にはうちとくまじきものなりと父おとゞ聞え給ひて、けどほくなりにたるを、幼心地に思ふ事なきにしあらねばはかなき花紅葉につけても、ひゝな遊のつゐせうをもねんごろにまつはれありきて、志を見え聞え給へばいみじう思ひかはしてけざやかには今も耻ぢ聞え給はず。御後見ども〻何かは若き御心どもなれば年頃見ならひ給へる御あはひを俄にもいかゞはもてはなれはしたなめ聞えむと見るに、をんな君こそ何心なくをさなくおはすれどをとこはさこそ物げなき程と見聞ゆれ。おほけなくいかなる御なからひにかありけむ、よそよそになりてはこれをぞ靜心なく思ふべき。まだ片おひなる手のおひさき美しきにて書きかはし給へる文ども

の心をさなくておのづから落ち散る折あるを、御方の人はほのぼの知れるもありけれど何かはかくこそと誰にも聞えむ、見かくしつゝあるべし。所々のだいきやうどもゝはてゝ世の中の御いそぎもなくのどやかになりぬる頃時雨うちして荻のうは風もたゞならぬ夕暮に大宮の御方に内のおとゞ参り給ひて姫君わたし聞え給ひて御琴など彈かせ奉り給ふ。宮は萬の物の上手におはすればいづれも傳へ奉り給ふ。「琵琶こそをんなのまたるににくきやうなれどらうらうじきものに侍れ。今の世にまことしう傳へたる人をさをさ侍らずなりにたり」何のみこくれの源氏など數へ給ひて「をんなの中にはおほきおとゞの山里にこめ置き給へる人こそいと上手と聞き侍れ。物の上手の後には侍れど末になりて山賤にて年經たる人いかでさしも引き勝れけむ、かのおとゞいと心ことにこそ思ひてのたまふ折々はべれ、異事よりはあそびの方のさえは猶ひろうあはせ彼此に通はし侍るこそかしこけれ。ひとりごとにて上手となりけむこそ珍しきことなれ」などのたまひて宮にそゝのかし聞え給へば「ぢうさすことうひうひしくなりにけりや」とのたまへどおもしろう彈き給ふ。「幸にうち添へて猶怪しうめでたかりける人なりや。をひの世にもたまへらぬをんなごを設けさせ奉りて身に添へてもやつし居たらず。やんごとなきに讓れる心おきて事もなかるべき人なりとぞ聞き侍る」などかつ御物語聞え給ふ。「をんなは唯心ばせよりこそ、世に用ゐらるゝものに侍りけれ」など人の上のたまひ出でゝ「女御をけしうはあらず何事も人に劣りてはおひ出でずかしと思ひ給ひしかど、思はぬ人におされぬる宿世になむ世は思の外なるものと思ひ侍りぬる。

この君をだにいかで思ふさまに見なし侍らむ。春宮の御元服只今のことになりぬるをと、人まれず思ひ給へ心ざしたるを、かういふさいはひ人の腹の后がねこそ又おひすがひぬれ。立ち出で給へらむに、ましてきしろふ人ありがたくや」とうち歎き給へば「などかさしもあらむ。この家にさるすぢの人いで物し給はで、止むやうあらじと故大臣のおもひ給ひて女御の御事をもねたち急ぎ給ひしものをおはせましかば、かくもて僻むる事もなからまし」など、この御事にてぞおほきおとゞを怨めしげに思ひ聞え給へる。姫君の御さまのいときびはに美しうて箏の御琴彈き給ふを御ぐしのさがりば、かんざしなどのあてになまめかしきをうちまもり給へば耻ぢらひて少しそばめ給へる、傍めつらつき美しげにてとりゆの手つきいみじうつくりたるものゝ心ちするを宮も限なく悲しとおぼしたり。搔き合せなど彈きすさび給ひて押しやり給ひつ。おとゞ和琴ひき寄せ給ひてりちのしらべのなかなか今めきたるをさる上手のみだれてかい彈き給へるいとおもしろし。おまへの梢ほろほろと殘らぬに老御達などこゝかしこの御几帳の後に頭をつどへたり。「風の力蓋し寡し」とうちずじ給ひて「さんの手ならねど怪しく物あはれなる夕かな。猶あそばさむや」とて秋風樂にかき合せてさう歌ま給へる聲いとおもしろければ、皆さまざまおとゞをもいとうつくしと思ひ聞え給ふに、いとどそへむとにやあらむ、くわざの君参り給へり。「こなたに」とて御几帳隔てゝ入れ奉り給へり。「をさをさ對面もえ給はらぬかな、などかくこの御學問のあながちならむ。ざえの程々より餘りぬるもあぢきなきわざとおとゞもおぼし知れることなるを、かくおきて聞

え給ふやうあらむとは思う給へながら、かう籠りおはするごとなむ心苦しう侍る」と聞え給ひて「時々はことわざし給へ。笛の音にもふることは傳はるものなり」とて御笛奉り給ふ。いと若うをかしげなる音に吹きたてゝいみじうおもしろければ御琴どもをばまばしとゞめておとゞははうしおどろおどろしからずうち鳴らし給ひて萩が花ずりなどうたひたまふ。「大殿もかやうの御遊に心とゞめ給ひていそがしき御政どもをば遁れ給ふなりけり。げにあぢきなき世に心の行くわざをしてこそすぐし侍りなまほしけれ」などのたまひて、御かはらけ参り給ふに暗うなればおほとなぶらまゐり、御湯漬くだものなど誰も誰も聞しめす。姫君はあなたに渡し奉り給ひつ。強ひてけどほくもてなし給ひ御琴の音ばかりをも聞かせ奉らじと今はこよなくへだて聞え給ふを「いとほしき事ありぬべき世なるにこそ」と近う仕うまつる大宮の御方のねび人どもさゝめきけり。おとゞ出て給ひぬるやうにて忍びて人に物のたまふとて立ち給へりけるを、やをらかいほそりて出で給ふ道にかゝるさゝめきごとをするに怪しうなり給ひて御耳とゞめ給へばわが御上をぞいふ。「かしこがり給へど人の親よ、おのづからをれたることこそ出てくべかめれ。子を知るはといふは空言なめり」などぞつきじろふ。あざましくもあるかな、されば よ、思ひよらぬことにはあらねどいはけなきほどにうちたゆみて、世はうきものにもありけるかなと氣色をつぶつぶと心を給へど、音もせで出で給ひぬ。御ささおふ聲のいかめしきにぞ「殿は今こそ出でさせ給ひけれ。いづれの隈におはしましつらむ。今さへかゝるあだけこそ」といひあへり。さゝめきごとの人々は「いとかうば

しき香のうちそよめき出でつるはくわざの君のおはしましつるとこそ思ひつれ。あなむくつけや。まりうごとやほの聞し召しつらむ。頗はしき御心を」とわびあへり。殿は道すがらおぼすに、いと口をしく惡しきことにはあらねど、珍しげなきあはひに世の人も思ひいふべきこと、おとゞの強ひて女御をおしまづめ給ふもつらさに、わくらはに人にまさることもやとこそ思ひつれ、妬くもあるかなとおぼす。殿の御中の大かたには昔も今もいとよくおはしながらかやうの方にては挑み聞え給ひし名殘もおぼし出でゝ心うければ寢覺がちにて明し給ふ。大宮もさやうの氣色は御覽ずらむものを世になく悲しうおぼし給ふ御うまごにて任せて見給ふならむと、人々のいひし氣色をめざましう妬しと思すに御心動きて少しをゝしうあざやぎたる御心には鎮めがたし。二日ばかりありて参り給へり。おきりに参り給ふ時は大宮もいと御心ゆき嬉しきものにおぼいたり。御尼びたひ引きつくろひうるはしき御小袿など奉りそへて、こながらも恥かしげにおはするひとざまなればまほならずぞ見え奉り給ふ。おとゞ御けしき惡しくて「こゝにさぶらふもはしたなく人々いかに見侍らむと心おかれにたり。はかばかしき身に侍らねど世に侍らむかぎり御めかれず御覽ぜられ覺束なきへだてなくとこそ思ひ給ふれ。善からぬものゝうへにて怨めしと思ひ聞えさせつべきことの出でまうで來たるをかうも思う給へじとかつは思う給ふれど猶おづめ難く覺え侍りてなむ」と涙おしのごひ給ふに宮けさうじ給へる御顏の色たがひて御目もおほきになりぬ。「いかやうなるとにてか、今更のよはひの末に心おきてはおぼさるらむ」と聞え給ふもさすがにいとほしけれ

ど「頼もしき御かげに幼きものを奉りおきて自らはなかなか幼くより見給へもつかず、まづめに近きまじらひなどはかばかしからぬを見給へ歎きいとなみつゝさりとも人となさせ給ひてむと頼みわたり侍りつるに思はずなることの侍りければいと口惜しうなむ。誠に天の下ならぶ人なき有職には物せらるめれどまたしきほどにかゝるは人の聞き思ふ所もあはつけきやうになむ。何ばかりの程にもあらぬなからひにだにし侍るをかの人の御ためにもいとかたはなることなり。さしはなれさらさらしう珍しげあるあたりに今めかしうもてなさるゝこそをかしけれ。ゆかりむつび拗けがましきさまにておとゞも聞きおぼす所侍りなむ。さるにてもかゝる事なむと知らせ給ひて殊更にもてなし少しゆかしげある事をまぜてこそ侍らめ。幼き人々の心に任せて御覧じ放ちけるを心うく思う給ふる」と聞え給ふも夢にも知り給はぬことなれば淺ましうおぼして「げにかうのたまふもことわりなれどかけてもこの人々のしたの心なむ知り侍らざりける。げにいと口惜しきことは、こゝにこそまして歎くべく侍れ。諸共に罪をおほせ給ふは恨めしきことになむ。見奉りしより心殊に思ひ侍りてそこにおぼし至らぬことをもすぐれたるさまにもてなさむとこそ人知れず思ひ侍れ。物げなき程を心の闇に惑ひて急ぎ物せむとは思ひよらぬことになむ。さても誰かはかゝる事は聞えけむ。善からぬ人の事につきてきはだけく おぼしのたまふもあぢきなく空しきことにて人の御名や穢れむ」とのたまへば「何のうきたることにか侍らむ。さぶらふめる人々もかつは皆もどき笑ふべかめるものをいと口惜しく安からず思ひ給へらるゝや」とて立ち給ひぬ。心

知れる人はいみじういとほしく思ふ。一夜のまりうごとの人々はまして心地も違ひて何にかゝるむつ物語をしけむと思ひ嘆きあへり。姫君は何心もなくておはするにさし覗き給へればいとらうたげなる御さまを哀に見奉り給ふ。「若き人といひながら心幼く物し給ひけるを知らでいとかく人なみなみにと思ひける我こそまさりてはかなかりけれ」とて御めのとどもをさいなみ給ふに聞えむ方なし。「かやうの事は限なき帝の御いつきむすめもおのづからあやまつためし昔物語にもあめれど氣色をまり傳ふる人さるべきひまにてこそあらめ。これは明暮立ちまじり給ひて年頃おはしましつるを何かはいわけなき御程を宮の御もてなしよりさしすぐしても隔て聞えさせむとうちとけて過ぐし聞えつるを、一昨年ばかりよりはけざやかなる御もてなしになりにて侍るめるに若き人とてもうちまぎればみ、いかにぞや、世づきたる人もおはすべかめるを夢に亂れたる所おはしまさじめれば更に思ひよらざりけること」とおのがどちなげく。「よしまばしかゝる事漏さじ、隠れあるまじきことなれど心をやりてあらぬ事とだにいひなされよ。今かしこに渡し奉りてむ宮の御心のいとつらきなり。そこたちはさりとも、いとかゝれとしも思はれざりけむ」とのたまへばいとほしき中にも嬉しくのたまふと思ひて「あないみじや、大納言殿に聞え給はむことをさへ思ひ侍れば、めでたきにてもたゞ人のすぢは、何の珍しきにか思う給へかけむ」と聞ゆ。姫君はいと幼げなる御さまにて萬に申し給へどもかひあるべきにもあらねばうち泣き給ひて、「いかにまてかいたづらになり給ふまじきわざはすべからむ」と忍びてさるべきどちのたまひて大宮